

今更恨んでも甲斐なき事と思ひ返してゐた。大將は朝夕に六條院へ出入してゐるが、瑠璃君の心は日に添へて鬱々を加へる。源氏の思わく、兵部卿宮の深かつた情なきが思はれる。源氏はこれで人々の疑惑の眼を逃れた事かと思ふに安心したものゝ、その人を思ふ心はなほ絶えない。或日大將が居ない時を見て源氏は瑠璃君の所へ來た。面瘠せた女が脇息に倚つてゐる姿態をまたなきものゝ見るにつけ、人の妻にしてしまつた事が悔いられる。

「陛下も切に仰しやるし、大將の家へ行つてしまへばもうだめだから、やはりこゝから一度宮中へいらつしやる事にしよう」なき源氏はいふ。大將は女の宮仕を好まないけれど、却てそれが女を我が家へ引取るくゞりにもなると思つたので、一時の奉仕を許した。

大將は夫人の歎きも顧みず、愛子の事も放つておいて今は瑠璃君に夢中になつてゐる。それを引取る準備として家の修理に着手し今まで荒れるに任しておいた部屋の裝飾や種々の調度なきの手入をさせて居た。夫人は容貌も見苦しくはない、人品も備はつてゐる、たゞ近來物怪に憑かれたのか、時々氣狂じみな發作がおこるので、そんな事から夫婦の間に氣まづい思が募つ

て行つたのである。でも夫人としての地位は保つてゐたのだが、美しい瑠璃君に心奪はれてはもう夫人は大將にまつては路傍の人のやうに映る。夫人の父式部卿宮はそれを聞いて、新しい妻を迎へて花々しく暮す家に外聞悪く小さくなつてゐるよりはさいつて、邸を修理して引取る準備をしてゐられる。夫人は夫の家を出てゆく事の淺ましさに、氣分もますます勝れぬやうになつて行く。部屋なきも亂雜になり放題に放つておいて、そこに始終寢てゐるのを、六條院の清らかさに見くらべては大將も不快には思ふものゝ、さすがに長年連れ添うてゐる夫人にて強ちに打ち捨てゝしまふ氣もなく、

「あなたがかうして病氣がちなので、云はうと思ふ事も云ひ出し悪い。あなたを私が捨てゝしまふなんて、有り得べき事でないでせう。それに宮があなたを引取らうと仰しやるのはさうもち御輕卒ぢやなからうか。暫く私を懲しめるおつもりかしらん」なき笑ひながら云ふのを、夫人は妬しく聞いてゐる。夫人は父宮の事を惡しざまにはれて大將を惡らしいと思ふ。勘ねて彼方をむく夫人の髪の長い惱みの爲めにぬけおちてゐるのが痛々しかつた。大將はしんみり

した氣分になつて一日病夫人の傍について慰めてゐた。

日が暮れるに、大將の心は浮き立つて、心は六條院へ飛んで行く。雪が降り出した。大將はさうしたものか縁近く出て格子の下りてゐない隙間から外を眺めてゐる。夫人も夫の心を察してその外出を憊憊するのだが、かうしたしほらしい夫人の態度を見るに、ふり切つて出て行く氣にもなれぬ。夫人は火爐を取寄せて大將の外出着に香を薫きしめてゐる。

「雪が一寸上つたやうだ。もう大分更けたな」なき家來達のいふ聲もきこえる。重い心に横になつた夫人はつゝ起き上つたと思ふそこにあつた爐の火取を手にするや否や出てゆく夫を目がけて抛つた。驚いた大將は目鼻に舞ひ込む細い灰を袖で拂はうとすれど、四邊に濛々舞ひ立つ灰神樂は如何にもし難い。例の發作が起つたのだと女達も氣の毒に思ふ。大將は着かへはしたけれど頭から灰をかぶつたので、もう六條へ行くわけにはゆかなかつた。夜中だつたけれど僧を請じて祈禱なごさせた。夫人の發作は今度は中々靜らない。大將は成るだけ傍へ行かぬやうにして家にゐても三人の子を相手に暮してゐた。上が女で、十二、あとの二人は男である。

こんな事が聞えて宮は夫人を迎へによこした。丁度その發作の治つてゐる時だつた。三人の子を呼んで一所に車に乗らうとする。豫期してゐた事ながら、いざとなれば涙が先立つ。

「荒れ模様になつて來た。早く」と迎に來た弟達に促されて夫人は立ち上つた。十二の女の子——眞木柱の君は父を見ずに出るのが悲しかつた、それに常に倚り添ひ馴れた柱なきにさへ絶ち難い愛着を感じて、

今はこゝで宿かれぬとも馴れ來つる眞木の柱は我を忘るな

と書いて笄で、柱の割れ目におし入れておいた。また見る事はない宿だと思へば、車に乗つてもまた顧みられる。

大將は夫人が里に歸つたのをきいて、子供もあるし旁々も一度家へ戻さなければと思つて式部卿宮を訪ねたけれども、宮は面會もされない。娘にだけでもあひたいと思つたが、それも叶はなかつた。二人の男の子だけを伴つて歸つた。長男は十、次男は八つ、これは娘にも似てゐた。

かうした騒ぎに瑠璃君の心も浮かすがちであつた。その宮仕も延び／＼になつてゐるが、いよ／＼正月になつて御所へ上つた。承香殿の東の方にお局を賜つた。踏歌の日に大將は瑠璃君に宿へ下れといふのだけれど、瑠璃君はそれを拒絶つてしまつた。

帝が瑠璃君の局へおいでになる。帝も疾くからこの人に見ゆ戀に憧憬れておいでになつたのだ。その人が今お目のあたりに居るのだと思ふ。帝の御心は怪しく浪打つのであつた。けれどもその人はもう人妻になつてゐるのだと思へばうちつけに思ふ心を語る事もならないのを帝は悲しき思召した。大將は帝が尙侍の局へおいでになつた事を聞いて醜いまでに周章して、さうしても今夜下らうと勸める。尙侍も今はそれがいゝやうにも思つた。で、父内大臣から陛下によく申しとお暇を得た。

源氏は瑠璃君が右大將の邸へ引移つてからもその人を思ひ忘れる隙はなく、三月になつて藤や山吹の頃は、瑠璃君のゐた御殿を懐しみ、竹の垣根に咲きかゝる匂を美しき見つゝ、ありしそのかみを偲ぶのであつた。

大將の前夫人は實家に歸つてから、なほ病氣はひきくなつて行つた。大將は別れて行つた妻に對する何かの仕送りは絶えず心掛けてゐた。眞木柱は祖父母や母が父を許す心のないのを悲しく思ひ、時々父の所から來る弟達が、

「今度のお母様はね私達をかあいがつて下さるよ」なきいふのをきき、何もなく捨てゝ來た父の家が戀しく思はれる。

十一月に瑠璃君は男の子を生んだ。大將は元より父内大臣も喜んだ。柏木も姉が宮仕をしてゐて、若宮をかう抱いたのだつたらなき思ふ。

例の近江君もだん／＼色めいた心を抱く。女御はこの人がどんな事を仕出來さうかと思氣を揉んでいらつしやる。ある時若い人達がこの女御の御殿へ集つた時、夕霧も參會して例になく打ち解けてゐた。近江君は人々を押分けて男達の居る方の簾際に行く。女達は驚いて制止しようとするが、そんな事にはかまはずに覗いて見てあの人だ／＼なきいうてゐる。夕霧はこれが噂にきく近江君ぞ知つて、

沖つ船よるべ浪路にたゞよはゞ棹さしよらん泊教へよ  
なきいつた歌に對して

寄るべなみ風のさわがす船人も思はぬ方に磯つたへせず  
なきはしたなむのであつた。

梅 枝

明石姫君の裳着の準備で、六條院の此頃は繁忙を極めてゐる。東宮の元服も二月三といへば、やがて姫君がその女御に備るのだらう。正月末で朝廷の勤務も暇なので、源氏は薰物を合せる。三條の倉を開けさせて、そこに貯へてあつた古い香を取り出して準備を急ぐ。源氏以下夫れ夫れ傳へた秘法によつて二種づゝの香を合せる。

式の日も押し迫つた二月十日に兵部卿宮が來た。雨がそほ降つて軒端の紅梅の花盛の頃である。朝顔前齋院から香を持たせてよこした。これを機會に人々の合せた薰物を集めて薰き競べ

てそのよし悪を兵部卿宮に判じてもらはうと源氏は思つて、使をやつてそれを集めさせた。朝顔のも花散里のも、明石上のも、紫上のも、そして源氏自身のも、皆それ／＼懐かしい香がする、えもいはぬ香がする、判者の宮は褒めてゐた。霞める月影の床しきに雨の名残の風も少し出て花の香も妙に薫る。あちらでは明日の式樂の練習をしてゐるを見えて、笛の音も面白くきこえる。夕霧や柏木やその他の公達も來て、琴を弾じ笛を吹く。柏木の弟辨少將の謠うた催馬樂梅枝は時節柄面白かつた。

翌日は式の當日である。腰結は秋好中宮に頼んだので、場所も中宮の御殿に決まつてゐたので、源氏も夜八時頃にそちらへ出た。この時に紫上も初めて中宮にあうた。式は夜半に行はれた。明石上が今晚の式に列し得ないのを源氏は飽かず思つて呼ばうかとも思つたけれど人の口の端も煩さいので、それだけは見合せた。

東宮の元服は二十日過だつた。左大臣や左大將なきもわが娘を東宮の後宮にこは思つたものゝ源氏の姫君が上るらしいので、こうせ競争しても及びもつかぬ事と思つて遠慮してゐるこい

ふ噂を源氏は聞いて、姫君の宮仕を延期したので、まづ左大臣の三の君が上つた。麗景殿にお局を賜うた。

いよく源氏の姫君は四月に東宮に参る事になつた。お局は桐壺を決つた。その準備として源氏は諸道の名人に頼んで調度なきを新調してゐた。なほ草紙の箱に入れる手本をあれやこれやを選んで、紫上に

「何でも昔の物が優れてゐるやうだが、假名文字だけは今の方がうまいやうですね。」なまご云つて、「誰れ彼れも皆一塵勝れてはゐるが、さて手本を書くになるに、院の時の尙侍に前齋院にあなたよりないね」なまごつゞける。さて方々へその旨いうて遣る。夕霧や柏木なまごにも葦手歌繪なまごを書かせ、自分も寢殿の一間に居て、一三人の女房に墨を磨らせ、脇息の上に書物をおいて古歌なまごあれかこれかを選んでゐる所へ、兵部卿官が來た。例の手本を持たせて來られたのだ。見るに大へん立派な出來だつた。その他誰彼のものも大方揃うたので、装幀にも念を入れさせた。

かうした源氏の方の準備の事なまご聞くにつけ、内大臣は雲井の雁の事が口惜しい。雲井の雁もだん／＼大人になつてゆく、こんな事ならあの時夕霧に許しておいてもよかつたなまご少し心は折れて來た。夕霧は女を思ひ忘れる折してはないけれど、内大臣に對してはわざ／＼冷淡を装うてゐる。せめて中納言になつてからに、昔卑官をいひたてにされた事を忘れない。

その頃中務宮や右大臣家から夕霧を彈にまゐふ申出があつた。源氏はいつそさうした方が得策だらうと夕霧に勸めるけれど、夕霧はさうしてもさういふ心になれないのであつた。女も近頃父が特に自分の身の上を心配してゐるのを感じて悲しいと思つて、時々思ひ餘る時は男に手紙を書いてゐた。内大臣や中務宮から源氏へ縁談を申込み、源氏もそれに心が傾いてゐるに聞いては胸を躍らせずにはゐられない。

「こんな噂を聞いたが情ない人の心だね。きつ／＼以前こちらへ話のあつたのを謝絶つた面當てだよ。それにしても今更此方で折れる事も出來ないし」なまごいうて涙ぐむ父を見るにつけ、雲井の雁は恥しいやら悲しいやら、面を背けぬわけに行かなかつた。夕霧から手紙が來た。その

事は氣もない書き様である。

かぎりこて忘れ難きを忘るゝもこや世に靡くこゝろなるらん  
こんな歌を雲井の雁は返した。

### 藤 裏 葉

明石姫君の事で忙しくしてゐる中にも、夕霧はこもすれば戀人の事が思はれて、ほんやりしがちなのを、自分ながら怪しからん事だと思ふ。雲井の雁も父から中務宮の事なご聞けば、かくてわが戀の終焉が来るのかと悲しく思はれる。内大臣は何かご考へに考へた末、やはりこの二人を結ぶより策はないと思つて、その時機の來るのを待つてゐた。

三月二十日が母宮の年忌なので、極樂寺へ一族の人達は參詣した。夕霧も勿論行つたが、その人品さいいひ何さいいひ、殊に儕輩に拙で、見えた。内大臣も常よりもその姿に心がこめられた。夕方皆かへる頃、霞のまをこめてひらくこ散る花の風情を、人々が雨が降りさうだこ立騒ぐ

中に、じつこ眺め入つて夕霧は立つてゐた。

「近頃は太へん私に疎々しくするぢやないか。だんこ先が短くなつて來たこの伯父を、いつまでも怒つてゐるすに、許してくれないか」なご内大臣は傍へ寄つて來て云ふのであつた。

「祖母様のお言葉もあつたのですが、伯父様が私を疎外なさる様なので、つひえ參らなかつたのです」なごいうてゐる中に、雨風が襲うて來たので、散りこに別れて歸つた。夕霧の心には此日の伯父の態度が謎こなつて残つた。

「四月の初旬、内大臣家の藤が美しく咲いたので、そのまゝ見過すのも惜しく、藤花宴を催さうこ、柏木をこ使こして夕霧を招いた。

わが宿の藤の色濃き黄昏にたづねやは來ぬ春の名残を

これは内大臣からの歌であつた。夕霧は柏木を先に歸して、源氏の前へ伯父の手紙を持つて相談に來た、その胸の鼓動が高まるのを感じつこ。

「何か内大臣も考があつての事だらう。これで萬事の解決がつくぢやないか」こ源氏はいふ。

そして「折角の請待だもの、早く行つたがい、でせう」なきいつて、自分の着料こして作つておいた上等の直衣を出して與へた。

夕霧が大臣家へ着いた時は、もう黄昏時も過ぎて、先方では待ち草臥れた頃であつた。さすがに打ち優れてゐたその容姿よ。内大臣も着物を更へて對面した。眞面目な挨拶なき暫くの後に宴に移つた。

「春の花はどれも皆美しいが、すぐ散つてしまふのが怨めしい。それにこの花がかう夏かけて咲くのが大へんおもしろいと思ふ」なき大臣はにこ／＼していふ。月は出たが花の色は、つきりとも見えない。大臣は夕霧に酒を強ひてゐるが、やがて藤のうら葉のミ口吟むこれは（古歌に春日さす藤のうら葉のうら解けて君し思はゞ我も頼まんこある心であらう。）するに柏木は心得て色濃き花房の長いのを折つて夕霧の盃持つ手に捧げた。

宴の果てた時はもう大分夜も更けてゐた。夕霧は酔つた風をしてこゝに泊つた。柏木の案内で夕霧は絶えて久しい戀人に逢ふ事が出来た時はほんこに夢かと思はれた。女はさすがに恥し

と思つてゐる様子が愛らしかつた。翌朝は型の通りの消息の贈答などもあつた。源氏もそれを聞いてまあよかつたと思つて、しみ／＼と將來の事などいふて聞かすのであつた。この二人の對坐を他所から見ると、とても父子とは見えない。

かくて六條院の姫君が東宮へお上りになるのをこの二十日過と決つた。その前に紫上は加茂祭の見物に出かけた。二十臺ほど車を連ねて行く。明石上や花散里なども誘うたが來なかつた。源氏は昔六條御息所の事がむげに押しつけられた事など今更のやうに思ひ出された。當日の勅使として參候する近衛司は柏木で、内侍使は藤與侍であつた。この人は惟光の女で、夕霧とは忍び／＼に思ひ合うた中なので、雲井の雁の事をほの聞いて面白からず思つてゐるのであつたが丁度今の勅使として出ようとしてゐる所へ夕霧から消息があつた。相見る機會の久しくなかつた事をいうて來たのであつた。かうして夕霧はこの典侍を思ふ心は、雲井の雁との戀を得た今日もなほかはらないのであつた。

若い女御方の入内には母が暫く付き添つてゐるのが例とて、今度も紫上がさうすべきではあ

つたが、それでは長く宮中に居る事も出来ないで、いつそその機会に明石上を後見に添へたらどうだらうと源氏は紫上に相談した。紫上もかう長く引き離しておくのもお互の爲めにいけなからうと思ふので、源氏の提議を拒む心はなかつた。明石上もその事を聞いた時は心から喜んだ。そしてその準備など何かと急ぎ立てゝするのであつた。たゞ母なる尼がも一度この姫君を見たいと命をかけて思うてゐるその念の遂げられる日が来さうもないのが悲しかつた。

入内の夜は紫上が随いて行つた。その儀式のきら／＼しさ。成るだけ簡単にとは思へど、自然さうはならぬのである。姫君の愛くるしさ。これが實子だつたらと紫上は限なく不満を感じた。さう思ふ心は源氏も夕霧も同じであつた。三日経て紫上は六條へ歸つて、明石上と交代した。その夜はじめて宮中で二人は逢うて、敬愛の心はお互の心の中に湧いたのである。明石上はお雛様のやうな小さい女御を見るにつけ涙がまづ零れる。東宮はこの人を最も戀しい人と思召した。何かにつけて明石上の賢明な用意は源氏をこよなく喜ばせた。

心にかゝつてゐた姫君の入内も済み。夕霧の身も固つたので源氏はもう此の世に思ひ置く事

なく、心長閑に出家の本意を遂げる事も出来るやうになつた自分を嬉しと思ふ。

來年源氏は四十になるので、その賀筵の事で帝を始め天下の人達は準備を始めてゐる。その秋、帝は特別の御詮議で、源氏に太上天皇に準ずる待遇を賜つた。帝位をまでお譲りになりたい御心は今も變らないけれど、それも出来ずに、かうした御待遇だけで御心を慰めていらつしやるのであつた。内大臣は太政大臣に上り、夕霧は中納言に上つて、祖母宮の三條殿を修理して、そこへ移つた。昔の幼かつた頃の思出が今更ながら二人の心に甦つて来る。

十月の二十日すぎに帝は六條院へ行幸になつた。丁度紅葉の盛りの事にて、院の御所へも帝から御誘引のお使が行つて、お揃でお出ましなので世人も驚異の目を見張つてゐた。行幸は午前十時の頃だつた。庭の紅葉はさこもてよく照つてゐない所もない中に、中宮の御殿のは殊に色がよいのを見通すやうに、隔ての廊の壁を崩し、中門も開けておいたので、玉座からはよく見えた。源氏の座が帝・院のより下様だつたのと同じ様に直すやう帝は仰しやつた。お盃は幾めぐりして陛下も少し酔ひになつた頃日も暮れかゝつた。やがて伶人の樂が始つた。わざと重々



しい舞樂なごはせず童舞をしたのである。昔朱雀院の紅葉賀の折を思ひ出て、源氏は菊を折つて

色まさる籬の菊もをりくくに袖うちかけし秋を戀ふらし

なご詠んだ。夕風が吹いて淡く濃く紅葉散りしく庭の面に美しい童が舞ひつゝ、紅葉の影に歸る。やがて管絃の御遊がはじまる。帝の御容姿のますく整うて美しくお見えになるが、源氏もたゞ一つと思はれて夕霧がぢつと見てゐる、その顔がまた帝と酷似してゐる。夕霧は笛を吹く。歌うた歌上人の中、ここに柏木の弟辨少將の聲がすぐれてゐた。

若 菜 上

朱雀院の先帝は先程の六條院御幸の後つゞ御氣分が勝れなかつた。元來お羸弱い御生れつきだつたが、今度はこても本復もむつかしからうと思召してこの際御出家の本意を遂げたいなごお考になつた。院にはお子様こては今の東宮の外には内親王がお四人おありになつたが、そ

の中でも三宮の事が一番お心にかゝつて御出家の邪魔となるのであつた。その御生母は源氏宮こて故薄雲女院の御妹であつたが、后にもお立ちにもなれず不遇の中に亡くなられたので、院はこの三宮の事を殊にお御心にかけていらつしやるのであつた。お年は今年十三四になる。院はやがてそこに籠り給ふべく西山に寺院の造營も終へられて、何かの準備をなさる共この宮の裳着の事を急ぎに急いで、院の中の調度なごも目ほしい物は皆この宮にお譲りになつた。年の暮に近くにつれ、院の御惱はますく重つて近頃はもう御簾の外にお出ましになる事もむつかしいやうな御容態である。六條院の源氏からも屢御見舞のお使も來た。ある時夕霧が來た時なご大そうお喜びになつて、是非源氏に逢ひたい事もあるから近日中に来てくれる様なご御傳言があつた。女三宮の將來を托すべき者は源氏を措いて外にないと思召したからである。夕霧の頼もしけな有様を御覽になつては、もしこの人が太政大臣の掣になつてゐないのならこも思召すけれご、やはり源氏の外には托すべき人はないと思ひ返しになるのであつた。實は龔に瑠璃君に失敗した兵部卿宮もこの宮を得たいと思つてゐられたのだし、柏木は殊に熱心に

叔母の臘月夜を通して求婚してゐるのだが、院も御心動かぬではないが、衛門督といふ卑官に居るのを嫌す思召すのであつた。東宮もこの宮の事については御心を遣うてお出になつたが、やはり源氏に托するのが得策だらうといふ意見にお傾きなので、院はいよ／＼さうしようし御決心になつて、女三宮の乳母の兄左中辨が六條院にも親しく出入してゐるので、それを介して源氏の内意をお問はせになつた。

「それは心苦しい事だ。院も私に何程もお年が違ふでもなし、私におあづけになつたまでさほご御安心もいくまい。御結婚なき恐縮の事ぢやないか、さうまでしなくとも充分御面倒を見たい、ぢやないか。私の中納言なきこそその御依託を蒙るべきなのに、もう妻帯してゐるさうなので御遠慮なすつたのだらうか」なき源氏はいうて、「それより帝にお上げになるのが一等いゝだらうなき私は思ふ」なきいふのであつた。

女三宮の裳着の式は年末に行はれた。太政大臣が腰結の役をつこめた。中宮からも、六條院からもその他御祝ひの品は多く贈られた。この式が済んで三日目に朱雀院は御剃髪になつた。

尙侍始め人々はかうして御様の變るのを見ては今更ながら泣かれた。院はそのまま、寺にも籠らうと思召した。けれども、若い女三宮を思うては、暫く以前のまゝに朱雀院においでになつた。

源氏も院の御病氣が少閑を得てゐるを聞いて、お見舞がてら参院した。太上天皇の待遇は得てゐるが、わざと目に立たぬ様にして來た。院は大そうお喜びになつて、何か御物語の末に女三宮を源氏に托したい、さうぞ妻にしてくれるやうになさお頼みになつたので、源氏もおこさわりする事も出來ず、遂にそれを承知してしまつた。夜に入つて、御前で精進物の晚餐の御饗應があつた。僧の用ひる食器で召上る院の御様子を拜して人々は暗涙に咽ぶのであつた。

源氏はこの事を紫上に打明けようと思ひながらその夜はそのまま、寢て、翌日雪が降つてしめやかな物語の序にその話をした所が、

「あはれなお話ですここ。私がさうして心置く事なきありませう。たゞ女三宮の方で私をお憎しみにさへならなければと思ふだけですわ。でも私に宮様の御生母は私には叔母様ですからそんなにお疎みになる事もありますまい」なきおこなく云つて呉れたので源氏は嬉しく思つた。

年も改つた。正月二十三日の子の日に瑠璃君から若菜を源氏に献じた。今年は源氏の四十の壽筵を方々で企てるのを、さうした表立つた事を好まぬ源氏は皆謝絶つてゐるのだけれき、不意にして来たこの賀は受けないわけには行かなかつた。南の御殿の西の部屋をその式場としてきらびやかに式は行はれた。瑠璃君の二子にも逢うたにつけ、わが身の老いゆく事が思はれて源氏はかうした賀筵を嬉しくも悲しくも思ふのであつた。朱雀院の御病中を憚つて樂人なごも故らには召されなかつた。

二月の中旬に女三宮が六條院へ御入輿になつた。宮のお居間は正月に若菜の壽筵のあつた部屋に定められた。儀式は入内の式に則つて行はれた。三日の間の祝宴は朱雀院からも六條院からも賑々しく行はれた。この間紫上はさすがに憐々として暮してゐた。それから紫上にはこそすれば獨寢の夜が多くなるにつれ、須磨の別れの時の事なご思ひ合はされて悲しかつた。

朱雀院はその月の中にいよく寺にお入りになつた。源氏へも紫上へも幼い女三宮を心もこなく思ふにつけ、末長く面倒を見てくれるやう、その人の事だけが出離のほだしこなるこいふ

やうな丁寧なお手紙が来た。今までお側に奉仕してゐた女御たちもそこまで、お供をするわけにはゆかないので、それ／＼實家に歸つた。かの臘月夜の尙侍は皇太后の御所だつた二條宮へ移つた。院は女三宮に次ではこの人の事を願みがちに思召してゐた。尙侍も尼にならうこまで思ひつめたが、それは院からお止になつた。源氏は昔逢うた此の人の事がまだ忘れかねるので時々手紙を贈つてゐたが、それでは嫌らず、中納言さいふ女房を唆してゐた。ある夜粗末な網代車に乗つて出かけた。花は皆散りすぎて、木立はもう、淺緑せる頃であつた。池の水草がぐれに鳴く鶯鶯の聲もあはれに、人氣少ない宮の内に、十四五年を相別れてゐた二人の歡會よ。源氏が歸つたのは、もう日は山際を離れて、藤の花房がそよ吹く朝風にゆらめく頃であつた。かうした事にも紫上の物思ひは募る。

さきに東宮に上つた桐壺女御はもう懐妊して五月から里に歸つて来た。女三宮のゐる御殿の半分を區切つてその方に使ふ事になつた。紫上は實母のやうに育てた桐壺にあひに來た序に女三宮にも面會したが、それからはお互に手紙の贈答なごして親しく交るやうになつた。

十月に紫上が主となつて嵯峨の寺で源氏の四十の賀の爲に藥師佛の供養をした仰々しい事は切に源氏がこめてゐるので、式は極めて質素に執行はれた。最勝王經・金剛經・壽命經なき尊い聖經を誦誦して源氏の爲めに祈禱を凝す。二十三日はその精進明の日にて、特に二條院で饗宴が張られた。舞樂なきも盛に行はれた。夕霧に柏木も庭に下りて打連れて舞うて紅葉の蔭に入つたのはいゝ興ある事で、昔朱雀院の行幸に源氏に今の太政大臣がまだ若くして舞うた時の事を思ひ出して嘯く人なきもあつた。源氏も涙ぐましい心地になつて、薄雲女院も御在世ならば、われこそかうした賀をも行はうになき思ふのであつた。十二月には中宮が六條院へお歸りになつて、果ての賀をなすつた。南都の七佛寺、京畿の大寺に仰せて御供物なきも事々しくし給うた。丁度その頃右大將が病氣して辭したので、夕霧中納言がそれに任ぜられた。今度の賀に際して特に帝の思召によつたのである。

年が改つて、桐壺の出産が近づいたので、正月の初めから六條院では安産の祈禱をしてゐる。源氏は葵上の事からお産が非常に不安なものに思はれるのに、殊にまだ年もゆかぬ桐壺の事

て一層深くその事が氣遣はれるのである。二月頃から苦しむ日が多くなつたので、陰陽師の言に従つて明石上の御殿の方へ移る事になつた。部屋にいふ部屋には祈りの壇の立てられぬ所もない。明石の尼君は喜んでいつしか桐壺の部屋へ行つて、昔話をすつかりしてしまつた。桐壺はわが生ひ立の一伍一什を知り得て、更に過ぎ來し方を思へば、かくに心は亂れた。そこへ明石上は來て泣きぬれてゐる二人の様子に萬事が推量されて胸つぶれる心地がした。後の位にでも上られてから一切を打ち明けても遅くはなかつたらう。少し母尼君が早まつた事をして呉れたなき思つた。

三月十日過ぎて無事にお産があつた。男のお子様だつた。誰もく喜んだ。若い桐壺が親らしく若宮を抱いてゐる有様、かうした事に經驗のない紫上には一切が珍しかつた。産養の儀なき内裏からもその他方々から立派になすつた。源氏も若宮を抱き取りなき、日に添へて成長してゆかれるのを限なく愛でたし見てゐる。御乳母なきも充分嚴重な人選をしてお附け申してゐた。

明石入道も今度の慶事を傳へ聞いて、世を捨てた心にもさすがに嬉しく、今は全く此世に執着はないと、住んでゐた家を寺として、附近の田は全部寺領として、自分はこの國の奥に人もえ通はぬ深い山の中へ籠らうとして、もう誰にも再會をしない覺悟で、最後の消息を認めて都なる娘に送つた。こんな事が書いてあつた。

同じ世に居ながら、私はよく／＼の大事でない限りあなた方の消息を聞かうとはしなかつたのはその間にも念佛を懈怠しようかと思つてゐた。聞けば姫君は東宮に參つて若宮を生まれたさうな。誠にめでたい事である。この年比私は自分の成佛の願を措いて、偏にあなただの事のみ念じてゐたのだ。實はあなたの生れる年の二月のある夜の夢にこんな事を見た。私が右手に須彌山を捧げてゐる。山の左右に日月の光がさし出て世を照らしてゐるが、自分は山の下蔭にあつてその光に當らず、山を廣い海に浮べて小舟に棹さして西の方に漕ぎ去る。さめて私はいつしかさうした時に逢ふ自分を考へる様になつた。その後内典外典を耽讀するにもこの夢を信すべき節が多いので、あなたの行末に心をこめてゐた。姫君が生れてからは

その運命を住吉の神かけて祈つてゐた甲斐あつて今日の喜びにあつた。自分の所願は既に満じた、未來の往生も疑ない。今はたゞ來迎の日を心靜に水草清き山の奥に勤行しつゝ待たうと思ふ。

光出でん曉近くなりけり今ぞ見しよの夢がたりする  
さ書いて終に月日が明記してあつた。その外に後世を勧める文なきもあつて、ありし日住吉に奉りし願文を沈の箱に入れて持たせて寄越した。尼君へはごく簡単な手紙があつた。けである。明石上は母と二人父の遺書を見て悲しみつゝ、桐壺にも明石上からその遺書を見せてゐる。源氏が來た。源氏も入道の手紙さては願文なきを見て今更ながら入道の志をあはれと思はずには居られなかつた。

夕霧は女三宮をかけても思はぬでもなかつたので、それが父の妻になつてしまつたについては何もなく不快ではあるが、さうした心地をおし包んでそちらの用事なきも勤めてゐるが、つらく／＼紫上の御殿の模様と比べては、その主なる人の人品も一段と隔つてゐる如く思はれて、

かの野分の朝に垣間見た人の俤が懐まれる。柏木も院に親しく参つてゐたので女三宮に對する愛着も一しほ深いのであつたが、今六條院で紫上が限なく時めいて、こもすればこの宮も氣壓されがちなのをあるまじき事に思つて、同情の念は日に／＼増してゆく。

麗かに晴れた三月のある日、源氏がつれ／＼を佗びてゐる時兵部卿宮や柏木達が來た。折ふし彼方にゐる夕霧をも呼んで、此方で蹴鞠を遊ぶ。けられた鞠に咲き亂れた花が散りかゝる。えもいはぬ夕暮の長閑けさ。中に柏木が目立つてうまい。

「花が散りますよ。なる丈け花の傍へ鞠をよこさない様になさい」なき云ひつゝ、柏木は女三宮の居る方の御簾を尻目に見やる。簾を洩るゝ美しい袖口の色、几帳なきも除けて人のけはひも端近けである。こゝの猫が大いのに追ひかけられて、簾の外へ飛び出した。女達は騒いでゐるのだらう、さやく／＼衣ずれの音がする。猫は人馴れてゐないのらしく、つけられてゐる長い綱をひいてくる／＼逃げ廻る拍子に簾が一枚跳ね上げられた。部屋の中は此方の階段に腰かけてゐる柏木と夕霧には顯はに見えた。几帳の所を少し奥まつて桂姿に立つてゐる人の美しさ。

柏木は胸塞がるやうな氣持になつた。誰か猫の綱を解いてやつたのかつ、こゝ此方へ走つて來る猫をひし／＼抱いた柏木はせめての心やり／＼それを思ふ。

その後柏木の心は怪しく今更にその人を思ふ様になつた。

よそに見て折らぬ嘆きはしけれも名残り戀しき宮の夕かけ

こんな歌を女三宮の乳母なる小侍従に贈る。小侍従も柏木の心を哀れ／＼思つて、人なき折を見て女三宮にこの歌をお見せした。宮もかの夕を思つて頬のほてるのを感じた。小侍従から柏木へはこんな歌を走り書きに。

今更にいろにな出でそ山櫻及ばぬ枝に心かけきこ

若 菜 下

小侍従の走り書いた返書を見るにも、道理／＼は思へ／＼内に動く不満な心は除き去る事は出來ぬ。三月の末に六條院で小弓の會があつた。氣は進まぬけれも、せめてその人の住むあたりの

花を見ては慰む事もあらうか。柏木も行つた。暮れゆくまゝに今日を限りの春霞を吹く夕風に吹かれて亂れる花の蔭の立ちうくて、人々はすつかり酔ひ過ぎてしまつた。柏木はさうした人達の中に交つて獨り浮かぬけの面もちを、目ざきくも見て取つたのは夕霧だつた。過ぐる蹴鞠の日諸共に見入れた御簾の中よ、あれからかう右衛門督の物思ひが募つたのだ。知つてゐる彼は何さなき不安に襲はれたのである。柏木も目前に源氏の姿を見ては、かうした大それた考を抱く自分が空恐しく思はれる。誰れの女でも夫ある女に道ならぬ戀はすまいと思つてゐる自分が大膽にも源氏の妻なる女に横戀慕なきあるまじい事さ、我々我心を吐つて見ても煩惱の犬は去らぬ。思ひ餘つては、せめてもの心慰めにあの日の小猫でも得たいなき、物狂ほしく思ふのだけなきそれさへ容易な事ではない。

柏木は東宮の御前へ伺候した。御兄妹だから御顔なきも似てお出でかと思つたのであつたが、お上品ではあるがお美しさは女三宮には及び給はぬ。東宮の御許には猫が澤山飼はれてゐた。見るにも六條院の猫が思はれる。

「ちらり見たゞけではありましたが、六條院の姫宮様の所には大そうお立派な猫が居りました」なき申し上げるに、東宮はなほ詳しくその猫の様子をお問ひになるので、柏木は宮の好奇心を煽る様にお答してその日は下つた。元來猫のお好きな東宮は柏木の話にきいたその猫が見たくて、わが御息所なる桐壺を介して女三宮からそれをお賞ひ受けになつた。必ずさうだらうと思つた柏木は東宮にお琴なき御指南する爲めに参殿した序に、多くの猫の中から彼の猫を見つけ、て頭を撫でゝゐた。

「人見知りする猫で馴れなくて困る」東宮が仰しやるに柏木は

「猫が人見知りするなきあり得ない事でござりますが、やつぱり賢い猫なんでござりませう。私が暫くお預り致しませう」なき云つて抱いて家へ歸つた。小さい猫一疋の爲めにかくまで技巧を弄する自分を馬鹿らしくも感じられる。それから夜も晝もその猫を愛撫して措かない。

戀ひ佗ぶる人の形見さ手馴らせば汝よ何ぞ鳴く音なるらん  
なきいつて猫を懐に入れたりなきしてゐた。

こゝに左大將の夫人になつた瑠璃君は實の兄弟より柏木達より夕霧を親しく思つてゐたし、夕霧も桐壺なきよりこの人を眞實の姉弟のやうに思つて睦んでゐた。瑠璃君はもう二人の子の親になつたが、皆男の子ばかりなので、あの眞木柱君を養ひたいと思ふのだけれき、祖父の式部卿宮は頑としてそれを許さないのであつたが、眞木柱は氣の狂つてゐる母を悲しみつゝ、繼母の傍の華かさが慕はしかつた。式部卿宮は眞木柱のために聲を捜してゐられる。柏木に思へき、柏木は猫より外に今は心も向かないのだ。そこへかの兵部卿宮が、瑠璃君・女三宮とその戀人を次々に失つてまだ獨身で、もうさうした苦い經驗を嘗めたくないと思つて求婚して來たので、后にか然らずば親王妃にこゝうて式部卿宮はこの結婚を許した。處が兵部卿宮は亡夫人のやうな女を望んでゐたので、この眞木柱はそれと全で違つてゐた女なので、日を経るまゝにその熱はだん／＼冷めて行くのであつた。

今上は即位以來十八年におなりになつた。御位を繼ぎ給ふべき皇子もないのを淋しく思召し早く長閑な日を送りたいなき思つてお出でになつたが、この日頃御氣色が勝れない事なきがあ

つて、俄に御讓位の儀があつて、冷泉院においてになる事になつた。新帝の御代になつても政治上には先帝の時と何の變改もなかつた。たゞ太政大臣は致仕の表を上り、左大將が右大臣になつて關白となり、夕霧が大納言になつて左大將を兼ねた。桐壺女御のお腹の一の宮が東宮にお立ちになつたのは當然とはいへ、世人は今更にその慶事を祝ひ合つた。源氏はかうして何一つ不足はないのだけれき、冷泉院に皇子降誕の事のないにつけ、わが昔犯した罪が思ひ出されて、今更に哀れにも物淋しく感じられるのであつた。

六條院ではその後も平穩の日があつた。女三宮の事は帝が萬事面倒を見ていらつしやるが紫上は又格段な地位を六條院では保つてゐた。宮に紫上の中もそれらの人達と源氏の中も圓滿ではあつたが、賢い紫上はかうした煩しい住居を去つて閑靜な所で念佛三昧に暮したいと源氏に請ふのだけれき、源氏はさうしても許さなかつた。

源氏は女御のお祈の爲めに住吉に詣でようと思ふ。十月二十日頃であつた。女御と紫上とは源氏と同車し、次には明石上母子が乗り、その他女房車は數多かつた。伶人達も都から伴れて



行つた。松にてりはふ神垣の蔦紅葉、さては岸打つ波にまがふ樂の音、尊くも艶な神詣で、あつた。

朱雀院はたゞ念佛三昧に日を送つておいでになつて、春秋二度の帝の行幸の時にだけ昔を偲んでいらつしやる。しかし女三宮の事だけはお心を離れる時なく思つておいでになつて、帝の行幸の毎にその後見をお頼みになる。帝も妹宮には特にお目をおかけになつて、二品の位をお授けになつた。朱雀院はさうかしても、一度姫宮に會ひたいと思召すのを源氏はおいさしく思つて、來年院の五十の御賀に女三宮をして親しく若菜を奉らせようなき思つて、今からその準備にかゝつてゐる。源氏は女三宮に琴を教へる。これも御賀の時の用意の一である。

春になつた。御賀は帝が正月になすつたので、六條院からは二月に決つた。正月の二十日頃に六條院で試樂をした。梅の花は盛りで、色々の花の木も色めき渡る頃である。女三宮の御殿へ女御をはじめ紫上明石上なきが集つた。夕霧も父に呼ばれて相手をする爲めに來た。さりとてめでたい樂の音に今宵も更けた。六條院の女達に比べてわが妻のいたくも世話じみてし

まつてゐるのを夕霧は歸る道ながらも物足りなく思ふのであつた。

その翌日は源氏は紫上さしみく語り暮して夕方女三宮の所へ行つた。紫上はその夜遅く寢についたが翌朝から激しく胸部に痛みを覺えたが、休めてぢつと寢てゐた。源氏に知らせようといふ女達をおし止めて苦痛に堪へてゐる中に熱が出て頭が割れるやうに痛む。桐壺女御から知らせて來たので、源氏は大急ぎで來て見た。紫上は今年が三十七の厄年である。そんな事を考へるにぢつとして居られないので、高僧を請じて祈禱をさせた。病人は食慾もなく、何處にもなく苦しがつて、時々胸にさし込みが來る。かうした騒ぎで朱雀院の御賀も延びた。二月は過ぎても病勢は依然としてゐる。居所を變へたらさういふので二條院へ移つて療養する事になった。源氏も女御も付き添うて看護するのだけれど、日に添へて衰弱が加はつてゆく。六條院は今火の消えたやうに人は皆二條院に集つてゐる。

柏木は中納言に陞進して世に時めてゐる。身の寵遇の増さるにつけ、かなはぬ戀の惱ましさに、そののかりに帥宮女二の宮を娶つたのだが、かの小簾の隙に見し佛の寤寐に忘れ難くて

折しも紫上の病氣にかゝつらうて六條院の人少なに乗じてこの戀を逢けたいと例の小侍従を呼んで相談するのであつた。小侍従は始こそ柏木の言を有るまじい事と斥けたものゝ、漸くその熱心に動かされて來た。そしてもし好い機があつたら知らず事を約束して歸つた。

四月の中旬である。明日齋院御禊といふ前夜女三宮の前には自分と按察の君だけで、それも男が來て局へ下つたので、小侍従は柏木を宮の几帳の外へ案内した。何心なく寢た女三宮は男の來たけはひを源氏と思つてゐたのに、寄り添うて居たのは知らぬ男なので恐怖と羞恥とに身はわな／＼と慄うて、冷い汗でし／＼にぬれて物も覺えぬ氣色のあはれさ、可憐さ、あゝ惡夢よ、夜は明けた。

あけくれの空にうき身は消えな／＼ん夢なりけりと見てもやむべく

女三宮はあるかなきかに口吟んだのを聞いて柏木は歸つたのだ、魂は宮の傍に置き忘れたやうな心で。父の家へ來て少し落着くも、今更に昨夜の記憶が甦つて來て何だかもう取りかへしのつかない大罪を犯した自分が恐しく弟達の誘ふのを謝つて祭も見ずに引籠つてゐた。女三宮も

違ふ瀬ない不安に捉へられて人にも逢はず病人のやうになつてゐる。そこへ源氏が來たのだが女三宮の様を見て久しく來なかつた自分を恨んでの事と思つて何かと氣を引立てるやうな話をしてその夜は此方へ泊つた。柏木は妻なる女二宮を見ても女三宮に劣つてゐる様な心地がして同じ姫宮を妻にするなら、なぜ今一際運がむかなかつたのだらうなと思つて

もろ葛おち葉を何に拾ひけんは瞳しきかさしなれども  
なまその邊の紙に書きすさぶ。女二宮を落葉宮といふのはこの歌によるのだ。

源氏が女三宮の所にゐるに急に二條から使が來て、紫上が息を引取つたといふので、大急ぎに駆けつけた。祈禱してゐた僧侶も壇を崩してゐる所である。源氏は周章る人々を押し靜めて有驗の僧を請じて一心に祈らせるも、やがて物怪は童に乗り移つて、紫上は息を吹返した。この物怪のいふ聲は嘗て葵上の時のそれと全く一つであつた。源氏は紫上をそつと傍の部屋へ移し、僧にいうて物怪のいふ事を封じさせてしまつた。

紫上はその後引續いて小康を保つてゐる。源氏は日に法華經を一巻づつ讀誦させて供養をし

てゐる。梅雨もこして六月になつて少し枕から頭を擡げ得るまでに恢復した。

女三宮はあの事があつてからたゞならぬ身になつた。柏木は思ひ餘つた時々夢の様に宮に近づいて來たが、宮は疎しい人々を思つてゐるのだ。源氏は女三宮を訪ねた。乳母達から娠まきいて安心した。然し今までさうした事がなかつたのに此際急に此事のあるについて何かそこに暗い事があるのではないかといふ疑も起きないではなかつたが、惱ましくしてゐる若い宮を見れば哀れにも愛らしくも思はれるのであつた。ある朝の事であつた。源氏が歸らうとするに梅の下に手紙様のものがあつたので取つて見るに、紛ふ方ないその人の筆であつた。小侍従は源氏が柏木からの手紙を拾つたのを見てさうしよう大變な事になつたと思つて女三宮と共に泣くより外はなかつた。源氏はこの手紙をはじめは信じなかつたけれど、さうしても信じなければならなくなつた時、わが身の昔も思ひ出されて、柏木をも女三宮をも責められなかつた、否昔父帝はやはり自分等の事を知りつゝあつた態度をお取りになつたのでないか、こんな事も考へられた。柏木は小侍従を責めて宮に逢はせよといふ。小侍従は遂に一伍一什を

告げたので、柏木ははつと思つた。それにしてもあの弱い宮がそんなに心配してゐるかと思ふに氣の毒になつた。源氏はさう氣取つたといふ風は誰にも見せずゐた。

臘月夜前侍が尼になつた。朝顔前齋院も出家してしまつた。紫上も尼になりたがつてゐる。延びくになつた朱雀院の御賀を十二月に行ふ事になつて、その前に例のやうに試樂を六條院で行うた。紫上も歸つて來たし、女御もお里に歸られた。源氏はその席に柏木の居ないのを淋しく思つて手紙をやつて呼んだ。青い顔の柏木を源氏は氣の毒に思ふ。さうして隔意なく振舞ふ源氏に對して柏木は有難くもあれば心苦しくも感じるのであつた。

その日の柏木はほんに苦しかつた。さうしても座に堪へぬので試樂の濟まない中に中座をして歸つたがそれからすつと床についてしまつた。父大臣も母も別れて病むわが心を心許なく思つて、わが家へ引移るやうに勸める。落葉宮が夫の病を看護る事も出来ない自分を歎いてゐるのを見るに、今まではさして愛も起らなかつた妻ながら、或はこれが最後の別れとなるのではないかと思ふにさすがに柏木も戀しさ悲しさが感じられる。その生母である御息所も傍につ

きり、少し此方で療養する様す、めるので、柏木もそれらの心にほだされて、親の家へ歸る日がだん／＼延びてゆく。母からは使が盛に来るので、さう／＼涙ながら妻に別れて父母の許へ歸つて行くのであつた。病勢は激變するでもなく、ぢり／＼悪い方へ落ちてゆくのであつた。六條院その他からお見舞の人が織るが如くに來る。

柏木

柏木の病勢は依然として怠らぬ中に年も返つた。父母の歎きを見ては命惜しと思はないではないが、さて長生したくもない我身だと思ふ。さうせ千年を経べき身でもないから、死ぬなら少しでも人に思はれる今がその時だ、長らへては自ら我がため人のため面白からぬ結果も出て來よう、凡ての罪も最期の折には消えるさういふ、死後には源氏の怒も解けるだらう、——こんな事を柏木は思ひつゞけてゐる。少し氣分のよい折、人々が側にもいない隙を見て女三宮へ手紙を書く。

もうさても命の助かる見込もない私です。自然かうした消息もお耳に入つてゐませうのに

さんなどさおたづねも下さらぬ事は、御道理には思ふものゝ、やはり物足りぬ感も致します。

今はさて燃えん煙も結ほれてたえぬ思ひの猶や残らん

せめて一言の御返事もほしいものです。自ら招いて迎る闇路の光も仰ぎたいと存じます。

書きたい事は澤山あるけれど、病に弱つてゐる柏木のわな／＼く手ではさても書けさうもないので、たゞこれだけ書いておいたのだ。小侍従へも哀れな手紙を書いた。柏木の手紙を見た小侍従は思ひつめたその心を氣の毒と思つて、強ひて女三宮に返事を書かせて、自分で柏木の所へ持つて來た。

父大臣は祈禱の爲めに高僧を請じて加持をさせてゐた。この僧が陀羅尼を誦するのを柏木は聞きたくなくて、そゝ寢床を出て別室で小侍従に會つた。ト者は女の靈か憑いてゐるのださういふが、果して宮の靈が憑いたのならさんなに嬉しからう、かう人妻に戀してゐる者は我のみではあるまいに、自分のみかう惱しく思ふのは源氏の威に壓されての事だらうなき悲しげに柏木

はいうて、小侍従の齋した戀人の消息を聞いて見た。

御病氣の事は聞きながら、えしも訪ふべき身でもないの。たゞ私の心は推し量つて下さい。残らうと仰しやるのは

立ち添ひて消えやしましうき事を思ひ亂るゝ煙くらべに

さうして私も後れませう。

柏木はこれを読んでほんまに有難いと思つた。

「このお言葉だけがこの世の思ひ出もならう」なきいひつゝ、また涙ながらに哀れな返事を書いて小侍従に渡した。そしていつもなら歸すまいとする使を今日は促して歸してやらねばならなかつた。

その夕方から女三宮は陣痛を懇へたので、源氏にその旨を知らせた。ほんまにこれが自分の子だつたらなき思ひながら人に氣取られまいと用意しつゝ、源氏は驗者なき呼んで安産の祈禱をさせた。一夜を苦しみ明して日のさし出る頃にお産があつた。男と聞いて源氏はもし柏木に

似た子であつたら困ると思ふにつけ、昔犯した罪の報をかう現世で受けるからには來世で受ける應報も幾分輕むだらうなきも考らへれた。内情を知らぬ人達から安産の祝儀の來る事はいふ迄もない。

女三宮は産後の疲れから身體も衰へて湯を取る心地も出ない。いろく思ひ廻してはいつそこの儘死んでしまひたいと思ふのであつた。源氏は忍ぶまはすれど不快な心持は蔽ひ盡す事も出来なかつた。それを知つては宮はやはり尼になる外行く道のない事を思ふのであつた。宮の決心を源氏は嬉しく聞いた。しかしこのまゝ、龜裂の入つた夫婦關係を續ける事の不可能を思ひつゝも、佛道に入らうとする若い女をさうして堪へられようなき思つて、宮を極力云ひ慰めてゐるのであつた。

朱雀院は愛する女三宮の産後の悩みを聞くにつけ、もうぢつとしてお出になれなかつた。で、或る夜不意に六條院へ御幸になつた。墨染の僧衣に變れていらつしやる院を源氏は羨しいやうな心で拜した。父の院の思はぬ御幸に宮はもうこめきもなく涙を流して、

「もうさうしても生きて居られさうにも思へません。かうおあひの出来た序に私を尼にして下さいませ」こいふのを院は源氏の愛の枯渴したからこお取りになつて、それならこの折に病氣を云ひ立てにして出家させた方がよからう、尼になつた後は、よも見捨てる源氏ではなからうと思召して、宮の望に任せた方がよからうと思ひになつた。源氏はさすがに愛着の絆を絶つに忍びずかきに説くだけれぎ、宮はさうしても聞かないので力が及ばない。夜明け方に祈禱僧の中から高德の人を選んで導師として、さばかり美しい黒髪を切らせてしまつた。源氏は悲しさに聲を上げて泣いた。院も變りはてた宮の姿に涙をそゞぎつゝ、顧みがちにお歸りになつた。紫上についた物怪が宮についてかうさせたのだこはその後に判つた事である。

女三宮出家の事を聞いてから、柏木の病勢は益々重つて行く。落葉宮の事が哀れに思はれて今一度一條へ移つて彼方で療養したいと父母に請ふれれぎ、父母はそれを許さない。柏木は母や弟達にわが亡き後の落葉宮の事を呉々も頼むのであつた。危篤の報が天聽に達して、特旨で權大納言にお任じになつた。優渥な朝命を受けるにつけ父大臣達は益々悲しいのであつた。

夕霧は親しい従弟の昇任の祝を兼ねて、その病牀を訪うた。長い重病人らしくもなく、瘠せてはるたが艶かに見えた。それこなしにわが罪を懺悔する柏木を夕霧は心から慰めて、なぜもつこ早く打明けなかつたのだらうと恨めしくも思はれるのであつた。

「もつこ前にお話ししようと思ひながら、かう急に命の果が来ようこは思はなかつたので、……。これは貴方だけの胸に疊んでおいて下さい。それから一條の宮の事ですがね、さうか時折は訪ねて面倒を見て上げて下さい。」なご云つて、急に苦しくなつたので手眞似で夕霧に歸る事を促す。祈禱僧やその他の人達も騒ぎ立つので、夕霧は涙ながらに歸つた。かくて柏木は遂に泡の消えるやうに死んでしまつた。尼宮——女三宮——も、かうはかなくなつた彼を聞いた時は、さすがに悲しかつた。生れた子を見たかつたらうこも思はれた。果敢ない前世の因縁を思へば涙は流れた。

若君の五十日の祝は三月に行はれた。五十日にしては大人びてもうお話しなごも出来るやうになつてゐる。尼宮も今ではすつかり氣分もよくなつてゐる。源氏はこの姿でゐてほしかつ

たゞ今でも思ふのであつた。そして若君を見るにさうも今までの子達と違つて、品もあれば愛嬌もあり、眉目清秀といつたやうな様子を可愛と思ふ。思ひなしか柏木によく似てゐる。深い自責の念からあんなふうになつて死んで行つた柏木をも、源氏は惜しい事をしたと思はずに居られない。

夕霧の心に柏木の最後の言葉は謎として残された。そして女三宮の出家がその謎を解く一の鍵のやうにも思へた。それにしても重々しげな人だつたが、やはり弱い人だつた。故人の事が思へた。その中にもだん／＼日が経つて行つて、供養の事なきも懇に行はれた。一條の宮ではその後心細い日がつゞく。故人が常に弾き馴れた琴や琵琶などの絃のはづされてゐるのも哀れである。庭の木立も霞こめ時知り顔の花の色を鈍色にやつれて、宮の女達も眺めてゐた晝頃、花やかな前驅の聲がして、宮を訪れた人があつた。夕霧が故人の遺言を思つて來たのであつた。宮の生母の御息所がお逢ひになつた。二人の對話は涙の中にかはされた。若く美しい夕霧を宮の女房は暫し悲みも忘れる心地ですき見をするのであつた。その歸りを夕霧は前關白家へ寄つ

て、久しぶりで舅にも逢うた。瘠せて髭も延びた舅を見るのは悲しい事であつた。一條へ行つて來た事などを夕霧は話した。大臣は潸然と泣くのであつた。夕暮の雲の色鈍色に霞んで、散り過ぎた花の木も折からの哀れを添へるのであつた。

夕霧はその後も始終一條の宮を訪れてゐた。四月になつた。若葉にけふる初夏の景色も物思ふ宿にはたゞ心細く眺められる。さうした頃に又夕霧はこゝを訪れた。庭もやう／＼青み渡り此處彼處には蓬が所得顔に亂れて、蟲の音の添ふ秋も偲ばれる淋しげな宿である。伊豫簾をかけて鈍色の几帳に、同じ色にやつれてゐる女達の姿も見える。御息所は氣分が勝れないと引籠つてゐた。縁に居て見渡すに柏木と楓の枝を交して若葉に茂つてゐるのを

「まあ何といふ頼もしげなああの木の姿だらう」なご云つて、「この歌を申し上げてお呉れ」にてこゝこならばならしの枝にならさなん葉守の神の許しありき

こゝこ誦むのを、取次の少將といふ女房を介して

柏木に葉守の神はまさすこも人ならすべき宿の梢か

ご御息所は返した。夕霧はなるほごご思うてほゞ笑まれた。かうしてこゝを訪ねてゐる中に夕霧の心には落葉宮を戀ふ心が萌え出て來るのである。

「故大納言ご思して私に何も遠慮なく仰しやつて下さい」なごいふのを宮の人達はほんごに頼もしい人ご夕霧を思ふのであつた。

柏木が死んでから大分日が経た今日も皆人はその人を慕ひ思ふ。六條院ではましてその人を哀れご思ひ出す事が多い。秋には女三宮の若君はもう這ふまでになつた。この若君が即ち薫君である。

### 横 笛

柏木は生前六條院へ親しく出入してゐたので、源氏はその死を悼む心は深く、一周忌の法會なごにも特に懇な供養があつた。夕霧も別に供物なごを手厚くし、又一條宮をも殊に志深く慰問するのを前關白夫妻は喜ぶのであつた。

朱雀院は二宮もかうして寡居の身ごなり、三宮はあんなに世を捨て、しまつたのを飽かず思召すのだけれご、すべて俗世の塵事に心を用るまいご思し忍んで念佛三昧に入つてお出でになる。お住みになる寺の近くの林から掘つた筍に近くの山で採れた薯蕷なごを、尼宮にお送りになつた。それにお附けになつた消息にも

世を別れ入りなん道はおくるごも同じごころを君もたづねよ

なご書いてお寄越しになつた。折から來合はせた源氏もこの院のお手紙を哀れご見た。尼にそいだ額髪のだご稚兒の様なのを見るにつけ、何故この人をかうさせてしまつたのだらうご今更ながらそれが我が落度の様にも思はれるのである。若君は乳母の所に寢て居たが、ごそごひ出して來て源氏の袖に戯れかゝる愛しさ。もうよちご傳へ歩きなごする位になつてゐる。薯蕷を見つけて、あたりへ取散し、食ひかいたりするのを見て源氏は

「早くあれをしまひなさい。もう食物に目がつくなご人が笑ひますよ」なご笑ひながら薫を抱き上ばた。齒の生える頃ごて筍なごを手當り次第に嚙むのである。月日を経てますご可愛く



成長してゆく薫を源氏はたまたま愛らしいものと思ふ。夕霧は柏木の言葉を思つてはその間の事情を明める機会を、それを父に打明ける時期の來るのをうかゞひつゝ、又一方には落葉宮の方へ心は飛んでゆくのであつた。

もの哀れな秋の夕方、夕霧は又一條の宮を訪ねる。宮は打解けて琴をしめやかに弾いてゐた時であつたらしい。南の廂に夕霧が通された時、端近なりし人の奥へ入るらしい衣ずれの音も床しく、空柱きの匂も香ばしく漂うてゐた。例によつて母御息所が出て應接した。夕霧は子供の騒々しい我が家に馴れては、この宮の寂しいまでに靜なのを床しく感じるのであつた。そこにあつた琴をまさぐるに律に調子が合されてゐた。

「宮様のお琴を聴きたいと思ひます。亡くなつた大納言を偲ぶよすがにも。」夕霧はいふ。

「ほんの昔の童遊の名残だけでも、今は覺えてはいらつしやらないのです。それに近頃はあまりに淋しさの餘りお鳴しになるだけなのです。」御息所のいふのを押返して夕霧は勸めるのである。月がさし出て雁が鳴く。宮はそゝ琴をかき鳴したのをひきく身に沁みて聞いた夕霧は琵琶

を借りて懐しい音に想夫戀を弾いた。宮に合奏を求めたけれど、ほんの末の方を少し合せただけだつた。

「あまり遅くまでお邪魔しては御迷惑でいらつしやいませう。またおうかゞひする時に合せて頂きたいと思ひます。琴の調子も此儘にお待ち下さい」なご思ふ心をかうした言葉に包んで夕霧は云ふ。御息所は柏木の遺愛の笛を贈つた。吹く人もないこゝに残しておくよりも寧ろ故人の親友に贈る方がよいと思つたのである。

横笛のしらべはここに變らぬを空しくなりし音こそ盡きせぬ

夕霧は躊躇ひがちに宮を辭した。

三條の家へ歸つて見るに格子も皆下して人々は寢てゐた。落葉宮に思ひをかけて特に親切にしてゐるのだなごいふ人の言葉を信じて、歸つたのを知りながらかう寢た風を装うてゐるらしい。漸々明けさせて御簾も巻き上げて、そこにごろり横になつて、

「かうしたい、月に平氣で寢てゐる人があらうか。まあ起きておいで」なご云ふけれど、雲井

の雁はわざと聞えぬふりをして寝てゐた。夕霧はわが歸つた跡の一條の宮の事なき何かと思つて、ふと氣がつくと柏木がありし日のまゝの姿で傍に居て笛を手に取つて見てゐるが

笛竹に吹きよる風のこゝならば末の世長きねに傳へなん

と歌をよんで、「貴方に上げる笛でなかつたのだ」と云ふので、問ひかへさうとする時、若君の泣く音に氣がつけば、笛のみあつて柏木の姿は見えない。若君はひそく泣いて乳を吐いたりするので、皆が起きて騒いでゐた。一夜泣きむつかつて明した。

夕霧は笛の事、夢の事を思ひ廻して、その處置に迷つた。誰れに傳ふべき筈だらう。何にせよ、迷執を拂ふべく寺に布施して柏木の菩提の爲めに誦經なごさせた。思ひ餘つて六條院へ行つて見た。父は女御の御殿にゐた。三の皇子を今紫上は預つて育てゝゐるのだつたが、夕霧の來たのを見て、この宮を母女御の方へ連れて行つて呉れる様にいふ。夕霧は女御の御殿へ行つて、又父と共にその居間でのみやかに物語をした。夕霧は昨日一條の宮へ行つた事を話した。源氏は故人の由縁を思ふ事はよいが、飽くまで世の非難を受けるやうな行動を避けよなき諭す

のであつた。夕霧はこんな事をいふのであつた。

「非難を受けるなんて事がある筈はありません。私は只眞の同情から訪問するのです。何でも事により人に應じて、さう一概にはいひ切れまいと思ひます。あの宮様は若い方でもなし、それに奥床しい人柄の方なんです。」かう云つて、よい序と思つて前夜の夢物語などもするのであつた。源氏は暫く考へてゐたが、

「その笛は私が貰ふべきものなのだ。陽成院のお笛で、故式部卿宮が秘藏していらしたのかの右衛門督が幼い時から笛が上手だつたので萩の宴の時に下すつたのだ」など云ふ。故人が傳へたいと思ふ人はあの薫の外にはなかつたらうと源氏は思ふのであつた。に霧はよい序と思つてあの最後の見舞の折の事を話して、

「繰り返しく私にいふのでしたが、どうしたわけだか私にはわけが分らないのです」といふ。源氏は思ひ當る事はあるけれど、夕霧にそれと打明けるわけにもゆかぬので、

「私にも何の事かわからないね。何にも心當りもないね。夢の話はまた後にしよう。夜さうし

た話はすべきでないなさいふぢやないか」なき云つては、つきりした返事もせぬのを、夕霧はよしない事を云ひ出したと思つた。

餘 蟲

蓮の花盛りの頃、新營の尼宮の持佛堂の供養があつた。源氏の心入れで新調された佛前の莊嚴は極樂もかくやこ惚ばれて尊い。本尊阿彌陀佛並に脇侍の佛は白檀を用ゐて名工の作である。宮は六道の衆生の爲に六部の法華經を手寫し、自らの持經は源氏が筆を取つた。源氏はかうした心急ぎをするにつけ、諸共にかゝる事をしようとは思はなかつたになき、悲しい氣持になるのであつた。供養の日に僧の着る法服なきは紫上が用意した。尊い法會の有様なき書くまでもあるまい。内々の供養を忍んで行つた今日の儀だつたけれど、帝や朱雀院なきにも洩れ聞えては御使なきがあつた。院は例の三條の宮に尼宮の移られた方がよからうと仰しやるのだが源氏はせめてわが世の限りはと思ふので、やはり六條院に宮は住んでゐる。但し三條の方も源氏は

修理なき念を入れてさせるのであつた。

秋頃になつて尼宮の御殿の一部を野の景色に作つた。宮に従つて尼になうとする女達も多かつたが、その中で道心の堅い者を選んで十数人だけに剃髪を許して使つてゐた。風も冷くなつた頃の夕方、源氏は蟲を聴きがてら尼宮の御殿へ来て惱しい心なき今更に打明ける折が屢々あつた。

十五夜の月がまださし出ぬ夕暮、宮は佛殿で念誦してゐた時源氏が來た。松蟲・鈴蟲なきが草蔭にすだくの心を深く聞く。殊にも鈴蟲の今めかしい鳴く音に興が深い。

大方の秋をば憂しき知りにしをふり捨て難きすゝむしの聲

宮は低い聲でかうお歌ひになつた。源氏は珍しく琴を取寄せて弾いて見た。宮は珠數爪ぐる事も忘れて聞き入つてゐた。

今夜は例の月見の宴があるだらうと思つて兵部卿宮が來た。夕霧も若い友達を連れ立つて來た。そしてこれらの人達は源氏が尼宮の所だき聞いてやつて來た。

「ようこそいらつしやつた。久しく皆さんの琴なきも聞かなかつたのに、殊更の宴なきでなしに一度お聞きしたいと思つてゐた所でした」なき云つて蟲の音の品定めなきをして、さて各々琴を掻き鳴しなきするのであつた。

「かうして月を見るにつけ死んだ大納言が思はれる」なき源氏はいうて涙を流した。今宵の夜を徹して蟲の宴を張らうなき云つてゐるに、冷泉院からお手紙があつた。内裏の觀月の宴が取止めになつて人々が院へ參つたのに、夕霧達が六條院へ行つたさお聞きになつてゐあつた。

雲の上をかけ離れたる栖家にも物忘れせぬ秋の夜の月

なきお書きになつた。源氏はさうして淋しくしていらつしやる院を思ふにぢつとして居られないので、夕霧以下の人達を一所に急に車を命じて出かけて行つた。院は大そうお喜びになつて、夜明けまで詩歌の御興は盡きなかつた。

源氏は人々が歸つたあごに残つて秋好中宮の所へ行つてしみじみ話の序に出家の志のある事もしさうなつたら後の人達をお願いしたいなき源氏がいへば、中宮も

「私も人皆の背くこの世を逃れたい志はありますけれど、それにしてもあなたに御相談してからと思つて居ります。あなたの外に頼りのない私なのです」なき仰しやる。中宮は御母六條御息所がまだ成佛せずに、その怨靈が時々現れて人々を苦める事なきを聞いては、それがさうしたことをいうたのだから知らないが、たゞ今まで母に別れた悲しみばかりに心を奪はれて、さうした方の祈なきに氣のつかかなかつた自分がうましく、せめてはわが信仰の力で母の妄執を晴したいと思召すのであつた。源氏はそれを尤もは思ふものゝ、中宮がこのまゝ此世の羈絆をふり切つて入道する事なきは到底不可能の事と思はれるのであつた。冷泉院御退位の後は中宮が里にお出になる様なお暇はなかつた。中宮は花やかな生活の中にも故母上の菩提の爲を思ひつゝ、入道する事はこても出来ぬ事ならば、せめて供養の法會を修する事を心にかけていらつしやる、源氏も心を合せて、近い中に故御息所の爲めに八講なき行はれるこいふ。

夕

霧

夕霧は故人との友情を重んじて一條の宮を懇ろに訪ふ裏には落葉宮に對する戀心は日を経るにつれて増して行く。まだ宮に直接のお話も出来ぬ彼にはその心を打明ける機が中々來ないのであつた。さうしてゐる中に宮の母御息所は物怪に憑かれたやうに惱しくして洛北の小野の山莊に出養生をして昔からの祈禱僧である横川の律師を叡山から呼んで加持をして貰つたりしてゐた。そこへ移るについて車の用意や何かは夕霧が肝煎した。僧への布施や何やも夕霧から仕送つた。その禮狀を御息所は病中なので女達に勧められて落葉宮が書いた。その手紙を得てから、男は返事を得たさに小野への手紙を書く。訪ねて行きたいのだが、雲井の雁に氣を兼ねてへ行かずにゐる。

八月の中頃、夕霧はそゞろ山里の秋色に心ひかれて親しい供人五六人を伴れて、野邊の露を分けた。松ヶ崎のあたりの山の色の美しさ。山莊は粗末な家造りながら、さすがに哀れな家の様である。東に祈禱の壇を飾つて、北の部屋が病室に充てられてゐた。西の部屋に落葉宮は居るのであつた。夕霧は宮の御方に御簾を隔て、案内された。御息所はゆき届いた夕霧の親切を

感謝して、今一度本復したい願なきをつぶく、取次を以て語るのである。宮は奥の方に引込んでゐるのだけれき、衣すれの音なきのするのを、心時めく氣持で夕霧は聞いて、女達にそれきはなしに心を仄めかす。宮からは人傳てに挨拶された。

夕暮が迫つて霧が立つた。鯛の聲は喧しく山嵐は物凄く松の梢に響く。病人が一しきり苦むので女達はその方へ集つて、宮の前は人少である。今だ、戀を打明けるのはミ夕霧は思ふ。

山里のあはれを添ふる夕きりに立ち出でん空もなき心地して  
さへば奥で

山賤のま垣をこめて立つ霧も心空なる人はミめす  
なき仄かにいふ宮の聲が聞える。夕霧は今夜は此處に泊らうと思ふのであつた。

「霧で道も分りません。同じここならこの御簾の下に置いて下さい。阿闍梨の祈禱の濟むまで」  
ミ夕霧は女房に云ふ。宮は困つたが、ちつと音を立てないやうにしてかい潜んでゐた。ミ、夕霧は女房が物を云ひに入るのについて、そつと御簾の中へはいつた。内は霧の爲めに薄暗くな

つてゐた。宮は淺ましさに北の襖を明けて出ようとする裾を夕霧は抑へた。宮の身體は戸の外へ出たが裾だけは部屋に残つた。戸には錠はないので、宮は手でしつかり抑へて、ぶる／＼慄うてゐる。夕霧の心の丈けをかき口説け宮はその戀を容れようとはしない。夜更けるまゝに風も強くなる、蟲の音、鹿の聲それに瀧の音まで一つに聞えて艶に物哀れな夜の様である。明方近くなつて月が霧にもまぎれずやかにさした。顔を隠さう／＼とする女の姿の譬ふべきものもない美しさ。かくて朝露を分けつゝ、す／＼歸つてゆく夕霧の心よ。彼はそれから妻の所へ歸らずに六條院へ行つてそこで着更へをしたり朝飯をこつたりした。そして小野へ手紙を書く。女房達はその手紙を廣げて宮に返事をするやうすゝめるのだけれぎ、昨夜の事があるまじい事と思つてゐる宮は見もせずに使をかへして、そのまゝ横になつた。女房達は手紙を見て不思議な事と思ふ。

御息所の氣分は今日は大へんよい。加持の僧達は皆休息して、律師だけが陀羅尼を讀誦してゐるが、不意に

「大將はいつから宮様にお通ひのですか」と問ふので、御息所にはそれが誤解だと思はれないのでさういふと、律師は今朝宮の部屋の戸を明けて出た若い男の後姿が、霧で判然とは分らなかつたが夕霧大將に相違ないといつて、さうしても二人の間に關係があるに違ないといふのである。御息所は強くそれを打消しながらも、或は夕霧が宮の油断に乗じてさうした事をしたかもしれないと思つたので、律師が去つてから少將を呼んで訊いて見た。少將は詳しく昨夜の始末をいって、今朝の手紙の事を話して宮の爲に辯疏するのであつた。御息所は宮を呼んだが宮の顔を見るに涙が先立つて、もう昨夜の事はいひ出せないであつた。そしていつそ宮と夕霧とを結婚させたらなごも心弱く思ふのであつた。晝ごろまた手紙が夕霧から來た。さうしても返事を書かぬ宮の代りに御息所が弱つた手に筆をこつてかう書く。

今、宮は丁度こちらへ來て居られます。御返事をお書きになる様にお勧めするけれど、さうしても筆をお取りになりませんので、私が書きます。

女郎花しをるゝ野邊をいづこにて一夜ばかりの宿をかりけん

夕霧はわざと今夜は小野へ行かずにゐたのだ。日の暮れにこの返事が来たのを、灯火の影に見てゐるに、雲井の雁がふき見つけて後からつと取つてしまつた。そしてさうしても返して呉れない。夜が明けてそして又日が暮れかゝる。山蔭の家は霧が立籠めてゐる事を思ひつゝ見る。櫛の端が少し高くなつてゐる。探るに昨夜の手紙があつた。騎馬で急いで返事を持たせてやる。

二日目三日目何の音沙汰もなく、山莊の夜は更ける。御息所の病はかうした事からまた重つてゆく。その夜夕霧がやはり来ないので知つた落膽が死期を早めてしまつた。宮は死骸に取付いて泣いてゐる。夕霧から弔問の使がいち早く来た、朱雀院からも六條院からも前關白家からも。夕霧は使だけでは物足りなく、人々の諫を振切つて山莊へ来た。故御息所の甥の大和守が萬事を奉行してゐたが出て泣く泣く弔問の禮なき述べた。宮は母の亡くなつたのも夕霧故だと思ふに、その人に物言ふ心もせぬので、少將がお逢して、前後の事情なき少しづつ、仄かすので夕霧も返す言葉を知らなかつた。この近くの自分の所領の人達にいうて葬式の手傳やら何

やら萬端の世話をするのであつた。

九月になつた。夕霧は弔問の使をひつきりなしに出すのだが、宮はその手紙を披くさへ不孝の罪を重ねるやうに思はれて返事は一度もない。雲井の雁は嫉しさに徒然に物思ひ暮すのであつたが、夫の戀の相手は死んだ人か、それともその子なる宮だかさへも知らなかつた。

十日過ぎに夕霧は小野へ急いだ。木枯に散り交ふ落葉の音に交つて尊い誦經の聲が聞える。鹿は垣の下にイみつゝ、鳴子の音にも驚かず實れる稻叢の中に鳴いてゐる。瀧の音は憂に沈む入驚し顔に、叢の蟲聲は頼なけに弱つてゆく。例の妻戸の許に立ち寄つて、扇で夕日を除けて夕霧は少將を呼んだ。故御息所の手紙の事なきいひ出してはたゞ泣くのであつた。宮は

「その中に今のこの心持が静まりましたから、御親切な御弔問の御禮も申したいと存じます」云はせるのを、夕霧はあまりに情ない宮の態度を歎ちつゝ十三日の月を踏みつゝ歸る。道で一條の宮を過ぎて、柏木の生前を偲びつゝ、泉水に澄み映る月影を見てはたしへなき悲しみを感ずるのであつた。

雲井の雁は近頃夫が急に情無くもてなすのを不快に思ふのだが、前のやうに理不盡に夕霧から手紙を奪ひ取るやうな事はなかつた。二人の間に日に増し疎くなつてゆく。小野へ手紙は行くが、宮の返事はない。ある時少將から宮の手習を拾うたまで一枚送つて來た。かうした事も今の夕霧には慰藉になるのであつた。

落葉宮は母の死後もう一條へ歸らうとは思はぬ、このまゝ尼になつてしまひたいなご思ふのであつたが、朱雀院はじめそれはお止めになつたし、女房達も萬一を心配して缺なきも目に當らぬ所へかくしたので、その本意を遂げる事も出来なかつた中に中陰も過ぎた。夕霧は宮を一條へ迎へて、結婚しようと思つて家の修理から調度なき用意を整へてゐた。宮が進まないのを強ひて一條へ渡した。そしてその夜夕霧は少將を責めてその機を作らうとする。宮は塗籠に寢所を移して、内から錠をさして男を避けてゐた。

三條へ來るゝ雲井の雁は闈に入つてゐた。そして被けてゐた衣を夕霧がさるゝ。「何處ぞ思つて歸つていらつしたの。私ももう死んでしまひました。死んで鬼になつてしま

ひました」なき云ふのを賺したり宥めたりする中に、大やうな女の心は段々融けてゆくのであつた。

夕霧は夜になつて又一條へ行つた。少將を籠絡してその夜は塗籠の中の宮を見た。宮は男が何を云うてもたゞ泣いてゐる。柏木の生前にあんな待遇をうけてゐた自分が、悲しみに衰へた今さうして男の心を繋ぎ得ようなき宮は思ふのであつた。そのまゝ夕霧は一條に泊つてゐる三條へは歸つて行かなかつた。

雲井の雁はいよく捨てられてしまつた自分だと思ふゝ悲しく父の家へ行つた。丁度女御もお里にいらつした時なので、そのまゝ三條へは歸つて行かなかつた。夕霧から迎の使はいくら出しても歸らない。大臣は雲井の雁に迎へによこした時に歸つたがいゝ、夫の心は自然分る時もあらうなき諭して、落葉宮にも

契あれや君を心にさめおきて哀れと思ひ恨めしと思ふ  
なき歌を贈つた。かの惟光の女なる藤典侍は雲井の雁に同情して慰めの手紙を贈つたりしてゐる



た。夕霧は雲井の雁の結婚後はその關係は薄くなつてゐた。兩方ともに子供は多く、雲井の雁は四男四女、典侍は二男二女の母であつた。さういふに好い子である。典侍腹の三の君と二郎は花散里が引取つて育てゝゐる。源氏も愛してゐた。

### 御 法

紫上は大患後身體が弱つて、何といふ病氣はなくて、それで日にまし衰弱してゆくのを源氏は心痛してゐる。この人に後れた後の寂寥さを思ふに悲しさに涙も出る。出家の望も幾度もなく聞いたけれど、源氏は許さなかつた。紫上は年頃菩提の爲めに手寫した千部の法華經の供養を二條院で行ふ。その日には明石上も花散里も二條院へ行つて式に與つた。それは三月十日の盛の頃だつた。空の景色もうらゝかにおもしろく、佛の國もかくやと思はれて、信仰心のない者にも佛徳が讃嘆されるやうな有様である。紫上はかうした中に居て、ひし／＼胸に迫る淋しさをさうする事も出来なかつた。經の聲、それに樂の音が交錯して一夜は極樂を濁世

に現出した。

昨日一日起きてゐたので、紫上はその疲勞で今日はまた寝てゐなければならぬ。簾の中から來參の人達を見渡すにも、これが此世での見をさめかと思ふに、何もない人の顔なごも哀れ深く見入られるのである。あゝした人達に先つて自分だけ死んでゆくのだと思ふに、限なく悲しい。この後絶えず祈禱なきが行はれる。

夏になつて衰弱が段々加はる。中宮——明石姫君である——もお見舞がてら里へお歸りになつた。紫上は懐しさに中宮をわが方に引留めて、しみ／＼と、それにはなしに遺言めいた事を語るのを、中宮は身に沁みて哀れにお聞きになるのである。

「宮達の大きくおなりになるが見られないと思ふに悲しい事です。」小さい宮達を見てこんな事を紫上がいへば、中宮も涙をお流しになる。

多くの御兄弟の中、三宮は殊に愛らしくいらつしやる。紫上は病間には三宮を近くへお呼びして愛してゐた。或時も誰も居ない時、

「私が亡くなつたらあなたは思ひ出して下さるでせうか」なごいふ。

「戀しく思ひますとも、私は誰よりも母様が一番好きなんだもの。お亡くなりになるなんていやだな」云つて目を擦つてゐる。

「大きくおなりになつたらこゝにお住みになつて、花の頃にはあの紅梅と櫻とは殊に目をかけてやつて下さいね。そして佛様にも上げて下さいよ」なごいふので、宮は頷いて、ちつと紫上を見つめてゐるが悲しくなつて立つて行つた。この宮と女一宮とを小さい時から養うてゐたのでその生ひ先の見られないのが口惜しく哀れに思はれるのであつた。三宮は即ち匂宮である。

秋になつて涼しくなつて來たので、少しよいやうだつたが、それでも衰弱は加はつて行く。

或る日氣分がよいので源氏と中宮と三人で何くれの物語をしてゐる時、急に苦悶が來て、祈禱や何か手を盡した甲斐もなく、翌日の夜の明け方に息は絶えてしまつた。源氏は悲しみを抑へて、折から來た夕霧にいふ。

「佛の年來の望だつたが、此際本意を遂げさせたいと思ふが、祈禱僧の残つてゐるのが居るだ

らう。呼んで剃髪させて貰はうと思ふ。」

「そんなに出家を望まれたのも物怪のせいでないでせうか。それに今になつてはたゞ目前の悲しみを増すだけで何の詮もない事と思ひますが」涙ながらに云うて、何かの式の事は總て夕霧が主になつて行つてゐる。彼は今までよそながら戀うてゐた人が、かう聲も聞かれぬやうになつてしまつたのを飽かず思はれて、せめて死顔だけでも見たいと思ふ。女房達が悲しみに泣き類れるのを制しつゝ、物の紛れに几帳を引き上げて見る時、曉の淡き光の中に灯火に半面を照されて、今はもう隠さうとする事もない義母の顔の清らかさ、夕霧はこみ上げて來る涙をさうする事も出来なかつた。

その日の中にお船入の式があつて、やがて鳥邊野で茶毘に附した。魂もぬけたやうな身體を人に扶けられて源氏は式に列した。昔葵上を此處に送つた時の事を思ふ。あの時は月がはつきり見られた、今はたゞ涙にかきくれて月も曇りがちである。因に紫上の死は十四日で、これは十五日の曉方の事である。

夕霧も喪に籠つて出仕もしない。風が野分らしく吹く頃になつた。夕霧はあの昔の朝の事が今更に心の中に甦つて、悲しくなつて來るのを、南無阿彌陀佛く、三爪繰る珠數に紛してゐる。源氏はまして涙の乾く間もなく念佛三昧に日を送つてゐる。宮中からも院の御所からも、又その外の方々から真心こめた弔問が絶えず來る。前關白からも葵上の死を思つて、哀れな事を書いて奥に

古の秋さへ今の心地してぬれにし袖に露ぞ置き添ふ

なき書いて子の藏人少將をして持たせてよこした。源氏は昔の事も思はれて

露けさは昔今も思ほえず大かた秋のよこそつられ

なき返歌した。

秋さいへばさなきだに悲しい今日此頃を六條院では人々はあの優しかつた紫上におくれてしばしも命生きよう氣もせず、尼になる女なきも多かつた。冷泉院の秋好中宮からの慰問を源氏は殊になつかしみつゝ見るのであつた。夕霧が何か三奉行して七々日の法會の準備にかゝつて

る。中宮なきも故紫上を忘れる間なく戀ひてゐる。

幻

春になつたけれも源氏の心はますます暗くなつてゆく。例のやうに人の出入は繁いけれもその誰れにも源氏は逢ふ心にもなれないので、氣分の惡いに托言けて御簾たれこめてのみ居る。弟の兵部卿宮だけには常の居間で對面して

我宿は花もてはやす人もなし何にか春のたづね來つらん

なきいへば、宮も涙ぐんで、

香をこめて來つる甲斐なく大方の花のたより云ひやなすべき

こんな歌を返すのであつた。

例年のやうに音楽の音のもれる事もなくて春も開けてゆく。女房達も古くから居る者は墨染の喪服を着て亡き人を偲ぶのである。況や源氏は愛人を思ふの餘り聖者のやうな生活を續けて

るのだが、いろ／＼の女との關係から故人の心に重い何物かを抱かせた昔の事が今更に悔いられるのであつた。雪の朝なき、わが部屋へ下る女だらう。

「まあ雪がたいそう積つたこと」なきいうて通るのを聞くにも、今の尼君が來られた當時の雪の朝の事が思はれる。あちらから歸つた自分が身も心も冷え果て、傍へ寄つた時、何氣ない風を装ひつゝ濡れたちてる袖を隠さう／＼としてゐた故人のしこやかさ、あゝ、その人も今はもう現の人でないのだと思ふに、涙はせき止める術もないのを、例の修行三昧に紛らすのであつた。

中宮が内裏へお歸りになつて後、匂宮を淋しさを慰める爲に六條へお残しになつた。宮が紫上の言葉を忘れずに庭の紅梅を大事にしてゐるのを源氏は特に哀れみ見てゐる。春深くなるまゝ、に何を見聞くにつけて胸苦しく思はれて、山住の事のみ腦裡に描かれる。山吹の咲いたのも涙を誘ふ種なる。櫻が咲く。一重は散り八重も盛過ぎて樺櫻が咲くのである。

「私の櫻が咲いた。いつ迄も散らすものか。周圍まわりに凡帳を立て、おけば風も吹きよるまい」な

さい、事を考へたさいいつた風のおきけなき、美しさ、源氏も微笑まずには居られなかつた。

「あなたさかうしてゐるのももう暫くの事です。よ。まだ死なゝいにしてもおあひする事は出来なくなるでせう」なき心細けに源氏がいへば、宮は死んだ人もこんな事を云つた、それに源氏までがさ思ふに悲しくて俯目になつて袖を弄つて涙を見せまいと努めてゐる。

徒然の餘り尼宮の所へ來て見る。匂宮も人に抱れて來て、この薰戯れてゐる。尼宮は看經の折であつた。さほぎに深い道心ではなかつたが、今は一途に心の亂れもなく深い信仰に入つて行ひすましてゐる宮を源氏は羨しくさへ思ふのであつた。それでも話してゐるに、やはり紫上だけの用意がないのが物足りない。それから明石上を訪ねて眞面目な話に夜を更して歸つて來た。女の心は何さなう重かつた花散里から夏の衣裳を持たせて來たのに對しても源氏は

羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいさゞ悲しき  
このみ返すのであつた。

五月雨の雲間をこめて十幾日の月が花やかにさした夜夕霧が訪ねて來た。花橘のなつかしい

香をきくにも、時鳥の一聲を待たれる中、俄に雨が風に吹かれて燈籠の火も消えてしまった。「一人住ばいつこいふ事はないが、梅雨頃の淋しさかうして心を馴らしておけば、山へ入つた時にはいゝね」なき何氣なくいうてはゐるもの、その底に何ともいへぬ悲しみの流れてゐるのが夕霧には感じ得られて、靜な山住に念佛三昧に入れさうな父だとは思へないのであつた。しかしたゞ一目見たゞけの自分でさへ忘れ難いのだもの、父の心はよく分る様な氣もした。來るべき一周忌の事や何か話してゐる時鳥が鳴いた。

亡き人を偲ぶる宵の村雨にぬれてや來つる山ほこぎす  
これは源氏の歌である。夕霧も

時鳥君につてなん故里の花橘は今ぞさかりこ  
こ云つて、その夜はそこに泊つた。

いつしか夏も過ぎ、七夕の頃も過ぎて、風の音もたゞならずなり行く頃、法事の事で月の初は忙しく過ぎた。一周忌には極樂の曼荼羅の供養があつた。やう／＼源氏は出家の志を固めて

女達にも身分に應じて物を分けてやつたりするのを、それはいはねぎ、人々は悲しむのである。源氏は氣心の知れてゐる女達を手傳はせて、懐しさに今まで残しておいた手紙の類を破り捨てるのであつた。須磨に放浪してゐた頃方々の女達から來たのなきも多く混つてゐた。紫上のは一束にしてあつたが、何だかもう古／＼頃の事のやうに思はれた。情緒纏綿たる古い手紙のはしに

かきつめて見るもかひなし藻しほ草同じ雪井の煙をなれ  
こ書きつけて一所に焼かせてしまつた。

佛名會も今年を限りと思へば、錫杖の音なきも殊に哀れに聞かれた。その日は雪になつた。導師の老僧も源氏の昔ながらの美しさに涙を流さんばかりに喜んだ。

今年も暮れると思ふこ細い。匂宮が追儼にさうした事をしようなき走り騒いでゐる愛らしさを見るにつけ、近く別れる日の悲しさが思はれて忍び難い思ひもされるのであつた。

物思ふこ過ぐる月日も知らぬ間に年も我世も今日や盡きぬる

こんな歌もよまれた。元日の用意、親王以下への年頭の贈物の事なき、例年以上に此上なく調へさせるのであつた。

源氏のその後の事は知るによしない。こにかくその死は五十二三の頃の事だつたらう。それと前後して八九年の間に、朱雀院・前關白・瑠璃君の夫太政大臣・源氏の弟兵部卿官・紫上の父式部卿官なきが物故してゐる。この間は所謂「雪隠」の巻の名の下に省筆されてゐる。従つてわが梗概の筆も原著者に従つてギャップを残したまゝ次へすゝまねばならぬ。

源氏物語 中編 終

下編

不

# 新源氏物語 下編

## 匂宮

源氏の薨後、それに類ふべき風流男はその血統をたづねても求め得られない。冷泉院はその数に入れ奉るも恐れがある、院を外にしては今上の三宮なる匂宮も、この六條院で人となつた薫の二人こそ當代の美男の聞えも高くはあつたが、それも世間の人達に比べての事で、ミビぬけて勝れてゐるさいふでもない。

匂宮は故紫上が殊に愛してゐた縁故で、二條院をその常の住ひにしておいた。今上は東宮を措いてはこの宮を大そう愛して居られるので、宮のために宮中に御曹司おへやを設けてお置きになるのだけれど、さすれば以前から住み馴れた二條院を住みよしと思つてゐた。元服して兵部卿に

任ぜられた。

夕霧は右大臣になつて、長女は東宮に入内し、二女は今上の二宮の夫人になつてゐる。その次の女を匂宮の夫人に中宮も思召し、世間でも當然さうあるべき事と思つてゐるけれど、宮自身はそんな事には耳を借さず、自分の心から起らぬ戀愛を基礎としない結婚は心すさまじい事考へてゐた。

六條院や東院なきに居た源氏の愛人達は涙ながらにそれらの落着き所へ移つて行つた。花散里は東院へ、女三宮は三條宮へ、明石上は多くの宮達の世話をして六條院に残つて居た。夕霧は、父の死後その心を盡して造營した院が徒に淋れてゆくのを今更に悲しと思つて、せめてわが在世中は昔ながらの花やかさに残したいと思ふ心から、一條にゐた落葉宮をこゝに移して三條なる雲井の雁の所をも近頃は絶えず訪うてゐた。なほ明石上や花散里なきにも母としての奉仕は怠らないのだが、かうした中にも紫上が自分の心を知る機會なくして永眠したのを口惜しく思ふのであつた。

薫もかうした中に成長してゆく。源氏の遺囑で冷泉院が萬事その面倒を見て下さる。皇后も皇子のおありにならぬ淋しさに薫を殊に愛撫なすつて、その元服なきも院でおさせになつた。十四の年である。宮も二月に侍従になり、秋に右中將に進んだ。母尼宮は心淋しく勤行三昧に入つて、時々薫の行くのを却て親を見る様に懐しがるのも氣の毒で、側についてゐて慰めて上げたいと思へど、院や帝が常に召されるので、それも心にはなかつた。さうした中にも薫の心を常に苦しめてゐるのは、幼い頃に知つた父源氏の涙であり、又それはなしに洩らされた謎のやうな語のふしゝである。けれども問ふべき人もなし、専心に佛に事へてゐる母にはそぶりにもそれ知られたいくない、薫はわが心一つに解き難い深刻な疑問を包んで、母の發心の動機もそこに秘密が伏在してゐる事も想像されなくてもない。何やかやを思ひ廻らす時、薫の心に湧いて來るのは出離の念であつたけれど、周圍の事情はそれを許すべくもない。

薫も匂宮も當代の青年貴族の中にあつて殊にすぐれた美しさを有つてゐた。薫は冷泉院や兄夕霧の保護の下に世間的地位は進んだけれども、人並みの戀を追うて狂ふには餘りにその心は



憂鬱にござ、れてゐた。然し若い彼の心には蝕まれつゝもなほ戀の芽生がないでもないが、進んでそれを得ようとする時、そこに臆れた考が湧くのであつた。冷泉院の女一宮に對する彼の戀はやがてそれである。匂宮も亦この姫宮に思ひをかけてゐた。元來この宮は薫は全く相反した性情の人である。随分浮いた戀をもしてゐた。この二人は幼い時から仲よく育つて来て、今でも親しい間である。

夕霧が匂宮を聲に望んでゐる事は前にもいふた。なほ薫をもその數多い娘達の聲がねの一人に思つてゐたけれど、さすがに餘りに近親であるといふ遠慮から我から打出し難かつた。多くの娘達の中に藤典侍腹の六の君の性質さだての優しく容姿も勝れてゐるのを夕霧は殊に愛してゐるのだけれど、嫡妻の子でないといふ弱味のあるのを心配して、丁度落葉宮に子女がないので、そこへ引取つて育てゝゐた。自然六條院に居れば匂宮や薫なきの眼にもついて、いづれかの戀を得る時であらうと思ふ親心である。

正月宮中に行はれた賭弓かひやの後の饗宴を夕霧は六條院で行うて、宮様方をもお招きしたいと用

意してゐた。その日の賭弓には成年の宮様達は皆參加された。中にも匂宮のすぐれて美しい姿は人目をひいてゐた。この日の勝負は左方の勝になつて終つた。薫は右方だつた。靜かに退出しようとするのを夕霧は目敏く見つけて、

「宮様方のお送りにあなたも一所にいらつしやい」を強ひて伴れだつて六條院へ來た。宮中から出て暫くする途中で雪がちら／＼降つて來て、えもいはぬ艶な黄昏時であつた。

六條院では正殿の南の部屋が當日の席にしつらへられて、宮達はじめ人々は各々の席について。酒宴がはじまつた。管絃も奏された。舞も舞はれた。さき翻す舞の袖に折から綻びそめし庭前の紅梅のいさ香しく匂ひ散る香を浴びて薫中將の端然と控へてゐるのを、物の蔭から覗いてゐる女房達は、けに似るものもない姿だと思ひ袖ひきさゝやきあうてゐる。

「右中將も一所に歌うてはさうかね。あんまりお客らしいぢやないか」なき、そのこりすましたのを美しき見ながら夕霧はそゝのかすのであつた。

紅梅

その頃按察大納言といつたのは故柏木右衛門督の弟で、宮廷の御おほえもめでたい人であつた。今の夫人は故太政大臣の女なる眞木柱の君である。この人は始め兵部卿宮の夫人になつて女の子を一人生んだが、宮の薨去後忍びくゞに大納言が通うてゐたが、此頃では公然夫人としたのである。大納言の子は先夫人の腹に女二人、今の夫人の腹に男一人ある。眞木柱は兵部卿宮の遺児を伴れて大納言家に來てゐるのであつたが、繼母根性は微塵もなく家庭はほんこによくいつてゐた。

三人の娘達も仲よく大人びて、同じ頃に裳着の式も擧げられた。その頃から結婚の申込は次々來る。帝からも東宮からお召があつたが、帝には中宮が時めいていらつしやるのを心苦しがつて、長女を東宮に入内させる事に大納言は決心した。十七八の美し盛りである。御所に上つた當座は母眞木柱が附添うて、實母も及ばぬ世話をしてゐた。

眞木柱の連子の女王は大そう内氣な人で、母の顔も正面には見えなほさだが、美しさは二人の娘達に優ることも劣る事はない。母は大納言がこの人の結婚の事なごいふ折はいつも、ごうも結婚生活に入つて幸福であり得ないやうな性質の人だから、自分が存命中は充分面倒を見てやつて、その後は尼僧にでもして、世間から後指をさゝれないやうな世を送らせたいと涙ながらにわが心の程をいふのであつた。

母が宮中へ行つて留守であつた或日、大納言はこの女王の方へ來て、御簾を隔て、物語をして居る中に、この女王のかすかに答へる言葉なききくにも、わが實子にもまして立派な女であるらしく想像されて、その手から妙なる樂の音を聞きたく思つて女房を呼んで琴を召した。折から若君が宮中へ參らうとして來たのを召して笛を吹かせて、

「でも、だんく上手くなつたね。こちらの姉様に時々合せて頂くらしいね。なき稱めて、女王に此際是非一曲合奏するやうに勸めるので、仕方なしに爪弾にいそよく合せて弾きました。その中にも若君が參内を急ぐので大納言はふと思ひついて軒に匂へる紅梅を一枝折らせて、紅

の紙に

心ありて風の匂はす園の梅にまべ鶯のこはずやはある  
と書いて

「兵部卿の宮様はまだ御所にいらつしやるだらうから、これを差し上げてくれ」と云つて若君に托した。

自分から手紙をやつた後で、返事をして得た紅梅の文だつたらなき、若君からそれを得た匂宮は思ふ。

「なぜこの花の姉様は東宮様へ上られなかつたの。」

「存じません。でも誰方かの奥さまにはなるのでせう」なき若い人はいうてゐる。

花の香に誘はれぬべき身なりせば風のたよりを過ぐさましやは

こんな當りさはない歌を宮は大納言にかへした。心はかの女王に傾いてゐた。

ある日御所を下つて來た眞木柱は良人に東宮が衣の移香から、若君が匂宮に近づいてゐるな

き仰しやつた事を話して、

「宮様からお召しでもありましたの。今まではそんな風も見えませんでしたのに。」

「さう。此間あの宮様が梅がお好きと聞いたので、東の女王の庭の紅梅を一枝お送りしたのでがね、その時宮様の所でお泊りしたさうだから、その折の移り香だつたらう。ほんまに梅はいゝね。あの宮様のお好きになりさうな花だ」なき花に托言けて宮をほめすには居なかつた。

東の女王ももう年頃なので匂宮が自分に示す心は充分に汲み知つてはゐるが、例の内氣な性情から手紙の返事なきもした事はなかつた。宮はさうした女王の態度に、ますます戀が深くなつてゆく。眞木柱も宮の切な心を知つた時、女王を許さうかとも思ふのだけれき、方々の女に通うてゐる宮を愛娘を一所にして後の歎きを思ふ時は、躊躇せずにはゐられなかつた。殊に匂宮は此頃宇治の宮様の姫君にも淺からぬ志を運んでゐるのだつたが、これも眞木柱の心を鈍らす一の重なる原因となつてゐた。

竹 河

源氏の一族を離れてかの故太政大臣家の子女達の事に筆を移さう。故大臣は瑠璃君を妻として三男二女を設けた。俄かに大臣が病歿してからは、大臣が心にかけてゐた娘達の入内もいつしか實現を見ずに過ぎた。故大臣の偏狭は政敵なごも多くその薨後は生前の權勢に引きかへてみじめな程物しめやかな日がつゞいた。夕霧は亡父の志をついで實の兄弟も及ばぬほどの親切をつくして、折々は訪ねて慰めたりしてゐた。帝は會て大臣が奏してゐた事をお忘れにならずもうその娘も大きくなつたらうと思召して宮仕せしめよとの御沙汰が、この頃瑠璃君に下るのであつたけれど、ならびない中宮の御さまを思うては急にお承けをする心にもならずゐる所へ、冷泉院からも懇望なさるので、瑠璃君は自分が院の思召を背いた事を考へるに、わが娘を院に奉らうかなと思はれるのであつた。二人の娘達は美しく生ひ立つて來るので、心をかけて戀する男達は大勢あつた。

夕霧の子なる藏人少將は三條の雲井の雁の腹に出來た子で兄弟中での俊秀であつたが密に瑠璃君の姉嬢に心を寄せて、女房達を手なづけてわが思を娘に傳へさせるのを母なる瑠璃君はうるさくも又氣の毒にも思うてゐた。少將の母雲井の雁からも、父夕霧からもその結婚について申込んで來るのだが、もう少し官位が進んでからなら妹嬢を許さう、姉には普通の結婚はさせたくない。瑠璃君は思うてゐた。少將は先方でさうしても許さないのなら女を奪うてゞも一所にならうとまで思うてゐる。薫も此家の息子達に誘はれて訪ねて來る事も折々あつた。瑠璃君もその質實な而も優美な氣質を賞めて、なつかしげに語らふ折なきもあつた。しかし若い女達はあまりに靜な彼を物足りなく思ふやうな事もあつた。

正月に瑠璃君の兄弟の大納言や、眞木柱と同腹なる藤中納言なきが來た時、夕霧も六人の息子をつれて來た。その中で藏人少將が一番目立つてゐたが、物思ひにこそすれば吐息をついてゐた。瑠璃君は何くれ話の序に冷泉院から娘の入内を懇懇されてゐる事、女御が萬事世話してやらうといはれるので自分も宮仕さすつもりになつた事なきを夕霧に告げた。こゝへ集つた

人達が三條の尼宮へ伺候の爲めに出て行つた後へ、夕方薫が来た。そのあてやかさ。女房達はおこなくしてゐる薫に何だかだき戯かた諷ふうふのであつた。薫はその時瑠璃君が自分を「立派な眞面目な人」に評したのを心淋しく聞いた。

その二十日過ぎて梅の花盛に薫は藤侍従を訪ねた。中門を入らうとするこしよんほり立つてゐる男があつた。それは戀にやつれた少將であつた。戀する男の苦惱を薫はしみく思ふ。姫君達のすさびだらう、琵琶びば箏そうなどの音が洩れてゐた。物の音の絶間求めて二人は連立つて奥へ行つた。瑠璃君は二人に琴を勧めた。少將は催馬樂を謳ふ。この侍従は父大臣に似たのか音楽など餘り心に入れないので、酒だけを飲んでゐるのを母にいはれて皆と一所に

竹河の橋のつめなるや

橋のつめなるや 花園に

花園にわれを放てや

われを放てや めざしたぐへて

ミ催馬樂を歌うた。少將は薫が今宵例ならず打解けて振舞ふのを見てはたゞさへつれない女の心がます／＼彼を離れはすまいかを惧れるのであつた。

三月になつて櫻の花が咲いた頃、二人の姫は所在なさに碁を圍んでゐた。侍従がその勝負を判じるのである。そこへ二人の兄が来た。一人は中將、一人は、辨官である。中將は二十七八で、もう一廉の分別がついてゐて、妹達を亡父の意志に従うて宮仕させたいなき思つてゐた。「あなた方がまだ小さかつた時、この櫻を自分のだ／＼云つて争つた事があつたね。その時お父様は姉様のだ／＼仰るし、お母様は小さい方のだ／＼仰つたのを、あなた方は随分残念がつたものでしたね」なき中將は云うて、老木になつた櫻に對して昔を偲ぶのであつた。母が抱いてゐる冷泉院へこの姫を上げるのには二人の息子達は反對で、帝へは中宮に憚るのなら東宮へミいふ意見を持つてゐた。

中將達が去つて又碁が始つて、三番勝負で勝つた方が櫻の所有主になる事なきいふのが戯にきめられた。夕暮が迫つて来たので、簾を上げて端近で碁を打つてゐた。例の少將は侍従を訪ね

て来たが留守だったので、その邊を歩いてゐる廊の戸が明いてゐたので、覗くと思ふ人が見える。夕闇にしかこは分らぬながら櫻色の衣がそれを知れた。内では勝負がきまつて右方―妹方の勝ちなつたらしい。

「高魔の亂聲が聞えてもよい時でせうに」なきいふ者がある。宮中の勝負遊に右方が勝つた時には高麗樂が奏せられるのが常である。何ともわけはわからないが面白く思はれて、何か自分も口を出したかつたが、この際餘り心無い事と思はれて、その日は思を残してそのまゝ歸つた。

少將はその日佛に見てからその戀は増すばかりである。母をせびつて女の親へ結婚を促すけれど、先方では姉を院に奉り、その後には妹を少將に許さうと思つてゐるらしいのが焦心しく、侍従を訪へば、彼は薫からの手紙を見てゐた。薫の文には

つれなくてすぐる月日を數へつゝ、物うらめしき春の暮かな  
なき失戀の心がほのめかしてあつた。

いよ／＼院參の日が四月九日と決つた。夕霧からも、按察大納言からも何かこその心添をし

た。少將はこんな手紙を書いて

今は限りと思はれる命のさすがに悲しく惜まれる事よ。哀れと思ふこの一言でもおかけ下さるなら、それに力づけられて暫しの命のびる事もあらうか、こんな事ははかなく思はれま

す。

姫君の方なる中將といふ女房へ送つた。

あはれてふ常ならぬ世の一言もいかなる人にかくるものぞは

この手紙のはしにこんな歌を姫君は書いたのを中將から少將へ送つた。冷泉院へ參つた姫君はその寵を恣にしてゐる。しかし帝はその事を甚だ不満に思召していらつしやる。

翌年になつて姫はもう姫宮の母になつてゐた。そしてその頃から叔母なる女御との間に二人の心から出るでもない葛藤が女房達の間に醸され初めた。かうした事を兄達は心配してゐたのだなき、母を責める様な時もあるのを瑠璃君はつらいこゝに思ふ。

姉の院參についての帝の御不快を緩和せんが爲めに瑠璃君は自分の尙侍を妹嬢に譲つて帝の

側近に奉仕せしめやうと思つて、方々に氣兼ねながら宮中に上げた。そして自分はもう出家したいと思つただけれぎ、子供達から認められてその素懐もえ違けなかつた。

その中にも年月は経つ。源侍従は宰相中將になつて世間でもはや當代青年の第一人者である。藏人少將も三位中將になつて左大臣の掣になつてゐるが、なほ初戀の甘さを忘れずに院の女御を慕つてゐる。その頃院の女御は里勝ちに暮してゐる。これより先き皇子を生んだのだが、その頃かの院の外の女達から何かさいはれ勝だつたのである。尙侍になつた妹の方は却てよくいつてゐる。

その頃左大臣の薨去から高官に更迭があつて、薫は中納言になり、三位中將がその後を襲つて參議に任ぜられた。瑠璃君はかうした世を見るにつけ、自分達のみじめな運命を悲ますにはゐられない。息子達も官位は意のままに進まず、年は相當に取つてゐながら、まだ參議になつてゐないのである。

橋 姫

その頃世間から忘れられてゐた親王が一人あつた。故桐壺院の第八の皇子で、御生母も立派な家柄の方であつたから、東宮なきにもお立ちになるべき宮であつたが、時勢の變轉は宮を逆境に落し、外戚の人達も夢みてゐた權勢を奪はれて、出家したりしてしまつて、宮は全く頼りない身になつてしまつたのである。夫人は前大臣の女で、宮との間は實に平和であつたが久しく子がなかつたのを淋しがつてゐるが、その中に夫人は妊娠して美しい姫君を生んだ。こよなく思つて育てゝゐる中、また夫人は身もちになつたので、今度こそ男の子をと思つてゐるが、さしつゞいて姫君が生れた。産は平産だつたがその後の惱みで夫人は遂に他界してしまつた。宮はその餘りにあつけない戀の最後にたゞ呆然たるのみであつた。出家を遂けるにはまたない機會だと思ふものゝ、あゝに二人の幼兒を誰が育てゝくれるだらうと思へば、それが絆になつて決心もつかないのであつた。かくて一日一日出家の日を延ばしてゐる中に二人の姫君達はす

くく、生ひ立ち、生ひ立つまゝに美しくなつてゆくのを、宮はせめてもの慰めとして日を送つてゐた。

年月を経るにつれて昔から仕へてゐた人達も一人去り二人去りして廣い御殿の中はだん／＼淋しくなつてゆく。宮は形こそ在俗のまゝなれ、出家したやうな心もちになりきつて、それでも姫君だちに音楽を教へたりなさしてゐるのであつた。姉嬢は琵琶を、妹嬢は箏を習うてゐる。そのわきで宮は經卷に目をさらしながら歌なき姫達のために歌うてやる。かくして淋しい日が經つてゆく。

ある麗かな春の日に池の水鳥が楽しさうにつれ立つて遊んでゐるのを羨しく見ながら、姫達に琴を教へる。小さいながらにかき鳴らす爪音はきり／＼に興あるさまである。ミ、涙がちつ、宮の目にはにじみ出るのであつた。

うちすてゝつがひ去りにし水鳥のかりのこの世に立ちおくれけん

ほん／＼に美しい宮である。お召物なきもくたく／＼になつたのを着て、しほたれていらつしやる

風情もなか／＼に艶である。姉嬢は硯をひきよせてそれに手習のやうに何やら書いてゐる。

「これにお書きなさい。硯に手習なきするものではありません」こいつて宮がさし出す紙に、

いかでかく巢立ちけるぞこ思ふにもうき水鳥の契をぞ知る

と恥かしがつて書いた。妹嬢にもすゝめてみた、

泣く／＼も羽うちきする君なくば我ぞ巢守りになるべかりける

かうした幼い歌も今の宮にこつては涙なくて見る事は出来ないのであつた。而も姫達の着物ももう古びてゐる

かうしてゐる中に京に火災があつて、この宮の御所も類焼の厄にあつてしまつた。京の中にはもうきこもて御所もないので、丁度宇治の里に所有の水莊があつたので、そこへ移つた。捨て去つた世ながら、今更都を去るのが何となく悲しかつた。こゝは川邊の事こゝて水の流れがやかましく耳にひびいて靜かに冥想に耽るには便も悪かつたけれき、諦めるより仕方がなかつたかうした所へ移つては更に亡き夫人の事が偲ばれるのであつた。都を離れては稀にも訪らひ來



る者は田舎の人達が宮を慕うて参り仕へるのみである。

こゝに宇治の山寺に何がし阿闍梨といふ聖僧が住んでゐた。學問もあつて、世の人の尊崇もたゞならぬ僧であつたが、俗世との交渉をきらうて宮中のお召なきにも餘り出る事はなかつた。宮はこゝへ移つてから、その師として法文の要義なき問うたりしたのを、阿闍梨も尊い事と思つて、時々参邸しては甚深微妙の教義を明めて宮を菩提に導かうとしてゐた。

この阿闍梨はまた冷泉院にも折々召されて院の法の師となつてゐた。ある時院の御所へ伺候した時、何かの序に八宮の道心の固い事を申し上げて清僧も及ばぬやうな精進ぶりを稱へたのであつた。

「まだ剃髪はなさらないのか。俗聖なき、若い者はいうてゐる。私も心からお氣の毒に思つてゐる」なき院も仰つた。薫も御前に侍つてゐて、宮の事を聞いて、自分が出離の心を抱きつゝ、世と共に押し流されてゐる臍甲斐なきを醜く感じて、八宮を懐しく思ふのであつた。

「御出家のお志はありながら女王様達の事を思召して素懐を遂げずにいらつしやるのでござり

ます。それに女王様達のお琴の音の面白き。極樂もかくやと思ひやられる事でござります」なき阿闍梨は申し上げた。院はその女王をゆかしく思召すのであつた。薫は阿闍梨の歸る時、「一度八宮様にもお目通りして尊いお話も承りたいと思ひますが、さうぞあなたからも宜しく仰つて下さい」なき頼んだ。

かくて薫は宮の消息を通はしそめ、やがて自らその隠栖を訪れた。聞きしにもまして淋しい水莊に、女王達をも古代の人めかしく想像されてすさまじい氣も起る。その後度々訪れるにつれ、何さなしに女王達に心を引かれるやうな心地がせぬでもないのをわれながら淺ましく思ふ。かうしてゐる中に三年の月日が過ぎてしまつた。

秋の末頃、宮は四季に分けて行ふ念佛を、折から川浪のはけしくて心がおちつかない時なので、七日間の勤行を阿闍梨の山寺で修さうとて山へ登つた。その頃薫は久しく宮に御無沙汰してゐた事を思つて、二十日頃の月のさし出る頃都を出て馬を宇治に駆つた。進み行くまゝに霧は深く道も見えぬ茂林の中を行く。心細い道であつた。宮近くへ來るに樂の音が洩れるのを、

今までは不幸にもかうした折に合せなかつた。よい折だと思つてそつと忍んで耳をすます。こゝその氣色を知つて家司の一人が出て宮の不在の由をいふ。薫はその男に女王達の氣色見るべき所を求めさせて透垣の下に潜んでゐた。

女王達は霧渡る月の面を見出して簾を高く捲かせてゐた。内の一人は柱の蔭にゐて撥を手まさぐつてゐるこゝ、折しも雲に隠れた月が俄に明るさし出たので、

「扇でなくても撥でも月は招けるのね」なごいふ顔つきも愛らしく美しい。傍に物に寄り伏してゐた人は琴の上にかぶさるやうにして

「入る日を返す撥は聞いてゐますが、これは又異つた事ですわね」こゝ笑つていうた様子は一段と氣品は高かつた。薫は會ての想像を裏切られて、物語の中の女達を今現實に得たやうに思つた。霧が深いのではつきりは見えなかつた。月がまたさし出ようとした時、奥で誰か人の居る事を告げたのか瀬を下して皆入つた。

薫は更めて女王達にあひたいと申し入れて、前に見た御簾の前へ来てすわつた。そして切は

い戀の心をいふのである。女王は奥に寝てゐる老女を起して来るまでの久しい間をむげに薫を待たす事も出来ず、自分でかすかに返事なごしてゐた。そこへ老女が起こされて出て來た。老女は薫のこの宮に對する厚い情誼を感謝し、さて

「出すぎた事と遠慮されるのでござりますが、よい折があつたら貴方に申上げたいと思ふ事がござりまして、その折の來るのを佛様にお祈りしてゐた甲斐があつて、今かうお目にかゝつた事を嬉しう存じます」こゝいひつゝ、涙にくれるのであつた。この老女のいふ所によれば彼女は辨さいつて、故柏木大納言の乳女の子であつた。そして柏木が最期の際に言ひ遣した言葉を薫に傳へたいといふのであつたが、その時はもう曉方近くなつてゐたので、またの折を期して口をつぐんだ。薫の心は恐しい豫感に打たれた。夜が明けた。西面の部屋で休息しつゝ、川面を行き交ふ柴舟を眺めてゐる。

橋ひめの心をくみて高瀬さす棹のしづくに袖ぞぬれぬる

こんな歌を女王に持たせてやつた。

薫は匂宮を二條院に訪うた。それは静な夕方であつた。霧渡る曉月夜に見た姉妹の女王の佛を、宮の好奇心を唆るやうに語りつゞける。聞く宮の心は宇治の空へあくがれるのであつた。薫の心には辨の言葉がひつか、つて一向にかの女王に對する戀に精進せしめないものであつた。

十月五六日頃に薫は網代車の簡單な行粧で宇治へ行つた。宮は喜んで、山から阿闍梨を請じ下して諸共に法談に夜を更した。薫は宮に樂の音を所望し、猶女王のそれをも欲したけれど女王達は恥ぢて音を立てる事をしなかつた。

「今日明日をも知らぬ命に、たゞあの二人の上だけが氣が、りです」なき宮はいふ。

「後見なき立派な事は出来ませんが、命のある中は出来るだけ女王達のお力になりませう」ミ頼もしげに薫は答へた。

かくて晨朝の勤行に宮の立たれた後に、例の辨を召して薫は先達の話を聞いた。辨は薫の最も恐れてゐた話を彼に傳へた。尤もこの秘密は辨も一人侍従さいふ女が知つてゐるきりだが侍従は疾うに死んだのだ。辨は袋に入れた黴臭い古反故の一卷を取り出して、

「これは故大納言様からお預りした品でございます。さうぞあなたのお手でお始末なすつて下さい」ミ云うて薫に渡した。

薫は京へ歸つて袋を取り出して見た。舶來の浮線綾の切を縫うて細い組紐で口を結んで、柏木の名を書いて封印がしてある。開けるのが薫には恐しかつた。柏木の手紙に對する母からの返事なきも五六通あつた。柏木の遺書は危篤に瀕して書かれたもの、やうに筆蹟も亂れがちに、

自分の病氣は重つて、もう最後の日が近づいて來た。仄かにも君にもものいふ事の難くなつた事を思ふにも、いよゝ君を思ふ心は切になつて行く。君の姿も昔に變りし事を耳にしてわが心そゞろに悲し。

こんな事が五六枚の紙に書いてある。そして

目の前にこの世を背く君よりもよそに別るゝ魂ぞ悲しき

かうした歌も書いてあつた。

命あらばそれとも見まし人知れず岩るにミめし松の生ひ末

かうした歌もあつた。そして包紙には「侍従の君に」がある。紙魚の棲處になつて微臭いが、文字はそのまゝに残つて、一句一言凄惨の氣に満ちてゐる。かうした恐しい事がまたあらうか。薫は参内しやうと思つた心もち挫かれて、母尼宮の前へ出た。宮は何心もないやうに若やかな様をして看經の折であつた。恥しげに經卷を取りかくす母を見ては、かうした秘密を知つた事は永久に知られてはならぬと薫は心一つに籠めおくのであつた。

権 本

二月二十日頃に匂宮は長谷寺へ参詣した。これは以前からの願であつたが、機が無く過ぎてたのを、宇治の宮のなつかしさに、今度思ひ立たれたものらしい。この河縁に六條院の別荘があつたが、宮はそこへ歸途に立ち寄るので、夕霧もお迎に出る筈だつたが、急に差支が出来てえ出なかつた。宮はそれを結句嬉しい事と思つて、今日はゆつくりこゝで疲れをやすめて歸京は明日にしやうと思つた。夕方琴なき召して遊ぶ。八宮の水莊はすぐ川向なので樂の音も手

に取るやうに聞える。八宮はそれを聞くにつけ、自分もかうした物の音を手に觸れなくなつてからも幾年になるだらうなき、來し方も哀れに感じる。そして女王達がかうして埋木になつて朽ちてしまふのが氣の毒になつて、聲にするなら薫だとは思ふもの、當人がその心になつてくれるか問題だと思ふ。その外の當世の浮いた心の男達を聲がねしやうなきはさうしても考へられない。こんな事をあれこれ思ふと八宮の心はおのづからいたまざるを得ない。旅の人達が快く酔つてゐる中に水莊の夜はほのく明けた。霞こめた朝空に、はら／＼と散る櫻や、今咲き初むる花なきの見渡されるに交つて、微風にそよぐ川添柳の水にうつれる影なきの面白いのを人々は飽かず眺めてゐる。薫はかうした時も八宮を訪ねたいと思ひつゝ人目をかねてゐる所へ宮から

山風に霞ふき解く聲はあれき隔て、見ゆるをちの白浪

と書いて來た。返事は匂宮が書いた。薫は音楽好きの人達を誘つて、酣醉樂を奏しつゝ、舟を熾して行つた。宮の水莊は清楚にして氣品があつた。質素な網代屏風なき立てた部屋へ、相傳

の名器をつぎ／＼出して樂を客に勤めるのである。宮は時々箏を弾じた。客の中にはこゝに住む女王の上を思ひやりつゝ、竊に心を盡す者もあつた。

匂宮はしみ／＼渡つて行つた人達が羨しかつた。かうした折を過しては思つたので、面白い櫻の枝を折つて、思ふ心を歌に托して送つて來た。女王達は返事をすべきか否かに迷つたが妹の女王が姉に勤められて書いた。

かざし折る花のたよりに山がつの垣ねをすぎぬ春の旅人

こんな歌も書かれてゐた。匂宮は歸京してからも度々手紙を書いた。その都度返事を書く役目は妹女王であつた。姉女王は戯言にもかうした事には心もなかつた。今年姉女王は二十五、妹女王は二十二年下の二十三である。

薫は秋に中納言に昇進した。久しく、絶えて過ぎたと思つて宇治へ來たのは七月頃である。都ではまだ秋を感じない此頃もこゝでは既に秋氣は動いてゐた。しみ／＼した物語の末、宮はなき後の事なきをもくれ／＼も頼みおくのであつた。

我なくて草の庵は荒れぬもこの一こゝはかれじぞ思ふ  
なき口誦んで、

「もうあなたにお逢ひするのも今度ぎりの様で心細いので、堪へきれずに、いろ／＼取り亂して、ほん／＼に失禮いたします」なきいつて泣けば、薫も

「さうした世にか一度お約束した事を違へる私でせう。さうぞさうした心細い事は仰らずに下さい。相撲の節なき過ぎてまた參上いたします」なき涙ぐまれる。宮は勤行のため持佛へ入る。薫は例の辨を呼んで昔物語なきする。入り方の月隈なくさし込む縁に薫はゐるのだ。女王達は奥まつて居たが眞面目に話す薫に時折は返事なきもしてゐた。薫の心はこの女王達と匂宮と自分と、この三者の關係をあれこれ思ひつゝ、まだ夜深い中に歸つた。匂宮も紅葉の頃にまた宇治へ行かうと思つて、手紙だけは始終書いてゐた。女は匂宮が眞劍に戀してゐるこゝは思はない、はかない事と思つて時々は返事を書く。

秋も深くなる。宮は例の念佛のために阿闍梨の寺に籠らうと決心した。女王達に

「人の世の常きしてさうしても一度は別れなければならぬ。みよりさいつて一人もないあなた方を置いて私一人この世を去るのは悲しい。しかしそれも時さあればせん方もない事だ。たゞあなた方は軽々しく男のいひよるまゝにこゝを去つてはならぬ。われ一人のためのみでない、死んだ母様の名にかけても自重してこゝに住むべく運命づけられてゐるのであつたら静かにこゝでお暮しなさい」なき訓戒するのを女王達は悲しく聞くのであつた。なほ女房達にも呉々も女王の行末を頼んでおいて、その日は未明に女王の所へ来て

「留守中も心細がらんやうに。音楽でもして心を慰めなさい。思ひのまゝにはならん世なんだから」なきいひおいて宮は山に上つた。

心細い日が過ぎて、今日が満願といふ夕方山から使が来て宮の手紙を齎した。それによる宮は今朝から風邪の心地で、その手當して寝てゐるさいふのである。女王達は悲しさに綿入の衣なき調へて山に持たせてやつた。山では阿闍梨が親切に看護をしてゐる。

「さう重病きは申されないやうですが、さうやらお壽命が盡きたのではないかこ存ぜられます。

女王様の事は、人はそれ／＼きまつた運命で支配されてゐるのですから、さうお氣におかけになる事はござりません」なきいつて、阿闍梨は宮に最後の大覺悟をお勧めするのであつた。

ある曉方の事である。女王達は淋しく明けゆく川面にひゞく寺の鐘をあはれき聞いてゐる所へ山から使が来て宮の薨去を報じて來た。餘りの悲しさに涙も出ない。送葬の事は阿闍梨がその寺で行うた。女王達が父の亡き骸に最後の別れを告げたいさいふ望も協はなかつた。宮の薨去を最も悼んだ者は薫であつた。弔問の事なきも殊に手厚くした。匂宮からも手紙はよく來たが返事は氣がすゝまなかつた。

故宮の中陰なき果て、薫は宇治を訪ねた。御簾を隔て、女王と相對してゐても、その悲しみに沈んでゐる様が見はれて哀れは身に沁むのであつた。

色かはる淺茅を見ても墨ぞめにやつるゝ袖を思ひこそやれ

薫は獨言のやうにこんな歌を口誦んだ。

色かはる袖をば露のやみりにて我身ぞさらにおき所なき

女王はもう堪へられなくなつて奥へ入つた。辨がその代に出て来た。薫はこゝの宮の薨去を悼み、その形見の女王達の世話を托された自分であるが、わが生ひ立なき聞いてはぢつ、こしてゐられない氣もするこいふやうな事を涙ながらにいふのを辨は殊に悲しき聞くのであつた。かうした間にも薫はこゝの女王をさうかしても妻にしたいと思ふ心が堅くなつて来る。

女王達の涙の中に宇治の里に冬も深くなる。宮の薨後は阿闍梨達も来る事はなくなつた。例年の事にて山の寺から炭を送つて来たので、女王達は宮の生前の習慣を思つて綿衣なごを返した。その使の僧達が山へ登るのが木の間に見えつ隠れつするのを見送りつゝ、父宮が出家してゝもいゝから生きてゐて下さつたのならこゝ、まづ涙が湧き出るのであつた。

年の暮に薫は宇治を訪うた。新年になつては何かミ用が多くて来られまいと思つたからである。女王もその志を辱く感じた。前から見れば大分親しみを以て女王は彼に接してくれるやうになつたと思ふにつけ、それ以上の事が望まれる。薫は匂宮が女王を思ふ切な心をいうて、その性格を世人は誤解してゐる、ほんこに頼になる宮である事を力説して女王の答を待つのである。

る。姉女王はそれは誰をさすのか判断に苦しむのであつた。薫は今まで宮の手紙に返事を書いた人は誰だつたらうこいふ。

雪深き山のかけはし君ならでまたふみ通ふあこを見ぬかな

これは女王の返事であつた。薫は

氷柱さぢ駒ふみしだく山河をしるべしがてらまづや渡らん

こ一歩突つこんで云うたが、それきりでまた話は故宮の上へ歸つてしまふ。薫は故宮のお居間であつた部屋を開けさせて見るこゝ、さすがに佛前に花は供へられてはゐるが、あたりは塵でいっぱいだったのも悲しい。出家の本意を遂げたであらう時の事なき語りあうてゐたのも遠い昔のやうに思はれて悲しかった。

立ちよらんかけこ頼みし椎が本空しき床になりにけるかな

こ口誦んで夕暮の柱によつてゐたその美しさ。

春になつて阿闍梨から雪間をわけて摘んだ芹や蕨が送られた。こんな物を見るにつけ亡き父

が偲ばれる。

匂宮は夕霧の女との結婚の話なきには耳を借さず、一途に宇治の女王に思をかけて薫を責める。薫も姉女王を戀しながら、女から靡くまでは氣長に待つてゐようとしてゐる。

その年三條宮が炎上して、尼宮も六條院へ移つた。それやこれやで久しく宇治へも行かなかつたので夏のある暑い日、朝早く水莊を訪ねた。ものゝ隙から美しい人——濃い鈍色の衣に袴を着けて珠數をかくし持つてゐる人の姿が、几帳のかけから外を見てゐるのが見えた。その横顔の柔かな線よ、女一宮もかうした方のやうだつたなき、嘗てよそながら見たその人の佛も思ひ出されて、何きはなしに吐息もつかれた。

「あの襖の所があんまりむきだしよ」なきいつて見おこした人は前のより一段ミ品があつた。

「むかうに屏風も立て添へてござりますから」なき女達はいふが、なほ氣が、りらしく奥へ入らうとする。黒い衣にやつしてはゐれき、なつかしい姿である。紫の紙に書いた經を持つた手つきもすつきりして優しさうである。立つてゐた人ミ顔を見合せてにつこり、微笑んだその美しさ。

さ。

### 總角

幾年か耳馴れた川風も今年の秋は殊に悲しく聞かれる。もう宮の一周忌が近づいたので、女王達はその準備をしてゐる。阿闍梨や薫なきが大體の事は引受けてゐた。薫は自分でも來て弔問する事を怠らなかつた。ある日薫が來た時は女王は法會の時の香机の飾りの總角を結んでゐたらしい。簾を隔て、几帳の隙からそれをおほしいものが見えた。薫は願文の草稿を書いたりした序に紙のはしに

あけまきに長き契りを結びこめ同じ所によりもあはなん

と書いて簾の中へ入れたのを、女王はうるさく感じたが

ぬきもあへず脆き涙の玉の緒に長き契をいかむすばん

と返した。薫は自分の思ひはいつものやうにかう出ばなを折られては、もう再び云ひ出す事も



出來ず、匂宮の戀をまじめに女王に取りついであれまでに思ひ入つてゐる宮だから末の心配はない、ごにかくはつきりした意見をききたいなご思ふのであつた。女王もさう返事してよいか分らぬ風で、自分は結婚生活はしたくない、まだ若い妹にだけは人並の生活をさせたいご思ふごいふやうな事をいつて奥へ入つた。薫は例の辨をよんで

「はじめはたゞ宮の御法談を承りに來たのだが、後には女王様達の後事をも宮から托されたので、私が姉の女王様と結婚し、妹の女王様には匂宮様を嫁にしたがい、ご思ふのだが、女王様はさうもはつきりして下さらん。私は今までかうした事に心を入れた事はないのに、不思議な因縁でかうまで思ひ入るやうになつた。かうした事は世間にも例もある事だご思ふが」なごき口説くのであつた。それに對して辨は姉女王は出世間的の考を持つてゐる事、そして薫の親切は充分身に沁みてゐるが、自分がその妻となる心は絶対にない事、又匂宮についてはさうしても不安の念が去らない事、妹を薫の妻にしたいご思つてゐる事なごを答へた。

薫はその夜は宇治に泊つて姉女王と心長閑に物語したいご思ふ。女王も薫の自分に對する戀

を知つては、對面は苦しいご思ふのだつたけれど、今更さうも出來ないので、佛間の簾の中へ屏風を立て、そこで逢うた。女達はわざと近くは遠慮してゐる。暫くして女王は心地が悪いから奥へ入らうとする袖を控へて、薫は屏風の端からやをら中へ入つた。鈍色にやつれた女王に薫は哀感を唆られ、忌が明けてから結婚の話は進めてもよからうご例の心に思ふ。明方近くなつて供の人達が起き出たり、馬の嘶くのが聞えたり、何だか旅宿の朝のやうで薫にはおもしろくも思はれた。明るなつた方の戸をあけて二人は朝の景色を眺めてゐる。互に艶な二人の姿である。馴れぬ後朝の哀れを感じつゝ、薫は歸つた。

宇治の女達は女王が薫と結婚する事を心から望んでゐる。この二人が立ち並んだ姿はどんなにか似合の夫婦だらうご思ふ。女王は皆のさうした考を知つては油断はならぬご思ふ。いつ寢所へ薫を案内するかもしれぬ。さうした時には妹をおいて自分は逃げよう、妹と一旦關係が出来た上は、よし妹が醜い者でも薫の性質として見捨てる事はあるまい、まして年若く美しい妹だから男の愛はその方へ移つてゆくだらうご思ふ。

今日も薫は來てゐる。辨はその消息を傳へて女王に薫との結婚をすゝめるのである。女王は返答もなくたゞわが奇しき宿命を歎く。その夜は宵少し過ぎる頃から風が出て、彼處此處の薨なきがたゞ鳴る。そのまぎれに女達は薫を女王達の寢所に案内した。姉女王はふこそその物音を聞きつけてそつと床をぬけ出た。さうなる事か身をふるはせて見てゐる。男は几帳をか、けて入つて見るに女がたゞ一人であるのを嬉しく心きめきしてよく見れば、わが思ふ人ではなかつた。あの人はそつとのがれたのだと思ふに、嫉ましい心はしたが、そのまゝに懇に語り明して、

「私の思ふやうに深く私を思つて下さい。氣の強いお姉様の眞似はなさるなよ」なき契つて、例の部屋に歸つて來た。怪しく夢のやうだつた昨夜の事を思ふにも、さうしても情ない姉女王を忘れる心はしないのであつた。殊にその日京に歸つてから書いた手紙に姉女王がよこした返事を見るに、さうしてあの人を怨みおほせよう、さうしたらいゝわが身だらうと薫は一夜思ひ明して有明の空も艶な頃に匂宮を訪ねた。

もう起きてゐた宮は薫の來訪を知つて直衣を着て出て來た。薫は階段の中途に腰掛けてゐた。

宮は上へも請ぜずに、勾欄に凭れて話をする。話は自ら宇治の女王達の上へおちる。

「近い中にきつと伴れて行つて下さい」なき宮はいふ。薫は例のやうにすぐ移らふやうな御心ならばつらからうなき親めいていふ。

「まあ見てゐて下さい。私はつひぞ今度のやうな眞剣な戀をした事はないのです」と眞面目にいふ。この二十六日が彼岸の果だからその日に約束した。

その日薫は一まづ宮をその附近なるわが由縁の家へ車をよせて、そこから馬で一緒に闇に紛れて水莊へ來た。辨を召して

「唯一言お前に頼みたい事があるが、あゝした無情い目にあうて恥しいのだけれど、も一度此間のやうに更けてから案内してくれないか」こいふ。それから姉女王にあうた。間の襖をしめてゐたのを難じるに、内から細めに明けた隙から、女王の袖を捉へて怨み言をいふ。宮は例の戸口に寄つて合圖の扇をはたゞと鳴らせば、女達は薫を思つて妹女王の寢所へ導くのであつ

た。さうは知らぬ姉女王は早く薫をそなたへ思ふ風なのを見て薫は自分が今日匂宮を拒みかねてつれて来た事をうち明けた。

「私のした事が罪に當るなら罰は受けます。宮の深い志を思へばかうせずにはゐられなかつたのです。あなたも宿世にお従ひになつてはさうでせう。間の隔は堅くとも人はもうさうは思つて居ないでせうに。」

「あなたの仰る宿世はかには目にも見えない事で、私には分りません。今のお話を承りましてほんごに私の心は亂れてしまつてゐます。それにまたそんな事を仰つて私を惱さないで下さい。少しおちついてから御返事はいたしませう。今晚はこれで休ませて下さい」女王はいふ。道理なので薫は袖を扣へてゐた手をはなした。さすがに奥へはいらずにゐる。鐘の音に惱ましき水莊の夜は明けんごする。

翌日も匂宮は遙々水莊を見舞うた。女王はたゞ姉や女房達のするまゝに聖君を迎へるのであつた。三日の夜の設けなきする所へ薫から

昨夜も参らうご思ひましたが、行つても甲斐ないわが身を思へばえ参りませんでした。今夜は何かごお役があらうかごは存じますが少し気分が悪いので失禮いたします。なご書いて縫つた着物やまだ仕立てない織物なごを多く送つて来た。

匂宮はその日参内したが、さうしても退出する機のないのに氣を揉んでゐる。中宮はそんな事も御存じなく、宮が此頃宮中に居る事が稀なのを帝も御心配なすつていらつしやるなき仰るので、益々心は急ぐが出る事が出来ずゐた。そこへ薫が来た。宮は今宵行く事の出来ないのを歎いたが、薫にすゝめられて、夜深く内裏を出て馬を宇治へ急がせた。

宇治ではこの日に宮が来ないので、もう捨てられたのでなからうかなご思ひ煩うてゐた。宮は中宮のお言葉なきを語つて、

「こんな風だから思ひながら来ない事も自然あるかもしれないけれど、氣にかけてはいけませんよ。こんな事を宮はいふけれど、こんな言葉はやがてもて離れてしまふ事を暗示するのではないかご女王は取越苦勞をする。明けゆく空に、山の端から日のさす影に女王を見るご、そ

の美しさ、いかな高貴の家にかしづき据ゑた女もかくはと思ふ。水の音もすさまじく、宇治橋も物古りて見え、霧の晴間に荒涼たる兩岸の景色も見えるのを、かうした所にさうして年月経た事か三宮は女の上を哀れに思ふ。女もかうした日の宮の姿を薫の打解けぬ様に比べて、かうなつた事を寧ろ幸福だつたとも思ふ。その後宮は暫く来る事が出来なかつた。たゞ手紙だけは毎日缺かさず書いた。

九月の十日頃薫は匂宮を誘うて宇治へ行つた。女王が薫に對する態度は昔に變らない。たゞさへ心細い秋をうちしめる雨に晩秋の哀感は悲しい戀する身には一倍沁みいる。女王もこもすれば薫の熱情に絆されないではないが、來ぬ人を待つ妹の様子なごを思ふ時、あゝいふ悲みは味ひたくないを考へ返すのであつた。夜が明けて歸らなければならぬのを宮は飽かず思はれて早く京へ移らせたいと思ふのだけれど、さてどこに住すべきか、その場所のないところが宮の心を痛めるのであつた。

十月になつて、網代の氷魚の漁期も來たし、それに紅葉もまだよいので、薫はまた匂宮を咬

かして宇治へ行つた。微行のつもりなのが、つひ人々の耳に入つて、去年の春の時の若人達も供をした。中宮の仰せをうけて夕霧の子の衛門督やその他の人達も後から來た。宮はかの水莊の梢の氣色、常磐木に交る蔦紅葉なき遠目にさへ淋しげに見えるのに胸も塞がる心地がした。管絃や詩歌に人々は夜を徹して興をやつて遊んだが、宮や薫にしては當初の企てが壞されて、折角近くまで來てゐて、戀人に逢へないのが悲しかつた。かの水莊でもこの樂の音を聞くにつけ、女王は近くに居て來てくれない男の心を恨んでは、父宮の言葉を思つて、匂宮に妹を許した自分の輕々しさを悔ますにはゐられなかつた。でも妹女王は宮の心を信じてかさほどに恨んでも居ないらしいが、さすがに多少は心を動かしてゐるらしいのを哀れに姉は見えてゐる。もしそれがよいと思つたら獨身を守れ三父宮の仰つた事が今に思ひ當る。姉宮は狭い女心に妹の結婚の事、さては自分達の將來の事なきをこつおいつ考へ、この果は、つひに心の過勞から病氣をひきおこして心の晴れる隙もなく食事も進まなくなつた。

その後も匂宮の宇治行はやまない。そこに戀人を持つてゐるのだといふ噂が中宮の耳に入つ

て帝に傳はり、二條院の住ひがいけないのだとて、匂宮は宮中に住ませられる事になり、なほその意志を問はずに夕霧の六の君と娶す事に相談が決つてしまつた。匂宮の憂鬱に閉ぢられてゐるのは勿論薫もこまつた事になつたと思ふ。

宇治では宮のさだえが久しくつゞいた事を歎いてゐる頃に薫が來た。女王が病氣を聞いて見舞に來たのであつた。あはぬこいふのを強ひていうてその病室の簾の前に通された。妹の事をいうて父宮の遺戒に結婚を戒めたのは道理だと思ふ。薫は心苦しく聞きながらも、宮が心ならずも來られぬ事情なき説くのである。薫は女王の病氣が意外に重いのを知つて、轉地に言よせて然るべき所へ移さうかなとも思ふ。平癒の祈禱の事なき山の阿闍梨にいひおいて歸つた。

その時の薫の供人が心やすくしてゐるこゝの女房に語つたので、匂宮も夕霧の女との結婚の談が女王の耳に入つた。物思ふ人のすなる眩枕してうた、ねしてゐる妹を見るにも女王はその話を物憂く聞いた。夕暮の空物凄く時雨れて木の下吹き拂ふ風の音が哀感をそゝる時、女王は過去を思ひ當來を考へるこゝ心細かつた。こゝしきり吹く風に妹女王は目をさまして父を夢みた

こいふ。室には香の煙が縷々立ちのほつてゐた。その夜、宮から手紙だけが來た。

あられふるみ山の里は朝夕にながむる空もかきくらしつ、

女王はたゞこれだけの返事を書いた。宮はこれを得て、もう十月も末になつてしまつた、まる一月も逢はずにゐたのだと思ふ。夕霧の方の話は逃れ得るだけ逃れてゐた。

十一月になつて薫が宇治へ來た時、少しはよいまきいた女王の病氣は大分進んでゐた。その夜、彼は女王の枕邊に近く病を看護したいと思ふ、女王もその志をも斥けるのは餘り思つて受けた。阿闍梨は薫に夢に故宮が俗體のまゝに見えて、この世に執着する心からまだ成佛できないでゐるなき仰つたこいふ。病床の女王もわがために父の後世を妨げてゐる事を悲し泣くのであつた。

薫は請暇を乞うて宇治に滞留してゐる。女王は薫の志を知るこ共に、病氣が癒つたらさうしてもその人の妻にならずにはゐられないと思ふ。さうすれば世の常の夫婦のやうにお互の缺點もよく見える事にならう、それが悲しい、寧ろこのまゝ死んだ方がまだと思へば、神佛に平

癒も祈らず、たゞ成行に任せてゐるのであつた。

京では宮中の御宴のある日の頃、宇治では風が強く吹いて、雪さへあわたゞしく降る。薫は病床近くに寄つて女王と話すのであつた。瘠せ細つた戀人が白衣につままれて、長い髪を枕の下にこぼしてゐるのを男は痛々しく見るのであつた。あゝもうこても助からぬこの人だと思ふ。こ男の目からは涙がこめぎもなくこぼれる。

「すこし快い日があつたら申し上げたい事もあるのですが、もうその日が来さうもないのが残り惜しうござります」なご女はいふ。

「かう短命な私ですのに、あの時妹の御結婚を承知して下さつたら、どんなに私も安心が出来たのでせう。ほんこにこれだけをお怨みに思ひます」なごも女王はいふのであつた。薫は苦しげにいふ女王に安心させるやうに、妹女王の事は飽くまで面倒を見ようないふ中にも、だん／＼容態が變つて来て、加持も祈禱もその甲斐なく女王の魂はこの世を去つてしまつた。たゞ寝てゐるやうな戀人の今は隠さうこもせぬ顔を悲しこ見てゐるのであつた。

後の事なごも誠心から薫は世話をした。宮中からもその他諸方からも懇ろな弔問のお使があつた。薫の出家の志はまた堅くなるのだけれど、母の事、この妹女王の事なご思へば、それも心に任せぬ。悲しみの中に十二月になる。

月影曇りない夜薫は老女から女王の病氣のこは匂宮のこ絶えがちな事にあつたこ聞いては今更よしない種子を蒔いた自分が疎まれる。う／＼眠つたこ思ふこざわめく人の聲や馬の足音に目が覺めた。まだ忌の中ではあるが忍びかねて雪に悩みながら匂宮が來たのであつた。女王はかうした深い宮の志にも、なほ逢はうこいふ心は起らない。薫にすゝめられてもその氣にはならぬ。宮との間には几帳の隔てがある。それでもかうして話をして見れば宮の方に心はひかれてゆく。

宮はかう遠く通ふ事の思ふにまかせぬによつて、京へ、ここかへ移らさうこ考へてゐる。その噂が中宮のお耳に入つたので、中宮も薫の悲歎を知るにも、宮が女王を思ふ心の並々でない事をお察しになつて、二條院へ女王を住ませるやうに許されたのであつた。かうした事を聞い

て薫は、自分こそ三條宮の造營を了へて故女王を迎へようと思つてゐたのだつたなき思ふにつ  
け、その人に別れた悲しみが新になつて、かうなるのであつたら、せめて妹女王と結婚してお  
くのであつたなき甲斐ない事も思はれて、この後までも残つたその人の世話をやく者は自分の  
外にはない事を痛切に感じるのであつた。

早 蕨

悲しみの中にも春は來た。女王は花鳥の色さへ音さへ同じ心に常に見聞きつゝ、はかない事  
をも言ひ交し慰め合つて來た姉の別れを父宮との別れにも増して佗しく、この末さうして過す  
べきわが身ぞこゝ、生き長らふべき心もしないのだが、つれなき命は思ふにまかせぬのをたこし  
へなく悲しき思ふ。阿闍梨から

新しい年が参りました。さうお過しですか。今は女王様のお身の上に幸あれとお祈は常に  
佛に捧けて居ります。これは寺の童の童の摘んだ初穂でございます。

君にきてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初わらびなり

歌は女王の御前におさし上げ下さい。

こんな手紙に添へて、蕨や土筆を籠に入れて送つて來た。老僧の誠意から出たこの歌に女王は  
匂宮からの手紙よりも感動さゝれて涙がこぼれた。

この春は誰れに見せん亡き人のかたみにつめる峯の早蕨  
こんな歌をよんで女房に書かせて返した。

この宮の女達は女王の悲歎に瘳せた面わの、かくて見れば姉女王に似通つてゐるのを哀れみ  
見では、薫の故人に對する戀に同情し、この女王を形見として見えないその人の薄倖を悲しむ  
のであつた。

薫は心の思ひを語るべき人もなきまゝに、宮中の内宴なきの濟んだ頃に匂宮を訪ねた。しめ  
やかな夕暮を端近く居て、例の梅が香をめで、居た時であつた。互に宇治の女王の話になつて  
は涙なしには居られない。夜になつて風烈しく吹いて燈火も消えた。あやなき闇にたぎ／＼し

い二人は語るに盡きない。

「いよくあの女王をここに迎へようと思ひます」句宮はいふ。薫も

「それは嬉しい事です。あの人を宇治へ一人おくのは私には何だか心苦しく思はれてゐました。でもあまり立入つてお世話も出来ないしなき思つてゐたのです」なきいうて別れた。女王の移轉についても薫は何か面倒をみるのであつた。

二月のはじめその日はきまつた。程近くなるまゝに花も色めきそめ、霞も峯に棚引くのを残惜しく人々は思ふ。やがて女王は喪服をぬいだ。薫から車や供人なきをよこして、自分は移轉の前日に来て、例の客亭の方にて何かの指圖をしてゐる。かうしてゐるにつけても彼の心には、この家で起つたいろくの事件が走馬燈の如く浮んで来る。簾ごしに女王にあうた。

「昔語なきは不吉だからよしませう」なきいうて「今度いらつしやる二條院の附近も、暫して私も移るつもりですから、何でも御用があつたら云つてよこして下さい。命の限りはお世話するつもりですから」

「私はここに離れるのがほんこにつらいのですに、近くなき仰るこ、また悲しさがこみ上げて何も申し上げる事も出来ません」なき答へる女王のいたはしさ、この人をよそに見てしまはねばならなくなつたわが拙い運命がほんこにはかなまれるのであつた。こもすれば落ちようこする涙をおし泳へて薫は立つて、ここに残る人達の爲めに近くのが所領の者に何かの事を命じるのであつた。

例の老女辨は勿論京への供に立つ事なき思ひもせず、老後を尼姿にやつして、薫にも逢ひたくないと思つてゐるが、それをむりに召して

「これからも時々こちらへ来ようこ私は思つてゐるのだから、お前が居てくれた方が結句嬉しい」なきいつて泣くのであつた。この人の尼姿を見るにつけ、わが戀人をかうした姿でもよいそしてたゞ心ここの結びだけで居てもらひたかつたなき薫は思ふ。日が暮れてから男は京へ歸つて行つた。

女達は皆明日の準備に縫ひ物や何か急がしくしてゐる。辨尼は女王の前へ出て



「人は皆明日を楽しんでゐます、私の袖がしほたれるのはさうしたものでせう」なご泣く。

「私は京に住みつく事も出来ないやうに思ふから、やがて歸つて来るだらうが、暫くでもあなたに別れるのが辛いよ。尼さんになつたつて遠慮なごせず、時々京の家へも來て下さいね」なご女王もこの尼を懐しがつて、この調度なごも大方尼の爲めに残しておくのであつた。久しく住み馴れたこの家を見捨て、京へは車に乗つた女王の心よ。道も遠く峻しい所を行くにつけても、曾てつれなしこのみ怨んでゐた男の通路の間違だつたのも道理、今こそ思ひ知られた。折しも七日月のさやかに照す影も、かうした遠道を馴れぬ女王にはた、苦しく眺められ

て、  
ながむれば山より出で、行く月も世に住みわびて山にこそ入れ

なご口誦む。京に着いた時は背も過ぎてゐた。宮は待つてゐた事にて、自ら車の傍によつて扶け下した。世人は世の常のゆらひと思つてゐたに、かうしたきらくい女王の待遇に目を驚かしたのである。

夕霧は六の君と匂宮との結婚を今月に行はうと思つてゐたのに、かくそれに先立つて宇治の女王を宮が迎へて、恰もあてつけるかのやうに睦しく暮してゐるのを恨しく思ふ。その人の裳着の式も今更延期するのも變なので、二十日過ぎに行うた。夕霧は宮の様子が頼しけないにつけ、豫てから薫をも聲に思ふ心もあつたので、いつそ彼を六の君の聲にしようかとも思はれて、人を介して薫にいはせたのだつたが、今日の前に無常を觀じた當座にて承引くけしきはなかつたが、夕霧も強ひてこもえいはなかつた。

櫻の花盛の頃、薫は遙かに二條院の花の梢を見て、宇治の家の事なご思はれて、匂宮と話をして慰まうと二條院へ來た。暫く話して、丁度宮が参内前らしかつたので女王の御殿の方へ行つて見た。宮は女王に参内の事をいひおきに來て、薫がこゝへ來てゐる事を知つて、

「なぜ中納言をあんな所におくの。あんなに親しかつた人ぢやないの。もつと近くへお通し、昔の話でもしてお慰みなさい」なごいつて、「でもあんな心許してはいけませんよ。下の心は油断は出来ない人だからね。こんな事をも宮はいふ。女王はさうしたら、か心迷ふので

あつた。

寄 生

こゝに藤壺女御を申すのは故左大臣の息女で、帝がまだ東宮を仰つた頃に入内したので、寵遇もすぐれてはゐるが、そのお腹には皇子はなくて、嬪宮が一人あつた。即ち女二の宮である。宮の十四の年に裳着の式を挙げやうと春から準備していらつしたがつたが、その夏に母女御が急に病んで亡くなつた。帝も惜しいと思召すにつけ女二の宮の上がいこしく、中陰が過ぎるこすぐ内裏へ迎へて亡き人の形見を鍾愛なさるのであつた。さてこの宮の將來をお考へになるこ、外戚には拂々しい人もないので不安である。早く相當の人に娶はせるに如くはないと思召すのであつた。そして掣の候補者としては薫中納言を措いてはない。是非御在位中にさう事を運ばうと思召した。

御壺の菊は今が盛りの色を見せて、折々すぎる時雨もまたなき趣を添へてゐる。暮れゆく空

を見出して帝は侍臣をして殿上から中納言を召さしめ給うた。薫はお召によつて来た。人に異なるその有様よ、「今日の時雨のおもしろさ、かうした日の徒然を消すにはこれこそ」なき仰つて碁盤を召して、

「軽々しくは渡せない、よい賭物があるが、何だらう。」こんな事を仰つて薫を相手として三番お打ちになつた一番だけ帝がお負け越しになつた。

「今日は賭物は渡すまい、まづこの花一枝を」こ仰るので、黙つてお庭に下りて面白く咲いた菊一枝を折り取つて、

世の常の垣ねに匂ふ花ならば心のまゝに折りて見ましを

こ奏せば、帝は

霜にあへず枯れにし園の菊なれき残りの色は褪せずもあるかな

なき仰る。かうして帝は時々お仄かしになるのだが、薫は例の心にはさして心にこめても考へてゐない。

夕霧はこの事を聞いて、六の君の掣がねはこの人と思つてゐたのに、帝がさう思召すのなら、さう失望を感じて、やはり今でも折々手紙だけは通はしてゐる匂宮を掣取らう、それにしても女の年がふけてしまつては困る、帝でさへかう急いで掣選みをなさるのだなと思つて、中宮に折々に催促して來るので、中宮は或日匂宮を召して、

「左大臣が年來思ひ立つてゐる事を、さう逃げまはつてばかりゐるのも、あまり情剛くはないでせうか。親王は後橋次第ですよ。唯人こそ妻を二人いふのはさうかとも思はれるが、現に左大臣のやうにそれがよく行つてゐる例もありますしね。殊に陛下の思召通りにあなたの將來がきまれば、さうした事は何でもない事ですものね」なご仰る。固より宮は六の君を厭つてゐるのではないが、あゝした家の掣なる事の窮屈さを思ふと心は進まないものであつた。さはいへ左大臣に悪く思はれるのも將來のために困ることも思ふ心から、この結婚の方へもだん／＼心は傾いてゆく。しかしその色めかしい心から例の按察大納言の紅梅の君をも懐かしいものと思つて、花紅葉につけて手紙は常に通はしてゐるのであつた。

年も返つての夏、女二の宮の喪期も過ぎたので、帝は薫からの結婚の申入を待つていらつしやるなき傳へる人もあつた。薫はかう帝の御心がはつきりして來たにつけても、戀しかつた宇治の宮の事が新に心に甦る。あれまでに契深かつた人、結婚の出来なかつたわが宿命が呪はれる。亡き戀人を佛に見せるこかいふ名香もがな／＼と思ひつゞけては、今度の結婚についても心すまない。それでもあまり知らず顔に過ぎるのもさうか、折々手紙なきだけは通はしてゐた。

六條院ではいよく八月に匂宮を掣さることに決つた。二條の女王はきくにつけ、いよく豫て期してゐた日が近いたのだと思ふ。さてさうなつたらごんなに人笑へな身になるだらう、父宮の遺言にそむいてあの水莊を出て來た事が今更に悔いられる。亡き姉女王を思ふ薫の愁嘆を見聞くにも、もし姉があの人妻になつて生きてゐたらさうだらう、やはり今の自分のやうな物思ふ身になつてゐるのであらう、それにしてもさる方に思ひを斷つてゐた姉の心こそ、今思へば有難い心であつた。亡き人の靈も草葉の陰で今の自分をさう思つてゐられるだらうなき

恥しく悲しく思ひつゞけられるのだが、思うても甲斐ないこと、六の君の事は聞かぬ風して過すのであつた。五月頃から女王はみもちになつてゐて、悪咀に惱む頃であつた。宮はさうした事ではないかと思へど、女王も女達もそれ知らせないので、たゞ夏やせだらうと思つて過ぎる。

八月になつた。宮は隠さうとするのではないけれども、云ひ出すのも何だか具合が悪くて黙つてゐたのだが、結婚の日なごも女王は外から聞き知つて、云はずにゐる宮の心を辛いと思ふ。宮はその頃から女王に獨寝のくせをつけようとして、時々宿直云つて宮中に泊る事があつた。こんな事も女王は悲しと思ふ。

薫もこの事を聞いて女王の身をいさしく思ふ。これからもそんなに淋しい夜が女王につゞくだらうと思ふに、同情は限りなく深くなる。ミ、故女王の最期の言葉が頭に浮ぶ、自分がその人ご結婚しなかつた事が今日の淋しさを味はせたのだと思ふ。そしてそれが重い罪のやうに考へられる。ミ、心の底から何ともいへない愛戀の感じが湧いて来る。怪しからぬ事と思ひ沈め

ても、抑へる事は出来ない。こんな悶を抱きつゞ彼は一日一日を明し暮してゐた。

ある朝霧り渡る籬のひまに秋草の花のいろ／＼が咲き亂れてゐる中に朝顔の交つてゐるのが目に止つた。侍臣を呼んで、

「匂宮様をお訪ねしたいから車の用意をしてくれ」ミいひつけるに、宮は昨夜から参内して留守だといふ。でも女王のお見舞に行くのだからなごいつて、出かけに朝顔の花を折り取る。はら／＼ほれる露もあはれである。

二條で薫は女王に逢うた。その話し聲なごが近頃ではすつかり姉女王に似てゐるのも哀を誘ふ。薫は持つて来た朝顔を扇においてそつ、籬の中へ入れて、

よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔のつゆ  
花には露がまだこほれずに面白くおいてゐた。

消えぬまにかれぬ花のはかなさにおくる、露はなほぞまされる

女王はこんな歌をよんだ。薫は数日前に宇治へ行つた時の庭も籬も荒れはてゝゐた淋しさを語

つて、亡き人を思慕する心をのべるのであつた。故宮の忌日も近づくので、その法會を營みに宇治へ行きたいなき女王はいふ。それは此頃の宮のそぶりを憂しと思つてかしこに籠り果てようこの托言だ。薰は察して法會の事は阿闍梨に頼んであるし、殊に男でも行き煩ふ道の程だから思ひ止つた方がよい、なほ氣を大きく持つていろいろ物思ひなきしないがよいなき云ひ慰めてゐる中に日もたけた。歸るここの家司に

「昨夜お歸院かへりに聞いて來たのに、御不在で残り多いが、これから御所へ行つてお逢ひ出來ようか」なきいへば、宮は今日は歸るこいふので、夕刻を期して薰は歸つた。

薰はさうしても亡くなつた女王を忘れる事が出來ず、今でも讀經三昧に日を送つてゐるのを母尼宮も見かねて

「私もあこ幾年も生きられないでせうが、せめて命の中だけでも、世の常の人のやうな生活をしてゐて下さい。」こかき口説くので薰も母宮の前なきは物思ひもないやうに繕うてゐる。

六條院の聲取りの當日になつた。夕霧はすべてをきら／＼しく設備しつぷうて宮の來るのを待つ。

十六夜の月は上つてもその人は來ない。宮中へ使をやれば二條院にこいふ。このまゝ、今宵を過してはこの上ない物笑へこ思へば心も心ならず、子息頭中將を使こして歌をおくる。

大空の月だにやさるわが宿に待宵すぎて見えぬ君かな

匂宮は宮中からすぐにこ思つたが、この女王の心を思へば氣の毒になつて、さし入る月影を賞してゐた所であつた。使をうけて宮は女王に

「すぐ歸つて來ませう。一人で月を見てゐてはいけませんよ」なきいひおいて出て行つた。あまに女王は氣ぬけのした人のやうに内にも入らず、月の面に見入つてゐる。松風の吹き來る音も宇治山の椎の葉音よりなほすさまじく聞かれる。

山里の松の風にもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

女達は薰の親切だつた事なき思ひ出しては

「ほんまに人の運こいふものはをかしなものね」なきいひ合つてゐる。

宮は女王を氣の毒には思ふが、六の君のあえかな様にも怪しく心ひかれた。秋の長夜も更け

てから来たので明けたのも早かつた。二條へ歸つて來ても女王の所へも行かず、暫く寢て、起きて六條院へ手紙を書く。女王がさうしてゐるだらうと思つてその方へ行つて見た。涙にぬれたその顔をわが袖で手づから拭うてやつたりして宮は女王を慰めてゐるに、六條へ行つた文使の男が歸つて來た。開いて見るに繼母なる落葉宮の代筆であつた。

「ちつとも物を上がらんさうですね、困つた事だ」なきいつて菓子を取りよせたり、その道の人を召してわざ／＼料理させたりして勤めるけれも、女王は少しも食慾が出ない。宮は夕方に居間の方へ歸つた。風涼しくいゝ時候だが、物思ふ人には忍び難いものがある。鯛の鳴くにも宇治の山蔭がそゞろに懐かしまれる。更けぬ中に六條へ行く宮の前驅の音も遠くなつてゆくに妬ましが湧く。わが一族は慨して短命だと思ふに、自分も子供を生んで死ぬのではなからうか、命は惜くはないが、それでは餘りに罪深い事だなき眠れぬまゝに夜一夜を思ひ明すのであつた。

六條院で三日の夜の祝をする日である。中宮の御氣色が勝れないこの事で人々は奉伺の爲に

参内した。夕霧も参内したが、御病氣は一寸した御風氣に過ぎなかつたので日の中に退出するに、薫をわが車に同乗させて來た。三日の夜の披露の宴は盛大を極めた。薫は六の君が匂宮の夫人になつた事には無關心なやうな風で何かを斡旋してゐるのを夕霧は憎らしいやうな心で見つてゐた。中門の外に薫の歸りを待つ供人達はわが主人がこゝの聲にならず、今に獨身であるのをつまらながつてゐた。

薫は三條へ歸つてもいろ／＼な事が頭に浮んで來て眠られない。今夜の匂宮が目の前に見えるやうだ。女二の宮の事も思ふ。もしその宮が宇治の故女王に似てゐたら嬉しからうなきも思ふ。さうしても眠れないので、按察の君といふ、外の女よりは目をかけてゐる女房の所へ行つて夜を明した。まだ暗い中に薫は起きてわが方へ歸つて行つた。

六の君は今年二十一になる。その上品な美しさ。匂宮は明い光の下でわが妻になつたこの人を見て思ふ心は深くなつた。この人を夕霧は東宮に奉つた長女にもまして愛してゐるのであつた。匂宮はその後六條院に居る事が多く、二條院へ來る事も自然稀になつてゆく。

二條院の女王はかう宮を待ち侘びる夜が重なるにつれ、豫期した事だといふもの、その事に面接しては悲しさに堪へない。ほんごに自分があの水莊をすて、かうした人交りをしたのは心得違だつたと思ふに、やはりさうかして宇治へ行きたい、むけに宮を捨てるのではない、心を休める暫の間をなき、心一つに定めかねて恥しかつたが薫に手紙を書いた。

先日の法會の事は阿闍梨からの消息に詳しく承知いたしました。昔を思つて下さるあなたがいらつしやらなければ亡き靈の爲にもいさほしい事でした。ほんごに有りがたい事でございます。なほお目にかゝつた折にお禮は申し上げたうござります。かしこ。

薫はこの手紙を得て珍しく思ふ。常は返事さへ扱々しくは書かない女王が自ら手紙を書いた上に「お目にかゝつて」なきいうて來た事を嬉しく感じたので返事をすぐ書いて、その翌日の夕方二條院へ行つた。

薫はひそかに女王を戀ひる心から、殊に用意して着物なきは特に選み、薫物もこちん／＼しいまで炷きしめ、持ち馴した了子染の扇の移り香までもたきへん方なくめでたい。女王もあの宇

治の或夜の事が折々は思ひ起されて懐しからぬでもない、それにその人ごなりの誠實さのわが夫なる宮ごは異なるを見るにつけても、中納言の妻に、もし、なつてゐたら、かうした心勞もせずすんだかもしれないなき思つた事もあつたらう。ごに角はいつも違つて今日は籬の中へ請じて、母屋の籬に几帳を立てそへ、自分は少し奥へひつこんで逢うた。そして言葉少なに宇治へ一時行つてゐたいがさうぞその様に取り計らうてくれなきいふ。

「その事は私だけの計らひでは出來ない事です。宮様にさう願ひなすつて、快よくお許しが出さへしますれば、お送迎は私がいたしますに何の憚りもないわけです。私の事は宮様だつてよく御存じですから」なきいひながら、この女王に對する愛着がますます強くなるのを感じる。だん／＼暗くなるが薫は歸る氣色もないのが煩しく、女王は氣分の悪いのを托言に奥へ入らうとするのが口惜しく、

「宇治へはいつ頃のおつもりですか」問へば、

「もう今月は餘日ありませんから、來月の初旬に。でも宮の許なき無くてもいゝと思ひます

わ」なご入りかけていふのを、何だか昔の人の聲を現に聞くやうに思はれて、例の自制心もなくなつて、つゞき簾の下から袖を捉へた。あなやこいごゞ引き入るのを、それについて薫も半身は簾の中へ入つてしまつた。

まだ宵ご思つてゐるが、夜はもう曉方近かつた。薫は女王の妊娠してゐるのを知つた。それにしても弱いわが心は常に女を得る機会を失はせる。しかしさうした事の後の心の苦しみを思ふご諦めもつく、さう思ひ返した後から又戀しさは強く薫の心を捉へる。

いたづらにわけつる道の露しけみ昔おほゆる秋の空かな

歸つてから、手紙のはしにこんな歌を贈つたが、返事は

お手紙は拜見いたしました。気分が勝れませんので、失禮ですが御返事はよう申し上げません。かしこ。

ごだけあつた。これを見るにつけ薫の戀心はますます深くなるのであつた。今日は宮が二條へ来るなご聞くにも、いつもの嬉しさにひきかへて嫉しいやうな感じがする。

宮はあまり長く來なかつたので、急に思ひ立つて來たのであつた。女王は昨夜の薫の行動に今は宇治へ歸らうご思ふ心も消え失せて、かくてある中は何事もおし憶えてゐようご諦めて、宮にも嫉妬がましい氣色も見せないのを、宮は哀れに嬉しく、漸う目立つて來た妊婦の様を珍しく見てゐる。六條院の窮屈さに、今更ながらこの安易が思はれる。ふご宮は女王の衣の普通の薫物ごもない物の香を、かの人の移香ごご心付いては、わがなき間にかうした事の行はれたのを少からず不快なので、いろく責めて、

「私があなたをそんなに愛してゐるか。それなのに私が今左大臣の掣になつたからごいつて、かう私に背いてしまふなんてあらう事だらうか。それほごあなたを私が捨て、おいたでせうか。あなたはそんな人でないご思つてゐる」なごいふけれご女王は一言も返さないで、宮は憎く思ふのであつた。やうく

「思ひ合つた二人の間ごばかり思つてゐましたのに、かうしてお別れにしてしまはなければならぬのでせうか」ご泣きくづれた様子の限なく美しさに、この人がごんな罪を犯した人にも



せよ、捨て去るに忍びず、責める一方にはまた慰めの言葉をかけてゐた。

薫は二條院の女達の衣裳のみすほらしけだつたのを思つて、母宮に云つて、多くの女達の着物を調べて二條院の大輔といふ女房に宛て、やつた。女王の着料は特に目立たぬ様ながら箱に入れてあつた。上勤めの女房から下女しもだんなまで新しい着物になつた。宮は小さい時から人にかしづかれて大きくなつたので、こんな事には氣がつかないのであつた。

薫は女王の戀しさを思ひ鎮めやうとすれど抑へかねて、折々の見舞の手紙のはしにもこそすれば忍び餘れる片端を洩す事なごもあつたのを、女王は困つた事と思ふ。知らない人なら突きはなつて恥しめる事も出来るが、昔から一方ならず頼もしく思つてゐた人に、今更さうした事も出来ず、殊に薫の心も幾分酌み知られぬでもない、云つてその戀を容け入れるわけにも行かず、さうこの人を取扱うたらよいのか、心は千々に亂れるのであつた。

或る夕方薫は泳えきれず、また二條院へ来た。女王は病氣をいひ立にして縁に茵を出させたが、女王の取り做して祈禱僧の詰める部屋へ通して心は進まないのだが、そこで逢つた。薫が

馴れ／＼しけに近つて来るのも苦しく少將といふ女房を呼んで胃を抑へさせたりしてゐた。薫は心の中をそれになしに掻き口説くのであつた。あたりは次第に暗くなつて、叢の蟲の音ばかり高く聞えて来る。闇に包まれた築山のあたりを、づつと見つめて坐つてゐる男を内では煩はしく思ふ。

「ほんごに昔の戀しさに堪へられません。近頃私はあの宇治の水莊を殊に寺なごにせずとも昔の人の佛を偲ぶ彫像や繪像を作つて、そこに勤行したい氣が起つて参りました。」

「彫像がよろしうござりますわね。謝禮次第で醜く描くやうな繪師の話なきけば心もごなく感じられますわ。」

「さあ、工匠でも繪師でも、さうして私の欲するものを得させてくれませう。でも近い昔に花を降らせたといふ工匠もあつたといひますが、さうした神のやうな人を求めて作らせませう」なご歎く薫の心深さに、女王も哀れを催して、少し座を進めて

「彫像を仰つたので思ひ出した事がありますわ」懐しけにいふのも嬉しく

「それは何ですか」こいひつゝ、几帳の下から女の手を握つた。女は女房の手前何氣ない風を装うて語り出した事によるこ、今まで居ることも知らずに過ぎた異腹の妹が、此頃田舎から上洛して来て、先頃二條院へも来たが、不思議なまでに故女王の佛に似てゐたこいふのである。そして

「姉の形見を思ふまで仰つて下さる私は淺ましいまで故人に似てゐないこ皆も申しますのにそんな縁も深くない人があれほご似てゐるのが不思議ですわね」なごいふのを夢物語のやうに薫は聞くのであつた。それは故宮が夫人の歿後に人知れず契つた女房に出来た子だこ薫には想像された。

「こゝにその人は居るのですか」

「尋ねようと思すなら申しませうが、でもお知りになつたら却て厭氣がおさしになりますまいか。それに私もあまり詳しい事も知らないのです」

「かうしてつまらなく世を送るより、その方がみんなにか生き甲斐があります。宇治の本尊

にもしようぢやありませんか」なご云つた。薫はかうして自分の戀を避ける女王の心だらうこ思へば恨めしくはあつたが、その話は強く彼の心をひきつけた。夜も更けてゆく。女王は男の油断を見すまして取られた手をふりきつて奥へ入つた。無理からぬ事と思へぎ、薫には女王の仕打が情なくて涙を抑へて歸つた。

暫く宇治へ行かなかつたこ思つて九月の末に薫はそこへ行つた。すさまじく吹き拂ふ風も、荒々しく打ちよする川浪の音もを外にしては、水莊を守る人影もない。辨尼を召して昔語なごをし、さて阿闍梨を召し寄せて

「こゝへ来る度に昔思はれて悲しくてしかたがないから、いつそこゝの表御殿だけ壊して、あなたのお寺の傍にお堂を建てたらこ思ふのですがさうでせう。同じ事なら早く取掛つたらこ思ひます」なごいふ。阿闍梨も尊い事こ同意したので、近くの領地を預つてゐる者なき呼んで、阿闍梨の命のまゝに御堂造營の事に従ふべき由をいひつけて、その夜はこゝに泊つて、辨尼こ今昔の物語をした序に京の女王にきいた話をしてみた。果して想像の通り八宮の御落胤であつ

た。生母は中將さいつた女房であつたが、宮がその後一向に聖者めいた生活に入つた事が情ながつて御暇を請うて陸奥の國司の妻になつて下り、後その夫が常陸へ赴任したのに添うて下つてゐたが、それから消息も絶えてゐたがこの春歸洛したのであつた。宮の遣れ形見の姫君は今年はもう二十歳ぐらゐになつてゐる。この姫君は即ち浮舟の君である。

薫は翌朝歸京するまで美しく残つてゐた薦紅葉を引き取つて二條院へのお土産に持つて行つた。丁度匂宮が來てゐる時に使がこれを持つて來た。手紙には宇治へ行つて來た事、彼處の表御殿を寺にしようゝ阿闍梨も談合して來た事なきが書いてあつた。宮は自分が居るゝ聞いてわざゝ何氣なく書いた手紙だらうゝ邪推して不安に思ふ。その夜は宮はこゝに居て、女王の琴に琵琶を合せたりして遊んだ。三四日六條院へ行かずに居るゝ、夕霧は怨めしく内裏からの歸途を二條に寄つて、連れ立つて行くのであつた。

その年も暮れて、正月の末頃から二條の女王は惱む事が多い。宮は方々の寺々で安産の祈禱なきをさせる、薫も内々で加持を寺々に頼んでゐた。近い中に女二のの裳着の式を擧げられ

る事に決つて、その頃に結婚式もこの御内意が薫に下つたので、その用意をしてゐるのだが、薫の心は結婚よりも二條の女王のお産の心配で一ぱいになつてゐる。二月初旬の更迭期に薫は權大納言兼右大將に昇任した。その祝宴が六條院で開かれて匂宮も請待されてゐたが、女王のお産の事が氣になつて宴會を中座して歸つたが、翌曉女王は無事に男の子を産んだ。薫は昨夜の禮を兼ねて祝着を云ふ爲に二條院へ行つた。

その二十日過ぎて女二の宮の裳着式があり、翌晚薫の結婚が行はれた。夕霧もこれを家門の光榮としてゐた。薫は夜毎に通ふのが馴れない身には苦しく、早くわが方に宮を迎へ取らうと思ふのであつた。母宮も喜んで、自分が今住んでゐる表御殿をそのまゝ譲らうゝ仰るのだけれぎも薫は別に女二の宮の爲めに新しい御殿を造營する。そこが竣成して宮が移つて來たのは四月の初旬の事であつた。その前日留別の意で帝は宮の居られる藤壺で藤花の宴をお催しになつた。

女二の宮を三條の邸に迎へた薫はその新妻に對して新しい愛を感じ、わが宿命の恵み多きを

思ふ傍、かの宇治の女王に對するはなかなかし昔の戀がさうしても忘られないので、加茂祭なごも過ぎて身體が少し閑になつた四月二十幾日に宇治へ行つて見た。例の御堂を見て何かの指圖をして、さて辨尼を訪ねやうと思つて、その方へ行きかゝるご、さして高貴の人のだごも見えぬ女車一つに、荒い東國の男たちが多く附添うて、今しも橋を渡つて來る。薰は水柱へ來て、供人なごはまだ落ち付かない中に、かの車もこゝをさして來る。誰だらうご問はせるご、「常陸の前司様の姫君が初瀬御參籠のお歸りがけです。往きにもこゝにお宿を願ひました」なごいふ。例の人だご思ふご嬉しい。やがて車を門内に入れて車の主は下りた。物の隙から薰はその方を覗けば女をあら向きに、此方へ背をむけてゐた。この人が薰には大そう戀しく思はれた。美しい女は随分見た自分がさして美人ではないこの女に心ひかれるのもわれながら怪しい限りである。その紛るべくもない薰物の香は内なる女達にも感じられたが、その人達はこの人ご知るべくもなく、辨尼のたしなみごゆかしがつてゐる。やがて辨尼が出て來て、

「昨日いらつしやるごご、ごんなにお待ちしてゐたでせう」なごいへば、年老いた人が

「この方が大へんお苦しがりになるので、昨夜は泉川で泊つて、今朝もそれで出發がひきく僕れましたのでこんなに遅くなつて御厄介に上りました」なご云つて、寄り臥してゐた若い女を起す。辨に恥ぢてか横をむいたその横顔が薰の居る所からはよく見えた。すぐれた目もご、髪の毛の生え際、昔の人をもよくは見なかつたが、この人を見るごすぐかの人の佛が浮んで、まづ涙が出る。辨尼に時々いらへる聲のかすかではあるが二條の女王によく似てゐる。かうした人の居たのを何しに今までよそに過ぎた事だらうご思ふ。やうく日暮れてゆく紛れに薰はそこを去つて、いつもの部屋で辨尼を召し出て、かの人の事なごあれこれご問ふのであつた。

「折よくも來合つたものよ。あの前に頼んでおいた事はなごいふ。

「この二月の初瀬詣の折にあの方の母様に申しましたら勿體ない仰せだご恐縮してゐました。丁度お忙しい時でしたのでお耳にも入れずゐたのでした。」

「忍び姿を恥ぢて皆に口固めはしたけれご、あの方が一人で來たのが却てよい折だから、私が來てゐる事をあの人にもいふて今晚來合はせたのも深い因縁があつての事ご思つてゐるごかう

傳へてくれ」なご熱心にいふのであつた。

東 屋

薫は浮舟を思ふ心は切であつたが常陸前司の掣なるのがあまりにはしたなく聞えるのを憚つて、手紙もえ書かずゐた。辨尼からその母に對して薫の思ひの程を折々云ひ送るのだけだし、眞面目な戀を薫がしてゐるのだしは母の方では思はず、唯故宮の由縁を尋ねる事ばかり嬉しく思つてゐた。それにしても薫の噂なご耳にいつけては自分の身分の無下に低くてその人を掣する事の出来ないのを口惜しく思ふ。前司は先妻にも今の妻にも子供は多かつたがこもすれば妻の連子である浮舟に分け隔てをするやうな彼の心が見えるのを妻は憂き事に思つて、さうかして立派な身にしてこの人を見たいなご考へてゐる。こゝに多くの娘達のある事を知つて懸想の男達も多かつた。先妻腹の三人にはそれ／＼掣がきまつた。今度こそわが浮舟をこ母は人並ならず美しく生ひ立つた娘を見ては掣がねを求めてゐる。前司も相當に高い家と生

れ、財産もあるが、長い間の田舎住ひに趣味なごも著しく都雅を缺いてゐた。

こゝに浮舟に思ひを寄せてゐる人達の中に左近少將がゐた。年の頃二十三、性質も靜かで學才なごもある人で、今まで通つてゐた妻も離れてひさすちにこの人を得よう云ひ寄つてゐた。母は少將の人となりを知つては、この人を措いてはまたこれほごの掣がねはあるまいと思へば、それ一人ぎめに決めて、少將の手紙が來れば、浮舟にすゝめて返事をさせたりしてゐた。そして八月頃に結婚まで話を進めて支度を調へてゐた。

こゝに前司に限らず愛してゐる娘がゐる。そのためにきらくしい調度なごを集めて列べ立て、琴、琵琶の師匠なごも勝れた人を迎へて教へてゐた。さうした事にも夫の趣味の低さなごが見えるのを妻はいやな氣持になる。殊にその娘の事にはかりかゝつてゐて、夫が浮舟の事を願みてくれないのが怨めしいのである。その中に少將の約束の結婚の日が迫るにつれ、わが心一つにきめた今度の話が危ぶまれたので、媒介の人をよんで、浮舟の父なき子である事、ついでには父の實子でないが爲めに悲しい破綻を見る事のないやうに願ふ事なごをいふたので、そ

の男は少將の所へ行つてその由を語つた。元來少將は浮舟が常陸前司の娘なるが故にその掣にならうとしたので、その動機は功利的の立場にあつたのだから、今この男の話を聞いてその意外に驚き、媒介の男の勸めるまゝに前司の實子である例の娘を妾にしようと思ふのであつた。

媒介の男は前司の所へ來て少將の事を賞めて結婚を申し入れた。前司もその話を信じて大いに喜んで

「今官位が低いのは論外です。さういふ方なら私の存命中は大切に御傳きいたします。私の財産などは皆その娘に譲るつもりですから私の歿後だつて決して御不自由はおさせ申しませんよ。もし眞心から娘を愛してさへ下さるなら、大臣の位を得るに何か御必要があれば、それも御用立いたしませう。何にせよお互に結構な御縁談です」なさいつて快諾した。かうした事は知らず前司夫人は浮舟の爲に準備に忙殺されてゐた。もう結婚が明日明後日に迫つた頃に、前司は妻に少將をその娘の掣にする事を告げるので、彼女は涙も出るほご悲しかつた。公然故八宮の姫君を名乗られる浮舟だつたらさんにか嬉しい事だらうと思ふ。黨の懸想も有難

かつたけれど、左大臣家の姫君をも大納言の娘をも心に入れずに今上の女二の宮を得たその人がさうして草深い田舎で育つたわが娘をよく見てくれようとも思はれない、母なる尼宮の侍女として、時々的情をかけようといふのだらう、それも結構な事だけれど、餘りに心もこまない、さうした身の上は自分でも覺えがある、何にせよわが不覺からかうした悲しいめも見るのだと思ふ。前司は掣取の事で一生懸命になつてゐるが彼女はそれを知らず顔に過してゐる。少將はかくてこの掣になつた。

前司の妻は淺ましく、思ひ餘つて二條院へ手紙を書いて、暫く浮舟を預つてもらふ事を頼んだ。女王も氣の毒に思つて、大輔といふ女房と相談して、餘り氣は進まなかつたのだが、當分の世話をする事にした。浮舟は乳母や若い女など二三人で移つて來た。母も附き添うて二三日は泊つてゐた。匂宮が來たのを母は物の隙から見れば、その氣高き美しさ。わが繼子なる式部丞が帝の御使として來たが、宮の近くへもえ寄らぬみじめさ。つくづくこの女王の幸運が思はれる。宮が參内した後を女王と話して、わが不運もわが娘の薄命を歎くのであつた。女

王は浮舟が容貌も心もすぐれてゐて、その物云ふ聲の死んだ姉にそのまゝなのを思つて、この人をこそ薫にすゝめやうと思ふ。

薫が来た。宮中からの歸途である。例の物語になつて、たゞ昔の忘れ難い事をいうては、それになしに女王に對する切々の情をほめかすのを、岩木でもなければ女王も哀れと思ふ。さうした男の心をかへようとして、浮舟の事を云ひ出したが、男はそれも心惹かれぬでもないが、ふみ心移る心もしない。なほ何か物語の果に

「では、その人にあなたからよく仰つておいて下さい。私の戀は浅くはないのだと、よしなお傳へ下さい」なきいひ置いて薫は歸つた。女王はあそこで薫の事を母なる人にいうて浮舟の縁を纏めようとする。母は萬事を女王に任せて、その翌日夫から車をもつて迎に來たので歸つた。

それに入違つて宮は宮中から下つて來た。夕方女王の方へ來るに、丁度女は髪を梳つてゐる時であつた。彼方此方歩く中、ふみ西の方に見知らぬ見なれぬ女童が居た。覗くに誰か居る様

子である。細目に開いてゐた襖をそつと開けて入つて見るに、遣り水おもしろい庭の面を見出してゐる女が居た。例の心からつゞ寄つて衣の裾をさらへて名のれこいふ。女は扇さしかくしつゝ如何にせんと思ふ。人々も持て煩うてゐる所へ宮中から中宮が御病氣だぞ知せて來たので宮は仕方なさに女を放して立つた。女は悪夢から醒めたやうに汗に浸つてゐた。乳母等も心苦しと思ふ。その夜女王は浮舟をよんでしめやかに語り明して曉方床に入つた。

翌日乳母は前司の家へ行つて、前夜の出來事を母に語つたので、驚いてもし間違ひでも出來た時、人は何こいふたらう、女王はさう思ふだらう、嫉妬の情は誰でもあるものだと思へば捨て、もおかれず、夕方二條院へ來た。いろ／＼いつて女王のこめるのを、物忌こいひこしらへて強ひて連れ出て三條邊にあつた前司の控家に住ませた。泣きくづれてゐる浮舟を哀れ見つゝ、此處の隠れ家を人にも知られず忍びて居よなき云ひ置いて母は歸つた。

前司は新に掣取つた少將を又なき者に思つて、妻が少しも世話しないのを怨じてゐる。この男のために今の心配はしてゐるのだと思ふに彼女は親身になつて新夫婦の面倒を見る氣にはな

れない。先日二條院で見た少將の見窄しなき思ひ合すも、今までその人に對して持つてゐた考なきも變つて來る。こゝではみんな風だらうも、ふも見たくなつて、新夫婦の住ひの方へ行つて物の隙から覗いて見た。二條院で匂宮夫婦の様を見た目では無下に見劣りがする。歌なき詠みかけて見た。それにしても薫大將がゆかしい。宮のやうにおし立ちてなきもせぬ薫の重々しさよ。彼女は今少將を見るにつけこんな事を思ふ。

三條ではまだ造營の出來上つてゐない上に、人も常に住まぬ所にて庭なきも手入れが届かず出入する者は東國の田舎者ばかりなので、住む人の心も自ら陰鬱になるかうした所に居るも、二條院が戀しい。あの夕に入り來し人さへ、さすがに思ひ出でられて、あの時のさゞめ言、さては名残ゆかしい移香までも猶残つてゐる心地もせられるのである。母から手紙が來て、暫く忍んで居よこいうて來た。

ひたぶるに嬉しからまし世の中にあらぬ所も思はましかば  
なきいつて來た返事を母は涙を以て見た。

うき世にはあらぬ所をもこめても君がさかりを見るよしもがな

こんな歌を母は返すのであつた。

秋深くなる頃、薫は宇治の空なつかしく、かねて營んでゐた御堂も竣成したと聞いて車を急がせた。水莊では毀した表御殿も立派に改築が出來てゐた。故八宮の事を思ふも、さかしら立つて改築した事が悔まれもするのであつた。例の尼もしみく昔を語つた序に浮舟の事を云ひ出したので、辨はその人が今三條の控家にゐる事を告げたので、薫はそこへ自分を導くやう尼を強ひるのであつた。

「明後日頃車をよこすから、その隠家へ行つてゐて下さい。」なき尼も約束して夕になれば歸つた。草花や紅葉の枝を折つて京なる妻の宮への家苞にするのである。

約束の日になつて氣心のわかつてゐる召使一人に誰にも顔の知られてゐない牛飼を添へてやつた。尼はかうした事を出で立つのは心苦しかつたのだが仕方なしに車に乗つた。三條の隠家へ來て案内させるも、初瀬詣の折に見知り越しの女が出て奥へ通した。



「先達お目にかゝりましてから、お懐しく思ひながら、かうした世を捨てました身にて、さちら様へも御無沙汰ばかり致して居ります。此程右大將様がお見えになつて、姫様こそ非結婚したいご熱心に仰るものですから、つひ動かされまして今日参つたのでござります」なきいふ。浮舟も乳母もめでたし見おいた薫が、かくまで思ひ入つてくれるのを辱いと思ふ。

「その夜、宵も過ぎて宇治からこいつて門を叩く者がある。尼はそれを知つて門を開けさせた。雨を吹く風にいひ知れぬ薫の吹き送られるので、人々はその人を知つた。

さしこむる蓑やしけき東屋のあまりほごふる雨そゞぎかな

なき口誦んで縁に立つてゐた。やがて南面の部屋に通した。うち解けて對面もしてくれないのを怨めしく、さうした隙からか、つゝ薫は内へ入つた。よそながら見しよりは美しき女の姿をいゝ嬉しく思ふ。

程なく夜も明けよう、女達は各々の局に入つた。夜番の男共も門を開けて歸つたらしい。薫は車を戸口の所へ寄せさせて女を扶けて車に乗せて、辨尼は

「私はこの序に二條の女王様にお目にかゝつて参りませう」なきいふのを、

「その申譯けは後でもいゝでせう。あなたが居てくれなければ何かに不都合だ」なきいふて乗せ、なほ侍従こいふ女房をも乗せて車はきしり出た。近い所へでもこ思つてゐるこ、宇治へ志すのであつた。河原を過ぎて法性寺邊へ来て夜は明けはなれた。

朝の光がさして、間に羅を垂れてはあれき、薫達の方こ、辨尼達の方こ互に見こほされる。尼は昔覚えてそゞろ涙のおちるのを、侍従はめでたい結婚の日に忌々しい泣顔よこ見る。浮舟は恥しさに俯伏してゐる。袖こ袖こ重り合つて簾の外へ出てゐるのに露がこほれて、男の直衣の縹の色が女の衣の紅にうつるのを薫は見つけて簾の中へ引き入れた。

かたみぞこ見るにつけても朝露の所せきまで濡るゝ袖かな

こ心にもあらず口誦まれるのを尼は悲しく聞く。薫も尼の泣くに賞ひ泣きもされるが、女がここの涙をさう見るだらうこ思へばいこほしく、少し起きて四方の景色も見よなきすゝめる。かうしてこの人こ同車してゐながらも故女王の忘れがたいのが薫には悲しかつた。

宇治へ着いた。女は山や河の景色を見ては、あの狭苦しかつた三條の家比べて心は晴れるのだつたけれど、さて行末男が自分をさうしようとするのだらうと思へば氣にかゝらないでもなかつた。薫は京なる母宮や妻の宮の所へ

まだ佛前の莊嚴の調はぬ事を思つて、急にこゝへ参りましたが、氣分が少し勝れませぬ。

思へば今日明日は慎まねばならぬ日でした。一兩日して歸京します。

手紙を書いてやつた。

今日はこゝに居て故宮の事なご話して、時々冗談なごもいふけれど、女はたゞ恥しげにのみしてゐるのを物足りなく思ふ。琴なご出して獨りかき鳴らして見た。月がさし出た。かうした月に故宮は琴を遊ばれたのだなご思ふ。昔が戀しい。この人も宮の存生中はこゝに人になつたのであつたらなご思ふ。白い扇を弄びつゝ物により添うてゐる横顔の白さ、艶かしい髪の下り端、昔の人そのまゝだなご思ふ。辨の尼から箱の蓋に紅葉薦なごを敷いて菓子を持たせて來た。

やどり木は色かはりぬる秋なれご昔おほえてすめる月かな

それに添へた尼の歌である。

### 浮舟

句宮はあの夕方の事が忘れられない。さして身分ある女は思はれなかつたが、美しい女であつたご思ふにつけ、あのまゝ別れてしまつた事が口惜しく、女王をも責め問へご、薫があればまでに戀ひて隠してゐるあの人だご思へば打明けるわけにもゆかず、殊に思ひ立つたごなればごごまでも追求せずにはおかぬ宮の性格に想ひ到るご、さうしてもそれは出来ないご思ふ。

薫は浮舟を宇治に住ませて、女が待遠に思ふだらうご思ふご心苦しけれご、今は官位も進んでは中々に窮屈で、さう宇治を訪ねる隙もないのだが、その中にはゆつくり行つて見たいなご思ひつゝ、日を送つてゐる。で、女を京に還らさうご忍んで女の爲めに家を造營してゐる。しかしこの人を得たからごいつて女王に對する戀は捨てられない。世の常の後見ごは違つた氣色も折々見えるのを、女王も漸々世の中を見聞くにつれて、薫の深い情をしみじみ感じないでは

ないけれども、宮が此頃は若君の愛にひかされて前よりは落着いて來たらしいのを嬉しく思うてゐる。

正月になつた。元日を過して宮は二條院に來て、若君をあやして遊んでゐた。するに晝頃小さい童が手紙を持つて來た。宮はここから來たのかと問へば女童は宇治から女王様へといふ。女王はさうしていゝか困つて、

「その手紙は大輔さんにお上げなさい」といつた顔の赤むのを宮は見てもつて、薫からの手紙をわざと宇治からなさいふのではあるまいかと思はれて、その手紙を取つて開かうとした。

「女同志の私信ですわ、御覽になつてはいけませんよ」

「ぢや開けて見ますよ。女の手紙つてみんなものだらう」なご云つて開封するに、若い人の手でお目にかゝりたくて、それも叶はぬ中に年も暮れてしまひました。春こいへば霞も絶えまもなく都の方を見やられぬのが恨めしうござります。つまらんものですが若様のお手遊におさし上げ下さい。

なご書いて、金色の籠を松の作枝につけ添へて來た。も一通は大輔の許へ宇治の右近こいふ女房から來たので、宮の御隙に女王にさし上げてくれるやう書いて來たのであつた。姫君も時々京へも行つて見たいと思すのだが、あの夕の恐しさを思へばそれも控へてゐられるのだなごも書いてあつた。女王はその人を昔宇治で召使つてゐた女がまた彼處に住んでゐるのだと告げるのだが、宮はあの文面からその人だなと合點せられるのであつた。

宮はわが居間に歸つて思ふ。薫が宇治へ通ふ事は年來の習しであつたが、此頃は時々彼處に泊つて來る事があるといふが、それはあの女をそこに隠しておいたのだと、さき見た手紙から推量された。薫の家の家司の掣なる大内記を召して、事の序に宇治の御堂の事なご問ふ。この男は口數の多い男で去年の秋頃から薫が女を宇治に隠しておく事を話した。宮はその人のかの夕に見た人だと思定めたい、薫があゝしてかしづき居ゑてゐるのは世の常の女ではなからうなご思へば、宇治へ忍んで行く事のみ此頃は心に入れて思ふ。

その頃は春の定例の更迭期なので大内記も特に匂宮家へ出入してゐるので、宮はこの人を語

らうてある夕方馬で身なりも寝して出掛けた。今の妻なる女王に手引してくれた友人の妻に忍んでゆく自分を思ふに後めたくもあるけれども、さうした事よりも今は浮舟に逢ふ好奇心で心は一ぱいになつてゐた。

宇治へ着いたのは宵も過ぎてゐた。夜番の人達のゐない方の垣を少し毀して忍びこんだ。表御殿の南の間に灯影が見える。格子の所に隙間がある所から覗けば女達が打解けて物語してゐる。話の様子では昨今にでも京なる實家へ行つて、そこから石山詣をするらしい、右近ミ呼ばれる女房は

「そんな風においでになりましたら急にお歸りにもなれますまいに、大將様は近日中に屹度いらつしやるさいふではありませんか、お留守にいらしつたら困りますわね」なき云つてゐる。その人ミ覺しきは肘を枕にしてちつち灯火を見つめてゐる目もこ、さては額にかゝつてゐる髪の毛の下り端、二條なる女王によく似てゐる。さういふ身内だらう、上品な美しさは女王には及ばないが、その愛くるしさ、懐しさ、宮はうたゝ心も亂れる。明日は物語でに行くらしい、今夜

を措いてまた機會が来ようとも思はれぬ。心も空になほ内を凝視してゐるこ、やがて人々は寝てしまつた。宮はそこ格子を叩いて薫の聲音を真似て、

「石山へ御參詣ミか仲信がいうたので、驚いて來たのです。早く開けてくれ」こいふたので右近は眞實ミ思つて戸を開けた。するこ

「途中で怖いめに逢つたので見苦しい風になつた、灯を暗くしてくれ」こいふので、燭臺をわきへ押しやつた。

「私の姿を人に見せないやうに、誰も起さないでおいたがいゝ」なき云つてつゝ浮舟の傍に寄り添うた。右近はそこらに寝て居た女達を起して、少し離れた所へ下つて寝た。今來た男を薫でないさ女が知つた時はもう遅かつた。二條院のつらかりし夕なき男が怨むるので、匂宮だミ知つた時は、もしこの事が彼處の女王の耳に入つたらさうしようなき思へば涙がこめさなく流れる。宮もかうして本意はこけ得たものゝ、その後の事を思ふに涙なしにはゐられないのであつた。

夜は明けてゆく。宮はまた来る事の難きを思ふ時、今日はこゝに留らうと思ふ。京では皆が自分を求めて騒ぐだらうが、歸るのはやがて死ぬるやうなものだなと思つて右近を呼んだ。「私は今日は歸らない。供の者には近くのきこかで忍んで居れよ云つてくれ。時方には京へ行つて私は山寺に行つたきでも、いゝやうにいへよ傳へてくれ」なき云つたので、右近は薫でなかつたき知つては、わが昨夜の過失が恐しく、それにしても悲しい姫の運命を思ふ。この秘密を外の人達に知らせまいよ云ひくろめたものゝ、薫からの使者でも今日來たらさうしようなき心も心ならず、初瀬の観音なきを祈つてゐる。京なる浮舟の母からの迎の車が日高くなる頃に來た。右近はこれにはこんな手紙を書いて持たせて歸した。

折悪しく姫君には昨夜から月の障がおりになつて、ほんきに残念がつていらつしやいます。それに今朝はまたいやな夢を御覽になりましたので、今日はお慎なすつていらつしやいます。返すくも残念ですが致方ありません。

辨尼にもその旨を通じておいた。

その日も暮れた。宮はこの女に何故かしら心がひかれるのを覺える。女も薫の端麗な風采にこれほきの男はあるまいと思つてゐたのに、今宮を見ては美しい人もあればあるものだと思ふ。打ちまけて手習したり繪を描いたりするのを見ては若い女の心は怪しうその方に移つてゆかない。宮は若い男女の睦しげに語らふ様を紙に描いて「思ひながらもよう來ない日がつゞくかもしれないが、さうした時にはこれを見て私を思ひ出して下さい」なき心深くその夜も語り明して夜の明けぬ中に歸らうよ、諸共に妻戸の口まで立ち出で、も心は後にひかれる。

世に知らず惑ふべきかなさきに立つ涙も道をかきくらしつ、  
宮は口誦むのを女も限なく哀れと思つて

涙をもほなき袖にせきかねていかに別をさむべき身ぞ  
なき答へる。

その曉は風の音もいよ荒々しく、霜は深く置いてゐた。馬の口は五位二人で取つて木幡山な

き越えてからその人達も馬に乗った。水邊に張れる氷を踏みしだきつゝゆく馬の蹄の音も悲しく心に響く。昔もこの道を通ひなれた身の世にも不可思議な里の契よき宮は思ふ。

二條院へ來ても女王がその人をわれに隠してゐた事が妬さにわが居間に引籠つたが何だか淋しく、心弱くも女王を訪うた。

「私は氣分がわるい。さうなるのかと思ふこころ細くて仕方がない。私があなたを思ふ心は變らないけれど、いつか右大將があなたを贏ち得るのぢやないかなと思はれて仕方がない。かうか思ひこんだ事は誰れでも遂げずにおかんものだからね」なきいふのを女王は今日に限つてをかきな事をいふ夫だと思ふ。夕方薫が來た。あゝした聖僧のやうな風をして宇治の忍び歩きよ、それにしても自分の色めかしい心を常に意見めいた口をきく癖になき思ふものゝ、宮は常にも似ず言葉少なにあひしらふのであつた。薫は宮の惱ましげな様子に、これも慎しやかに見舞なき云うて歸つた。

薫は朝廷の方も少し暇になつたので宇治へ行つた。女は自分の犯した罪を思へば薫に逢ふの

も空恐しかつたが、隠れてゐるわけにもゆかない。男は長く來なかつた言譯なき言短に云つて常に相見ぬ苦しさをほつゝ語り出すのであつた。末長く人の夫として頼むに足るこの人の堅實さは、さうした言葉のはしぐゝにも知る事が出来る。もしあの不始末を知つた時この人はさう思ふだらう、あゝした宮の熱愛に心惹かれてその方に靡いたわが心の浮薄さ、この人に捨てられた時さんなにかみじめな日を送るべき自分だらうなき漸く浮舟の心は悶えて來る。頃は恰も月初の宵月夜である。端近い部屋に二人は出てゐる。山にはうすく霞立ち、川中の洲崎には鳥の影も寒けである。柴舟のきえる邊に宇治橋がほんやり見える。かうした時、薫の心に狙徠するものはありし日の思ひ出であり、女の心を強く占めるものは今より添へる身の憂さであつた。薫はものうけな女を見るにつけ早く京へ移らせて心長閑に相逢ふ日を樂みたい、そしてこの人にかうした悲みはさせたくないと思ふ。夜あけ方に薫は歸つた。

二月の十日頃である。宮中で詩會のあつた日風烈しく吹いて雪さへが急に降つて來た。殿中でふき薫が

さむしろに衣かた敷き今宵もやわれを待つらん宇治の橋ひめ

古歌を口誦んでゐるのをきいて宮は急にかの女が戀しく、席を外して彼處へ急いだ。宇治へ着いたのはもう夜更けだつた。宮は夜の中に歸るのは逢はぬより却て苦しく、さりとてこゝでは人目も憚られて、對岸の人家を求めて女をそこに伴はうと時方に命じてその用意をさせた。侍従さいふ女——右近——一つ心の宮の秘密を知つてゐる女である——が供をして行つた。小舟に乗つて、心細さにつゝ宮に抱かれてゐる浮舟を月影が仄かに照してゐる。橋の小島に暫し舟をこめて歌なき詠み交す。そこは大きな岩のやうな小島で松なきが茂つてゐた。その時女のよんだ歌

橋の小島は色もかはらじをこの浮舟ぞ行方しられぬ

對岸について時方の叔父因幡守の所領なる莊に入つた。日さし出て軒の氷柱の光つてゐるのも寒けである。その日は終日語り暮して、やがて忍びて何處かへ隠したいなき頼しけにいうて、夜になつて水莊へ歸つて、さてかへり見がちに京へ宮は出で立つた。二條院へ入つた匂宮はそ

の後心地惱しく日にそへて青みやせて行くのであつた。

その後浮舟はかれを思ひこれに思つて惱しく暮す日が多かつた。宮からも手紙が来る、薫からも懐しい消息がある、それが同じ日にあつたりする時、女の心はますます思ひ亂れるのであつた。死さいふ事も思はないではない。もの思へばたこしへなき悲しみに囚はれずにはゐられぬ。

薫は妻なる女二の宮の諒解を得て浮舟を迎へる準備を急いでゐる。匂宮はそれを例の大内記を通して知つて、その乳母が遠國の國司の妻になつて下る事になつて、その家が明くので暫くそこへ女を迎へようと思構へてゐる。彼女が國へ下るのは此月の下旬さいふので、即日女を迎へる手筈にしてゐる。薫は四月の十日に思つてゐる。

浮舟は思ひ餘つて暫く母の家へ行つて考へて見たいなき思つたが、丁度少將の妻が子を産む時が近いて騒しいからきて母が宇治へ來た。娘の病み衰へた姿を見て驚くのであつた。母や乳母やさては辨尼なきが二條院の女王の事、三條院の女二の宮の事なき語るを聞く浮舟はいづれ

にしても醜い終りをこる者は自分だらうなと思ふ。川の水音は恐しく響く。  
「いやな水音だこゝ。こんな恐しげな所に辛抱してゐるあなたを大將様も氣の毒と思召して京へお迎へ下さるのでせう」なご母がいふ。人のよく溺れる川である。もしわが身がさうなつたら皆がさう思ふだらう。でも生きて人笑はれになるよりはよからうなご浮舟は思ふ。母は京の家の人手少いこゝなごいつて歸つて行つた。

宮の使ミ薫の使ミが宇治で一所に行き合つたのはその日の事である。薫の使者はも一人の男の後をつけてそれが二條院へ入つて大内記に宇治の返事を渡した事を知つて三條宮へ來た。薫は參内の出かけであつた。そして宮中で大内記が宮に返事を渡してゐるのを見て、あの浮舟が此頃何かなしに物思ひに沈んでゐる原因が判然した様に思つた。そして浮舟を宮に譲らうかなとも思ふ心も起つたが、愛着の念はその心を消してしまふ。又宇治へ消息をやる。

波こゆるころも知らず末の松待つらんこのみ思ひけるかな

浮舟はこの怪しい歌を見て胸もふさがるのであつた。で薫の手紙はもこの通りにまいてた。

お手紙はお出しのさきが違つてゐるやうですから、そのまゝおかへしいたします。氣分も勝れませんから、わざと御返事も失禮いたします。

なご書いてやつた。右近は怪しと思つてそつと手紙を見て驚いた。侍従ミ二人で浮舟の前へ來て何か善後の策を談すのである。侍従はもうすつかり宮の方に傾いてゐる。右近はそれまで宮を頼りこも思はぬやうである。たゞ浮舟の爲め事なく治るやう佛に立願してゐるのである。「死んでしまひたい。ほんこに醜い私だこゝ。こんな事は下々の人にだつてない事だわね」なご浮舟はうつぶして泣くばかりである。

匂宮から二十八日に迎へる事をいうて來たが女は返事をするのも物憂くてそのまゝにしておいた。宮はさうく宇治へ行つて女に逢はうと、例の時方を伴れて馬で來たが、水柱の警固は前より嚴重で、女に逢ふ事は出來ず、やうく侍従に百姓家の垣根の小蔭に障泥あふりを敷いて逢うた。犬の吠聲、夜番の者の火を警める音なご、更け行く夜暗の中に物凄く聞える。かくて本意なく宮は歸つてゆく。侍従は涙にぬれてそれを見送るのである。



浮舟は宮のすゞ／＼歸つてゆく姿を想像しては泣くのである。彼女は經をよむ、親に先立つ罪を宥し給へし經を読む。今の彼女には死より外擇ぶ道が残されてゐない。かう思ふも今更昨夜一言も宮に言を交さなかつた事が悔まれる。行末遠く契つた薫も戀しい。親も、常には思ふ事もない兄弟までが懐しく思ひ出される。二條院の女王なき最期に思はれる人は多い。その夜は一夜まじりもせず明した。翌日匂宮から手紙が来た。

からをだにうき世の中にさめずば何處をはかき君もうらみん

なき書いて返した。薫にも最後の消息をさ思つたがやめた。母から手紙が来た。悪夢をつゞけて見るので氣にかゝる、よく慎んで、近い寺で祈禱でもして貰つたがいゝなき書いて来た。今日を限りのわが命さも知らで、かくまで心を遣うてくれる母の情を思へば悲しくなる。返事は後にまたあひ見ん事を思はなんこの世の夢に心まきはで

なき書いた。夜になる。乳母が

「妙に胸さわぎのする晩だこゝ。夜番の方に氣をつけるやうに云つて下さい」さ云うてゐるの

を聞くも心地苦しく思はれる。自分が死んだら何處に身を寄せるこの人だらうと思ふも、今の覺悟をそれさなしに聞かさうかと思つたが涙ばかり湧き出て物も云はれない。右近が傍に寝るさして、

「物思ふ人の魂は身を離れるさか申しますから、お母様も變な夢を御覽になるのでせう。さなたにお附きになるにしても、はつきり御決心なさいませ。お心さへ決れば手段はさうでも考へられませう」なき歎いてゐる。浮舟は袖を顔におしあて、俯伏してゐた。

### 蜻蛉

浮舟が夜の中に失踪してしまつた事は、水莊の人々にさつては驚くべく悲しむべき出来事であつた。たゞ右近さ侍従にはほゞ彼女の行方は想像されなくてもなかつたが悲しさに異りはない。京なる母は昨日の使の歸らないのを氣にしてまた使をよこした。京からの手紙は

あなたの事が氣になつて眠れなかつたせいか、昨夜は夢も見ず、夜通し魘うなされて、今朝は

気分も勝れません。もうお移りの日は近いのですが、それまでの間私の方へお迎しようと思ひます。この雨が上つたらお迎に参りませう。

なき書いてあつた。右近は昨夜の浮舟の返事を開けて見て、かうまでの覺悟であつたら、一言打明けてくれたらよかつたのになき思ふもたゞ涙である。

匂宮も昨日の返事を見て胸を打たれて、使を宇治に遣はしてその様子を探らせて浮舟の死んだ事を知つて夢かミ怪しまれるので、更に時方に命じて詳しい事情を明にしたいと思ふ。時方は宇治へ来て右近に逢はうとして得ず、侍従に漸く逢うて一切の事を知つて宮に復命した。

雨を冒して母も京から来た。宮の事なきは知らないから、浮舟の入水に思ひ及ぶべくもない。昔物語めいて鬼に噉はれたか、狐に取られたかなきこりこめもない事を考へて泣いてゐる。右近等は所詮いつ迄かくてあり得ない事だ、今の内に宮との關係を母君に打明けた方がよからう。そして世間體を繕うて葬送なきも早くしようと思つたので、そつと他聞を憚りつゝ母に前後の事情をつぶ／＼と涙ながらに語るのであつた。母はわが子がこの荒れ狂ふ川浪に沈んだ事と思

ふに、わが身も共に水に入りたい氣にもなる。

「せめて骸だけでも捜さしたい」いひへり

「さうしてそれが分りませう、もう大海へおし流されて行つたでせう。それに人がかうした事を知つてもいけませんし」なきいつて、車を縁近くよせさせて、故人の脱ぎすべした夜の物やその他手馴れの道具なきを入れて、心知れる法師達を呼んで来て形だけの葬式を営む事にした。母も乳母もたゞ泣くより外の事はなかつた。内舍人なき云ふ人達は

「京の大將様に申し上げて、日を定めて葬儀なきもおつか厳になすつたらい、でせう」なきいふれきも

「是非今晚の中にみつゝ濟ませたいと思ひます。私達にも思ふ事がありますからなき云つて、この車を山の麓へひいて行つて焼かせた。田舎人達はこれあるまじい事に噂しあうてゐた。

薰は母宮の病氣で石山へ參籠してゐた留守にこの事があつたのである。宇治から浮舟の死を病死の體にして通じてあつたけれど、この紛れに誰も薰の耳に入れなかつたので弔問も來ない

のを宇治では外聞もあるものをなき苦しう思ふ。薫は宇治の領地から人が来て詳しい事を知らせたので始めてそれを知つて驚駭の餘りすぐ大藏大輔を使ひして、母宮の御惱のために自ら弔問し得ない悲しみをいひ、あまりに軽々しかつた葬儀の事を詰るのであつた。薫はかくはかなく悲しい報知を得るにつけ、宇治を厭はしい所と思ふ、鬼でも住んでゐるのでないか、何故今まであゝした恐しい所に置いたのだらうなき思ふ。かうした事に思ひ亂れては母宮の御惱平癒の祈願も恐れあるので京へ歸つた。女二の宮へはそれになしに心地惱ましさに暫くえ行かぬ由を云ひやつてひた籠りに籠つて悲しみに浸つてゐる。心ならずも出家をよう遂げずゐるわが身に遁世をすゝめるまで佛の方便で慈悲をかくして、この悲しみを與へ給ふかと思はれて、たゞ勤行三昧の日を送つてゐるのである。

匂宮もその二三日は放心したやうな状態がつゞいてゐたので、人々はさうした怨靈のなす業かこ騒いでゐるが、その中に宮は心がやゝ平靜に歸つて来るに、今更にありしその日の彼女の佛が胸に甦つて来る。人にはたゞ病氣を披露して、かうした泣き腫らした様子を見せまいと、

忍ぶこそすれきたゞならぬ様子は人目について、さうしてあゝ悲しまれるこそか、あれでは宮の命も危いぐらゐるだなき人々が噂するのが薫の耳にも入つたので、宮の秘密もほゞ知られて、やゝすさまじい氣も起る。

ある夕方薫は宮の病床を見舞うた。故六條院の弟なる式部卿宮の喪に當つて薄鈍の喪装をしてゐる薫は、折ふし愛人なる浮舟の喪にも當つてゐるのだこ心の中には哀感を催すのであつた。日頃の悲しみに面やつれて喪服がよく似合つて見える。宮は苦しかつたが逢うた。薫を見るにつけ涙が湧き出るのであつた。薫は浮舟の事を宮に始めて打明けて、

「ほんこにあなたにもお逢ひを願ひたい人でした。でもその願はこほつてゐるのかもしれない。こちらの女王さんには姉妹ですから御殿へも時々上つたでせうから」なき云つて歸つた。薫は宮の悲歎の甚しいのを見て、今更に自分の彼女に對する愛情が顧みられる共、その終焉の状なきも知りたく、宇治へは思へき死者の家を訪うてはそこに籠らねばならぬ事も苦しく、日一日に宇治行を延ばしてゐた。

四月に入つて今宵彼處に思ひ立つ夕方、橘の香も昔懐かしく杜鵑の二聲ばかり鳴いて通つたのも心ひかれて、橘の枝を折つて、

忍び音や君も泣くらんかひもなき死出の日長に心かよは、

こんな歌をそへて匂宮に贈るのであつた。宮は女王と共に昔を偲んでゐた時であつた。

橘のかをるあたりはほゞぎす心してこそなくべかりけれ

なき返した。女王は總てを知つて悲しいわが姉妹の運命を思ふのであつた。宮はぎうしてかう俄かに女が失せたのだらうその邊の消息も聞きたくて、例の時方を使ひして右近を召したが右近は侍従に代つて行つて貰つた。宮は表御殿の方で侍従に逢うた。侍従は浮舟が日頃思ひに沈んでゐた事、その夜はいたう泣いてゐた事なき語つて、

「常に口數の少い方でして、心に思ふ事でも拂々しく仰る事ありませんでしたから、かうした思ひ切つた事をなさらうとは夢にも思はれなかつたのでござります」なき云つて、

「お手紙なきをお焼きになつたことがござりましたが、その時さうして氣のつかなかつた私共

でござりましたらう」なき、夜一夜語り明して二條院に留るべきよしなき宮はいふのを、中陰も果て、からみ答へて院を辭した。

薫も思ひ餘つて、まだ思も明けない中に水莊を訪れて、右近を召して浮舟の死について何くれも問ふのを、右近もいつまでも隠しをはせる事でもないので前後の模様を詳しく話した。薫はなほその生前の事なきを問うて、死の原因を探らうとするので、右近は浮舟の生ひ立の薄倅を結びつけてそれを力説するのを、お返しして匂宮との關係を問はれて、かの二條院の夕から宮がひそかに浮舟を思つてゐる手紙を送つた事は幾度もあつたらうが、浮舟はそれを見も入れなかつたなきいふ。多年通ひ馴れたこの里も今はたゞ厭はしく感じられる。阿闍梨、今は律師になつてゐる山の僧を召して、浮舟の法會の事なき細かにいひおいて歸つた。そしてそのゆかりをたづねて常陸前司の子達の世話もしてやらうなき思ふのであつた。

浮舟の七々日の法要は宇治の律師の寺で嚴修された。薫からも二條院の女王からも懇ろな供養があつた。帝もこの事を聞召して、それほゞに相思つてゐた人を女二の宮に憚つて隠してお

いた事を氣の毒に思召すのであつた。

蓮の花の盛りの頃に、源氏と紫上との爲めに中宮は六條院で八講會を行はれた。法會の最後の日の朝座がすんで御堂の飾を取拂ふ頃、西の細殿の方に女一の宮は居た。折しも薫は法師の一人に用があつて釣殿の方へ来て見るに、皆が退下した後で誰もなかつた。かねて語らふ小宰相の局はこゝだつたに衣すれの音する方を覗いて見るに、部屋の飾は常と違つて几帳なき立て違へて箱の蓋に氷を入れて女房が三人は女童もゐた。その女達が互に氷を取り合ふのを見てゐる人の艶やかさ、美しさ、女一の宮で誰だらう。氷を紙に包んで女房がさし出すのを「いらぬいこよよ、しづくがたれていやらしいわ」なき仄かに聞えるうれしさ。薫はわが妻の宮を昨日見たその姉宮と同じ様で見ようとする幼なさよ。

「お姉宮様からお手紙は来る。」

「いゝえ、近頃はちよつとも。」

「あなたが私の妻になつたからこいつて、およこしにならないのだね。今度中宮にお目にか、

つた時、あなたが恨んでゐるに申し上げよう。」

「いやですわ、そんなない事を仰つては。」

翌日薫は中宮にその事を申し上げた。その後女一の宮からお手紙に添へて美しい繪を送つて来た。中宮からも。その中に「芹川の大將」のまほ君が女一の宮を思ひ侘びて秋の夕暮に出て来た姿を寫したものを見出で、薫はわが身の上に思ひよそへられるのであつた。

この春お薨れになつた式部卿宮の女王を繼母である夫人は殊に愛さないで、自分の兄弟なる右馬頭の妻にしようとしてゐる事を中宮はお聞きになつて氣の毒と思召し、兄侍従も歎くのをあはれみ給うてお手許へ引取つて、女一の宮のお相手としてお置きになつた。宮の君なきいはれてゐる。父宮在世の時は東宮妃にまでお話のあつた女王が時世はいへかうした身の上におちてゐるのを薫は悲しく思ふ。宮はこの人の父宮もかの夢のやうに亡せた人の父宮は兄弟なのだと思ふに、宮の君に浮舟の佛を偲ぶすべもあらうか懐かしく思ひ渡る。

中宮は六條院の御里居が長びいたが、もう暑さも去つたので近々宮中へ還御の御豫定なので

この紅葉の盛りの見られない事を女達は残念がつてゐる。中宮の方で時々景物にめで、管絃の御遊が折々ある。さうした時匂宮も薫も伺候するのを、今は中宮附の女房になつてゐる宇治の宮の侍従は見て、浮舟の薄侍を思はずに居られないのであつた。

薫はあの夏の夕方に見た女一の宮の面影の忘れかねて、今宵しも又かの西の渡殿をたづねて来た。宮は中宮の方へ行つて居られず、女達は打解けて月なき見てゐる時で、箏なきかきなしてゐる者もあつた。宮の君の事を思ひ出して、西の御殿なるその局をたづねて真面目な話なきして歸つた。かく彼を思ひ、此を懐しむにつけても彼の心を離れぬものは宇治の宮の一族の思ひ出である。ある夕暮、すぎ去つた日を追懐して物思に耽つてゐるに、庭の面を蜻蛉が飛び交うてゐる。

ありと見て手には取られず見ればまた行方も知らず消えし蜻蛉かひろう そを見るにつけこんな歌も口誦まれるのであつた。

手

習

その頃横川の僧都といつて高僧が居た。その僧都に八十幾つの母と五十ばかりの妹があつたが二人とも尼になつてゐた。二人の老尼は初瀬に参詣しての歸途奈良坂を越える頃から母の老尼は病氣にかゝつたので、暫く宇治に知人の家があつたので、そこに宿つて僧都にその事を報じた。僧都は今年一年は下山せずに勤行しようと思つてゐた決心も母の病に翻して、急いで宇治へ来た。人々の加持し騒ぐのを家主は折しも潔齋をしてゐる頃なので萬一穢を受けるやうな事があつてはと歎くので、少し容態も見直したので京へ病人を伴れ歸らうと思つたが、方角が悪いので一二日宇治院へ宿かつて移つた。

宇治院は川に臨んで故朱雀院の御料だつたが、荒れて物淋しい廢院である。それでも折々初瀬詣なきの中宿に人々が借りるので粗末ながら設備は出来てゐる。僧都は弟子達を呼んで、「かうした荒れた所には變化へんぷの物でも住んでゐるかもしれぬ。お經を讀んでくれ」なきいふ。

初瀬につき添うた阿闍梨も、同じ位の地位の僧も二人何があるのか下藤の法師に松火を燭させて庭へ下りた。ふみ見るに杜か見え大樹のかけに何やら白い物がひろがつてゐる。灯を明くして見るに何かッそこにゐる。

「狐がばけたのかしら、憎い奴め、見顯してやらう」なき云つて一人は寄つてゆく。一人は恐しさにさうしたものを退くべき印を結んで、それでもちつと見つめてゐる。灯を持った法師はつかくそこへ寄つて見るに、怪しい物の正體は艶々した長い髪をふり亂して大木の根に寄つて泣いてゐる女であつた。僧都もこの事を聞いて、

「狐が人にばけるは昔から聞いてはゐるが見た事はない」なきいひつゝ庭に下りて來た。夜の中に變化か人か見究めよう、眞言を唱へ、印を結びなきしてゐるが、やがて僧都がいふ、  
「これは人だ。決して妖怪なきではない。それにたしかにまだ生きてゐる。ひよつとしたら死人をこゝへ捨てたのが蘇生したのかしれない」

「さうして死人をこんな所へ捨てませう、よし人でも狐狸の類が外から取つて來たのでせう。」

氣の毒な。でも此處は不吉な所ですね」なき云ふ。近くよつて衣を取つて引き起さうとすればますく顔をかくして泣く。やがて雨が降り出した。僧都は見すく生きてゐる人をこんな雨に打たせて見殺しには出來ない云つて、内へ昇き入れて介抱させておいた。  
妹の尼はこの由を聞いて

「私は寺で不思議な夢を見ました。みんな人でせう。逢つて見たいこと」なき云つて行つて見た。そこには若い美しい人が薰高い衣を着て臥てゐた。尼はわが戀ひ悲しむ女が生き歸つて來たかと思はれて、涙ながらついてゐた尼達に奥へ入れた。眼は半眼に開け意識は殆どない。祈禱なきしてもらつて、母の病氣よりこの人の介抱に尼は一心になつてゐる。偶に口をきけば「生きてゐても役にも立たぬ私です。人に知らせずにも一度川の中へつきおこして下さい」なきあるかなきかのか細い聲でいふ外、何も物言はない。下人共が薰大將の妻なる人が急死した事を云ふを聞けば、その人の魂魄を魍魎の類が取つて來たのがこの人でないかなきも疑はれる。やがて老尼の病も快くなり、方も明いたので、この人はまだ恢復しないが、車に乗せて休み

がちに比叡の籠、小野の里なる老尼達の庵室へ伴れて戻つた。僧都は勤行を續けるべく山へ歸つて行つた。宇治から伴れて來た人は生きることもなく死ぬこともなく、同じ状態を持續して四月も過ぎ五月をも送つた。その間かの阿闍梨に加持なき頼んでゐるたがはかゞしい効驗も見えない。思ひ侘び尼は横川へ消息して兄に下山して祈禱する様頼む。僧都もあれを自分が見つけた。こいふのも深い因縁のある事だらう、自分の行法の力を試してみようと思つてまた山を下りた。一夜の僧都の加持は、さしにも頑強であつた物の怪に打ち勝つて、その曉方にはそれがさうさう調伏された。昔は戒行なきも保つてゐた法師が事によつて世を恨むここのあつたもの、靈で美しい女の多くある所でその一人はこり殺し、今またこの姫君のわれから世をはかなむを便りに憑いたのであつた。

物の怪が離れるこ、その人は氣分も爽かに、意識も明瞭になつて來た。あたりを見れば僧形の人で、すつかり知らぬ國へ來たやうに思はれる。過ぎ來し方を顧みてもすべてが夢のやうである。世を憂しと思ひ歎いて皆人の寢靜つた時に戸を押し明けて出た事はわかる。風烈しく川

波の音も恐しかつた。縁の端に足を下して躊躇うてゐるこ、美しい男が來て「こつちへいらつしやい、さあ私の許へ」こ云つて抱くやうにするのを、宮こいつた人のするのだと思つたがやがて知らぬ所へ伴れて行かれて、その男も居なくなつてしまつたのだ、それからさうして過ぎた月日だらうと思へば、たゞ泣くより外はなかつた。庵室の人達は月頃の念願が叶つてこの人の氣分の直つたのが嬉しかつた。尼になりたい、こても生きがひのない世にこ願ふその志で髪なき剃らず、頭の頂の髪だけを少し切つて五戒を僧都から授けた。

尼は殊に嬉しく、美しいその人を見るにつけ、その前身さては入水の動機等が知りたく、賺し問へぎ、彼女はわれながら誰こも過ぎ來し方はえ知らずこのみ答へて、強ひて問へば苦しき思ふ様にたゞ泣くばかりなのが氣の毒さに、それ以上を問はず、かの赫奕姫を見つけた竹取の翁よりも珍しく思つて勞はり侍づくのであつた。この尼はさる貴族の夫人だつたが、夫に別れてたゞ一人の女を力に生きてゐるただれきも、その女も聲を取つて、やがて死んだ悲しみに堪へず出家したのであつた。今此の人——かの浮舟である——を得て、わが女を再びこの世に



見るやうに思はれて嬉しく思ふのであつた。こゝで聞く水音は、宇治のそれより靜かに木立も彼處ほゞ物凄くはなかつた。こゝはかの落葉宮母子の籠つてゐた山莊からもう少し奥にあたつて、山に倚つて建てられた庵室であつた。

浮舟は母の事乳母の事なごが次々思はれる。自分を人並の身分にしようこ焦心してゐた彼女等が自分の失踪後ごんに失望してゐるだらう、自分がこゝにかうしてゐることも知らずに歎き暮してゐるだらう。また自分の心からの味方ごなつてくれた右近の事なごも哀れに思ひ浮べられるのであつた。

こゝに老尼の掣だつた人、今は中將になつてゐるが、その弟は出家して横川の僧都の許で修行してゐるのを訪ねる爲に時々登山するのであつた。或日の登山の折、その道の序に中將はこの老尼の庵室の戸を叩いた。浮舟は中將の一行を見るにつけ、かうした様で忍んでわが許へ通うて來た人達の事が思ひ起される。心細き山住ながら、垣根に匂ふ瞿麥もおもしろく、桔梗、女郎花なごも綻びそめた中を狩衣姿の男達を供にして、同じ裝束の中將が來るのである。年の

程は二十七八にもならうか、容貌も美しい人である。南面の部屋で尼は昔の掣にあつた。話の中に降り來る雨に留められて、なほ暫くしめやかな話をつゞけてゐるのを見てゐるご、そゞろに亡きわが女の事が尼には偲ばれるのであつた。やがて尼が奥へ入つた後で、中將は昔使つてゐた少將ごいふ女を呼んで昔語なごする序に、

「あそこの廊下を來る時、風が簾を吹いた隙から若い女の垂髪が見えたが、こんな庵室に一體ごういふ人なのかね」なご云ふ。少將はたゞ

「お亡くなりになつた奥様のお忘れ難さに物思つていらした折に、思ひもかけずあの方をお見出しになつて、朝夕昔の形見ごおいくしみなのでござります」なご云ふばかりで、詳しい事は云はずにおいた。その中に雨も上り日もやがて暮れようごてこゝを顧みがちに出て行く。

山で弟にあつた時にもその人の事を問うたが弟もよく知らない。山の一夜を語り明して、翌日下山の折にも又庵室に立寄つて、戀々の情を歌によせて少將尼をして浮舟に送れご返事はなかつた。

中將は日を経るにつれ彼女を思つてやまず、秋もや、更けて小鷹狩に托言せて庵室を訪れて折しも十日頃の月のをかしくさし上る山里の夜を尼君達と管絃を遊ぶのもがの人を思へばであつた。姑なりし尼にも忍びかねた心の中をそれさなく洩し、尼も中將の望に添ひたく思ふのであつたけれど、浮舟は今さうした話には耳も傾けないのであつた。

九月になつてこの尼君は初瀬詣を思ひ立つた。浮舟にも同行を勧めたが、彼女は氣分の勝れない事を言ひ立て、肯はずして山里に留つてゐる。さうしたある夜、中將はまた彼女を思つて来た。少將尼達は餘りに心強い浮舟を動かさうとすれど、その夜もはかなく中將は歸らねばならなかつた。浮舟はかうした事に出逢うては、宮の事、薫の事が今更に懐しく思ひ浮べられる。

都では女一の宮が物の怪に悩むて横川の僧都を召される。浮舟は僧都が下山するのを待ち受けて切に剃髪を乞ふのであつた。僧都も一度は止めようとしたけれど彼女の決心の堅いを見て、都からの歸りにこいふ。浮舟は初瀬から尼君達が歸つては本意を遂げる事は出来まいと思ふので、今夜の中にこいふので、僧都も仕方なしに承知して自ら剃刀を取つて額髪をそぎ

落した。少將尼なき驚いて來たけれどさかひはなかつた。

流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩人無爲。眞實報恩者。

なき唱へる聲も山の夜に淋しく響いた。浮舟は感想を歌によんで、手習のやうに紙のはしに書きつけてゐる。中將からまた消息があつた。例の手習のやうに書いた歌を少將尼は封じこめて中將へおくる。かうした所へ初瀬詣の一行は歸つて來た。變り果てた浮舟の尼姿を見た尼君は口惜しき事と思ふ餘りに、兄の僧都をさへに憎い者に怨みそしるのであつた。

僧都は祈禱のひまに中宮にお物語を申し上げる序に三月宇治で一人の女を救つた事、さてはその女が今小野の妹の菴室にゐる事、今度出家させた事なきを申すのを、薫の情人なる小宰相もお側にゐて聞いてゐた。中宮も小宰相もこれがあの薫の思ひ人の行方ではなからうかこころづらうなづかれる節もあつて、

「屹度その人だよ。大將に知らせてやりたいものだね」なき中宮は仰つたが、それを云ひ出すのも餘りに不躰なので誰も薫には知らせずゐた。

中將はかくても猶忘れる間なく浮舟を思ふ。

大方の世をそむきける君なれど厭ふによせて身こそつらけれ

こんな歌をよせたり、兄妹を思つてくれ、はかなき世の物語なきして心慰まうなきいはせるけれど、浮舟は朽木なきのやうに、人に捨てられて世を終へようこのみ思つてゐる。雪も降りついで年は新になつた。山里にも若菜も萌え梅も咲く。かうした折々の景物に托してたゞ手習のやうに歌に日を送つてゐる。經文も此頃では大分誦みおほえて來た。

こゝに大尼君の孫の紀伊守であつた人が此頃京に歸つて來た序に祖母を山里に見舞つて、薫の伴をして宇治へ行つた話をした。薫の愛人が去年宇治で死んだその一周忌の布施に、自分も女の裝束を調じたいが、その裁縫を頼むなきいふのを浮舟尼はさうして涙なくて聞き得ただらう。薫が昨日も彼處で水の面をちつと凝視して落涙の滂沱たりし事、そして宮の柱に

見し人はかけもこまらぬ水の上に落ちそふ涙いさゞせき敢へず

と書いた事なき語るのであつた。菴室の人達は紀伊守の頼んだ縫物をするにつけ、この若い浮

舟の尼姿をあたらしと思ふ。浮舟もまたわが一周忌なき聞くに悲しく、

あま衣かはれる身にやありし世の形見の袖をかけてしのばん  
なき詠むのであつた。

かの一周忌なきも過ぎて、雨しめやかに降る夜、薫は中宮の御所に伺候して、宇治の事を仄かにいひ出で、打沈んでゐるので、中宮は小宰相にかの事をいへし仰るので、薫が退出の序にその局に立寄つた時にその事を云ひ出した。

「私が思つてゐた人の事に似てゐるね。その人はまだ居るだらうか」

「僧都が山から下りて参ります時、尼にして上げたさうでござります。さうするのを皆が惜んださうですが、御當人の強つての言葉でさうしたこ僧都は仰いました」といふ。薫はそこを尋ねたいと思ふが、また宮もそれを聞いては當はおくまい、折角思ひ立つた女の志を無にするやうになるだらうなき思ふ。或は宮が既に知つて中宮にも口きめをしてゐたのかもしれないと思ふ。何にせよ思ひ諦めて、あの世でまためぐり逢ふのを樂しまうなき思ひ返し、思ひ亂れるの

であつた。或日事の序に中宮に浮舟の話をそれきなしに申して見た。中宮はその話をきいた時の無氣味さなき仰つて、匂宮がそれを知つてゐる筈のない事、宮の戀愛の問題では常に心を痛めてゐる事を仰るのであつた。薫の心はまたその女を尋ねる事に傾き出した。中宮は僧都の秘してゐる心をお酌みになつて里の名は口外なさらぬ。さうしても直接僧都に聞くより手段はない。薫は思ふのであつた。

月毎の八日にはきつゝ薬師の供養をする例になつてゐるので、それに托言けて中堂に參詣しそこから横川へ行かうと思つて、浮舟の弟なる常陸前司の子の童をも伴れて山路を分けて登つてゆく。浮舟の母達に知らすのはまだ時でないと思へば、彼女が行ひ澄してゐる心地にも血縁の愛にひかされる事もあらうと、この弟をつれるのであつた。道々も尼姿の人達の中にわが愛人を見出すであらう時のわが心地が思はれる。

### 夢 浮 橋

叡山に上つて、例の薬師の供養をした薫は、その翌日横川へ行つた。従前から祈禱なきの折には僧都を請じた事もあつたが、今度の女の宮の怨靈退散の祈禱にその法驗の顯著めざまなのを見て、一層尊信の念を篤うして深き語らひなきもしてゐたので、僧都もその入來を殊に喜んで鄭重に待遇すのであつた。何かの話の序に

「小野の邊にお知しよ巳へでもおありですか」問ふ。

「ござります。老母が尼になつて居りますが、京に格別いゝ住所すまがもありませんので、私の近くに存じまして彼處に菴室を造つて住ませておきます」なき答へる。薫はやゝ近く寄つて聲をひそめてその家に自分にゆかりある人が忍んでゐるを聞いたが、その人が出家したとか、その事を確めたいと思つてかうした恥しい事を問ふのだなきいふのであつた。僧都は始めてかの人薫の愛人だつたと思つては、剃髪させた事の軽々しさが思はれるのであつた。今更隠し立てするのを知てをかしいので、初瀬參籠の歸路に見た不思議さから、剃髪をさせた事情までを詳しく話すのであつた。薫は夢心地にその話を聞くにも涙がこめさなく流れさうなのを僧都の見